福岡市埋蔵文化財調査報告書　第152集

井相田C遺跡 I

I sô da

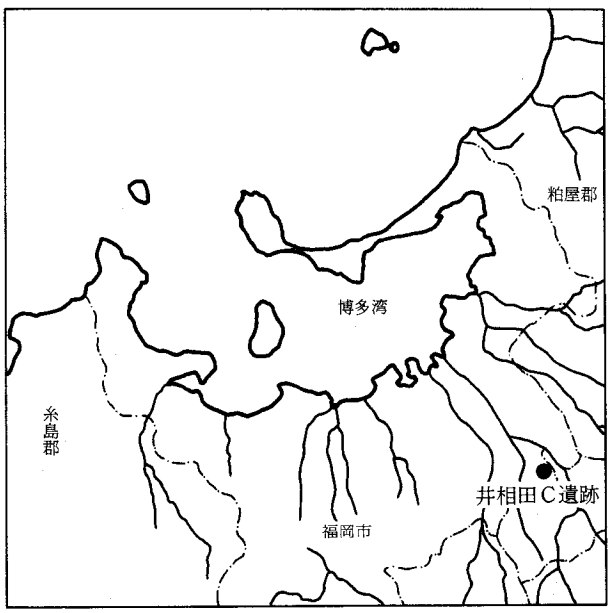
1987

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第152集

I　sô　da

井相田C遺跡 I



1987

福岡市教育委員会

序　　文

九州の中枢都市福岡は、大陸文化享受の門戸として、先史時代から栄えてきました。そのため市内には数多くの埋蔵文化財が分布しています。本市では、特に文化財の保護・活用につとめてきていますが、市内の都市整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書もそうした遺跡の一つで、博多区井相田２丁目の西日本新聞社印刷工場建設に先だって発掘調査を実施した井相田Ｃ遺跡の報告書です。

発掘調査の結果、古代の集落や中世の水田址が姿をあらわし、福岡市域の歴史の空間を埋める資料を得ることができました。

西日本新聞社をはじめとする関係各位の協力に対し感謝の意を表するとともに、本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

昭和62年３月31日

福岡市教育委員会教育長　佐　藤　善　郎

例　言

1．本書は、博多区井相田２丁目の西日本新聞社印刷工場建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1985年５月から12月にかけて発掘調査を実施した井相田Ｃ遺跡第１次調査の報告書である。

2．本書に使用した遺構実測図は、山口譲治・吉留秀敏・杉山富雄・李弘鐘・野村俊之・城戸康利・上方高弘・松田訓紀・金子正勝・藤島博明・井手かすみ・犬丸陽子・大崎洋子・尾崎君枝・坂井照美・藤野洋子・松本幸子・甲斐田嘉子・増田博子があたった。

3．本書に使用した遺物実測図のうち、土器については、吉留・李・梅木謙一・前田達男・石野田誠・吉内素子が行ない、木器については、山口・井手・犬丸・木村絹子が行ない、他の遺物については、山口・李が行なった。

4．本書に使用した写真のうち、遺構写真については、杉山・吉留・山口・上方・松田があたり、遺物については、上方があたった。

5．本書使用の図面の整図については、山口・杉山・李・城戸・土井基司が行なった。

6．本書使用の方位は磁北である。

7．本書は、杉山・吉留・李・城戸の協力のもとに、山口が編集・執筆したものである。

8．本調査出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵、保管していく。

本　文　目　次

第１章　序説
　１．はじめに……1
　２．調査体制……2
第２章　遺跡の位置と歴史的環境
　１．遺跡の位置と立地……3
　２．周辺の遺跡と歴史的環境……3
第３章　調査の概要……6
第４章　調査の記録－古代の遺構と遺物－
　１．大溝と出土遺物……9
　　(1)　大溝……9
　　(2)　出土土器……9
　　(3)　出土墨書土器……20
　　(4)　出土木器……20
　　(5)　その他の遺物……24
　２．掘立柱建物と出土遺物……24
　３．竪穴住居址と出土遺物……54
　４．井戸と出土遺物……59
　５．土壙と出土遺物……61
　６．溝状遺構と出土遺物……83
　７．畑状遺構と出土遺物……88
　８．その他の遺物……89
第５章　調査の記録－中世－……91
　１．水田及び水路及び出土遺物……91
　２．まとめ……92
第６章　調査の記録－古代以前の出土遺物－……93
第７章　結章
　１．古代の集落について……95
　２．おわりに……98

挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡の位置と周辺遺跡の分布 …… 2
Fig. 2　調査区と遺跡地形図 …… 7
Fig. 3　古代の遺構配置図(1) …… (折り込み)
Fig. 4　古代の遺構配置図(2) …… (折り込み)
Fig. 5　大溝（ＳＤ－１）断面図 …… 10
Fig. 6　大溝上層出土土器実測図(1)（須恵器） …… 11
Fig. 7　大溝上層出土土器実測図(2)（土師器） …… 12
Fig. 8　大溝上層出土土器実測図(3) …… 14
Fig. 9　大溝上層出土土器実測図(4)（土師器甕） …… 15
Fig. 10　大溝上層出土土器実測図(5)（土師器甕） …… 16
Fig. 11　大溝下層出土土器実測図(1)（須恵器） …… 17
Fig. 12　大溝下層出土土器実測図(2) …… 18
Fig. 13　大溝出土墨書土器実測図(1) …… 19
Fig. 14　大溝出土墨書土器実測図(2) …… 20
Fig. 15　大溝出土木器実測図(1)（皿・曲物） …… 21
Fig. 16　大溝出土木器実測図(2)（容器・曲物） …… 22
Fig. 17　大溝出土木器実測図(3) …… 23
Fig. 18　大溝出土権実測図 …… 24
Fig. 19　大溝出土カマド・瓦類・砥石実測図 …… 25
Fig. 20　第100・101号掘立柱建物実測図 …… 27
Fig. 21　第102・103号掘立柱建物実測図 …… 28
Fig. 22　第104・105号掘立柱建物実測図 …… 29
Fig. 23　第106～108号掘立柱建物実測図 …… 30
Fig. 24　第109・110号掘立柱建物実測図 …… 32
Fig. 25　第111・112号掘立柱建物実測図 …… 33
Fig. 26　第113・114号掘立柱建物実測図 …… 34
Fig. 27　第115・116号掘立柱建物実測図 …… 35
Fig. 28　第117・118号掘立柱建物実測図 …… 37
Fig. 29　第119・120号掘立柱建物実測図 …… 38
Fig. 30　第121・122号掘立柱建物実測図 …… 39
Fig. 31　第123・124号掘立柱建物実測図 …… 40

Fig. 32　第125・126号掘立柱建物実測図 …… 42
Fig. 33　第127・128号掘立柱建物実測図 …… 43
Fig. 34　第129・241号掘立柱建物実測図 …… 44
Fig. 35　第242・245号掘立柱建物実測図 …… 46
Fig. 36　第244号掘立柱建物実測図 …… 47
Fig. 37　第261・263号掘立柱建物実測図 …… 48
Fig. 38　第268・269号掘立柱建物実測図 …… 49
Fig. 39　第270・271号掘立柱建物実測図 …… 50
Fig. 40　第272・273号掘立柱建物実測図 …… 51
Fig. 41　各掘立柱建物出土土器実測図 …… 52
Fig. 42　掘立柱建物柱穴出土遺物実測図 …… 53
Fig. 43　第13号竪穴住居址実測図 …… 55
Fig. 44　第13号竪穴住居址出土土器実測図 …… 56
Fig. 45　第14・15号竪穴住居址実測図 …… 57
Fig. 46　第82号竪穴住居址及び第14号竪穴住居址出土土器実測図 …… 58
Fig. 47　第88・91号井戸及び同井戸出土土器実測図 …… 60
Fig. 48　方形土壙及び出土土器実測図 …… 63
Fig. 49　第93号土壙出土遺物実測図 …… 64
Fig. 50　第12号土壙及び第11・12号土壙出土土器実測図 …… 67
Fig. 51　第17・20・26号土壙及び第20号土壙出土土器実測図 …… 68
Fig. 52　第84・85号土壙実測図 …… 70
Fig. 53　第84号土壙出土土器実測図(1)（須恵器） …… 71
Fig. 54　第84号土壙出土土器実測図(2)（土師器） …… 72
Fig. 55　第84号土壙出土遺物実測図 …… 73
Fig. 56　第85号土壙出土土器実測図 …… 75
Fig. 57　第87号土壙及び出土土器実測図 …… 76
Fig. 58　第90号土壙出土土器実測図 …… 78
Fig. 59　各土壙出土土器実測図(1) …… 80
Fig. 60　各土壙出土土器実測図(2) …… 81
Fig. 61　第167号土壙墓及び出土土器実測図 …… 83
Fig. 62　各溝状遺構断面図 …… 84
Fig. 63　第292～294号溝状遺構断面図 …… 85
Fig. 64　各溝状遺構出土土器実測図 …… 86

Fig. 65　畑状遺構出土土器実測図 …… 88
Fig. 66　表採及び中世遺構出土古代遺物実測図 …… 89
Fig. 67　中世遺構配置図 …… 90
Fig. 68　中世出土土器実測図 …… 91
Fig. 69　その他各時期出土遺物実測図 …… 93
Fig. 70　古代第Ⅰ期・Ⅱ期の遺構 …… 94
Fig. 71　古代第Ⅲ期の遺構 …… 96
Fig. 72　古代第Ⅳ期・Ⅴ期の遺構 …… 97

図　版　目　次

PL. 1　調査区全景
PL. 2　(1)第12号土壙　(2)第14号土壙　(3)大溝（ＳＤ－１）　(4)大溝（ＳＤ－１）断面　(5)中世大溝（ＳＤ－291）　(6)中世大溝（ＳＤ－291）柵　(7)第292～294号溝（ＳＤ－292～294）　(8)大溝北の柵列
PL. 3　中世水田
PL. 4　第100～105号建物
PL. 5　第106～111号建物
PL. 6　第117～120号建物
PL. 7　第121～123号建物
PL. 8　第124～127号建物
PL. 9　第128・129・241・244号建物
PL. 10　第244・245・261号建物
PL. 11　第263・268・269号建物
PL. 12　第270・271号建物
PL. 13　建物群分布状態
PL. 14　大溝（ＳＤ－１）上層出土須恵器
PL. 15　大溝（ＳＤ－１）上層出土土師器
PL. 16　大溝（ＳＤ－１）下層出土須恵器
PL. 17　大溝（ＳＤ－１）下層出土土師器
PL. 18　大溝（ＳＤ－１）出土人面墨書及び墨書土器
PL. 19　大溝（ＳＤ－１）出土木器
PL. 20　各土壙出土土器

第1章　序　説

1．はじめに

博多区井相田２丁目に、西日本新聞社による印刷工場建設が計画された。これを受けて、埋蔵文化財課（以下埋文課）では、計画地周辺に仲島遺跡群があり、仲島遺跡群の範囲が計画地西側に北流する古川まで広がる可能性があること、計画地に、古代の「駅家」が推定されている（日野尚志氏）ことなどから、1984年７月７日から７月10日まで試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、中世の水田址・水田址下に、古代の柱穴群・土壙・溝・河川・水田址が計画地全域に分布することが確認され、須恵器などの遺物が出土した。この結果を受けて、埋文課では中世水田址の区画・水利状況把握・古代の掘立柱建物群の構成・性格の把握・生活関連遺構・生産活動の場の把握などを目的とした全面的な発掘調査を行なうことを決定した。

1984年８月16日から1985年４月10日にかけて、西日本新聞社と協議を重ね、調査費・調査期間・出土遺物のあつかいなど契約事項がととのい調査契約が成立した。

本調査は、試掘結果による調査目的を明らかにするため1985年５月27日から同年12月27日にかけて実施した。

本調査区は、大野城市仲畑・福岡市博多区井相田に分布する仲島遺跡群の西方約300ｍに位置している。本調査区の試掘以後、仲島遺跡群を国道３号線まで拡張して把握してきた。井相田では、これまで３次の調査が実施され、大野城市では1985年まで５次の調査が実施されて、大野城市側の調査は、『仲島遺跡Ⅰ』から『仲島遺跡Ⅴ』まで調査概要報告書が刊行されている。本調査区周辺地域は、1984年から下水道整備が行なわれており、埋文課では立会調査を行なってきた。この立会調査で、仲島遺跡群と本調査区間に谷部が確認された。今回は、この立会調査の成果を受けて、谷部から西側を井相田Ｃ遺跡として、井相田Ｃ遺跡１次調査報告とする。

今後、井相田Ｃ遺跡と仲島遺跡群の間の調査が進み、仲島遺跡群と一連の遺跡となるならば、仲島遺跡群として包括していくべきであろう。また、仲島遺跡群は、福岡市・大野城市にまたがって分布しており、遺跡名の登録及び調査次数は両市での調整が必要であるといえよう。

井相田Ｃ遺跡は、本調査区を１次調査とし、本調査北側で、1986年から1987年１月にかけて実施した調査を２次調査とする。この遺跡名は、前述した理由により、今後仲島遺跡群に包括される可能性がある。

遺跡調査番号	8502	遺跡略号	ＩＳＣ-1		
調査地地籍	博多区井相田２丁目12-6		分布地図番号	012-Ａ-7	
開発面積	16,500㎡	調査対象面積	16,500㎡	調査実施面積	12,621㎡
調査期間	1985年５月27日～同年12月27日（延べ）170日				

2．調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことは、できなかったが、調査委託者である西日本新聞社をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査及び整理作業は順調に進行したことを明示して、協力に謝意を表する。

調査主体　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財課第2係
教育長　佐藤善郎　　文化部長　河野清一　　埋蔵文化財課長　柳田純考
第1係長　折尾学　　第2係長　飛高憲雄

調査指導　横山浩一（九州大学教授）、渡辺正気、西谷正（九州大学助教授）、日野尚志（佐賀大学教授）、森田勉（九州歴史資料館）

調査担当　山口譲治（第2係）、杉山富雄（現第1係）、吉留秀敏（第2係）

試掘調査担当　山崎純男（文化財主事）、山崎龍雄（第2係）、田中寿夫（現第1係）

事務担当　松延良文

調査補助員　松田訓祀、李弘鐘・土井基司（九州大学大学院）、野村俊之、前田達男、梅木謙一（愛媛大学）、石野田誠（明治大学）、太田睦（九州大学）、吉内素子（熊本大学）、山岸靖治（明治大学）、牟田裕二・池ノ上宏(福岡大学)、城戸康利、上方高弘、福岡大学歴史研究部考古学班

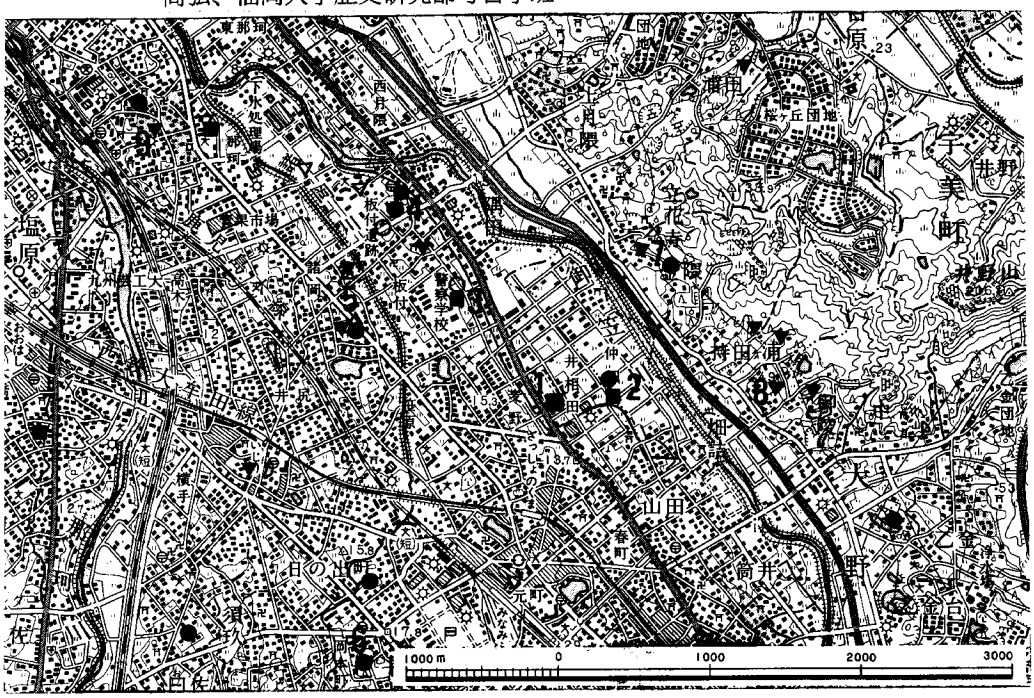


Fig. 1　遺跡の位置と周辺遺跡の分布

1．井相田C遺跡　2．仲島遺跡　3．高畑廃寺　4．板付遺跡　5．諸岡遺跡
6．須玖岡本遺跡　7．金隈遺跡　8．今里不動古墳　9．那珂遺跡群

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置と立地

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川・平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。両河川の中流域から上流にかけては、多くの支流があり、各支流間には、多くの北へ延びる中・低丘陵がみられる。御笠川は、中流域で大きく東へ蛇行し、その西１kmには、標高15m前後の帯状の丘陵が北へ延びており、この間は、標高12.5mから北に向って９m前後に下がる沖積地となり、水田地帯となっている。またこの沖積地の中には、各所に微高地が形成されている。

井相田Ｃ遺跡は、御笠川中流域西岸の微高地上に位置している。本調査区は、西側に国道３号線があり、現代の早い時期に盛土されているため標高13m前後あるが、盛土前は、12,3cm前後だったと考えられる。本調査区は、国土地理院発行の５万分の１地形図(福岡)の北から25.7cm、東から6.3cmの位置にあたる。

井相田Ｃ遺跡は、現在の行政単位を加味するならば、福岡市南東部に位置し、大野城市と境を接している。福岡平野の中でいえば、東部に位置し、南北の関係でいえば、ほぼ中央部に位置している。

２．周辺の遺跡と歴史的環境

本遺跡は、以下の章でのべるように古代の集落及び中世の水田址からなっている。ここでは、古代を中心に触れていくが、本遺跡の位置・立地を考える上で参考になると考えられるので、各時代も概観しておく。

(1)　先土器・縄文時代

本遺跡でも、後述するように、先土器時代ナイフ形石器文化期の台形石器・三稜尖頭器などと、縄文時代の沈線文土器・全磨製石鏃などが出土している。三稜尖頭器は、古代・中世の基盤層である粗砂層（旧河川）から出土しており、那珂君休遺跡でも同器種が出土している。

先土器時代遺跡の調査例としては、本遺跡から北東に1.4～1.5kmで諸岡遺跡、西南西に２kmで井尻Ｂ遺跡がある。前者は、ナイフ形石器文化期のもので、２地点別文化層が確認されており、４次調査では細石刃文化期の遺物も出土している。後者は、無土器の細石刃文化期の包含層が確認された。

縄文時代の遺跡調査例としては、板付遺跡で早期の押型文土器・無文土器期の包含層の検出があるのみであるが、諸岡・那珂君休遺跡などで押型文土器が出土している。

先土器時代・縄文時代遺跡の調査例は少ないが、後世の遺構などから、各遺跡で同時代の遺物が出土しているので、本遺跡周辺の低丘陵及び台地には、同時代の生活が営なまれたと考えられる。

(2) 弥生時代

本遺跡では、包含層・遺構は検出できなかったものの、縄文時代終末期の凸帯文土器・石鏃などが出土しているほか、後期前半代の土器も出土している。

周辺の同期の遺跡としては、半径3km以内に、金隈、仲島、板付、諸岡、井尻、須玖岡本遺跡など須玖遺跡群、中寺尾遺跡などで調査が行なわれ、各種の遺構が検出されている。時期ごとにみていくと、凸帯文土器期の集落・水田址が検出された板付遺跡は、本遺跡の北東1.7kmに位置している。板付遺跡では、後期前半まで集落に伴なう生活遺構が検出され、縄文時代終末期から時期が下がるごとに水田域が拡大している。本遺跡の北0.6kmの仲島遺跡は、前期前半代の土壙が検出されている。諸岡遺跡では、縄文時代終末期の竪穴住居址・前期後半の土壙が検出され、同期の集落が営なまれている。また中期段階では甕棺墓地となっている。本遺跡の北東2kmの金隈遺跡は、前期後半から後期にかけての墓地群が検出されている。本遺跡の南西2～2.5kmに位置する須玖遺跡群では、中期初頭以後の竪穴住居址・中期後半以降の掘立柱建物・前期後半以降の墓地などが検出されている。特に中期後半の須玖岡本遺跡の甕棺墓からの副葬品は、前漢鏡など当時としては択一したものであり、首長墓群と考えられ、同時期の福岡平野の中心地といえよう。

本遺跡周辺は、仲島遺跡での調査例から、縄文時代終末期から人の生活が始まったと考えられるが、この時代、本地域でどんな生活の営みがあったかは周辺地域の調査をまちたい。

(3) 古墳時代

本遺跡では、遺構は検出されなかったものの6世紀後半から7世紀の須恵器が出土し、ヘラ記号をもつものも出土している。

本遺跡周辺の古墳については、堤ケ浦古墳群で触れるので、ここでは集落及び生産遺跡についてみていくことにする。板付・仲島遺跡で竪穴住居址などが検出されているほか、板付・高畑・那珂君休・三筑遺跡で水田・水路（堰など付設遺構あり）が検出されている。三筑・那珂君休遺跡では、水路の横に100㎡未満の水田区画が検出されている。

本遺跡及び周辺は、沖積地に位置していることから水田可耕地と考えられるが水田址は未検出である。

(4) 古代

本遺跡は、以下の章でのべるように掘立柱建物群からなる集落遺跡であり、位置的にも太宰府と海岸線とのほぼ中間にあたるため少し広くみていくことにする。

和名抄によれば、古代の那珂郡は、田来・日佐（日・乎左）・那珂・良人・海部・中嶋・三宅（美也介）・田（山口：也万久知）・板刂（板曳：以多比・伊多比支）の九郷があり、他に伊知郷茨嶋・那珂西郷・美野驛の記載がある。この各郷は、現在の地名から日佐は日佐、田来は五十川高木？、那珂は那珂、三宅は三宅、板刂は板付、中嶋は仲島に比定できよう。本遺跡及び周辺は、中嶋郷に属すると考えられるが板刂郷とも接し、席田・御笠郡とも接していたと考えられる。

本遺跡周辺の古代の遺跡としては、高畑廃寺・仲島・板付などの調査例がある。本遺跡を中心にすると、北へ８㎞に多々良込田遺跡が、北西へ８㎞に鴻臚（コウロ）館推定地が、西へ3.5㎞に三宅廃寺が、南へ５㎞に水城が、南東へ７㎞に都府楼（ロウ）が、東南東７㎞に大野城が、北北東６㎞に駕与丁廃寺などがある。

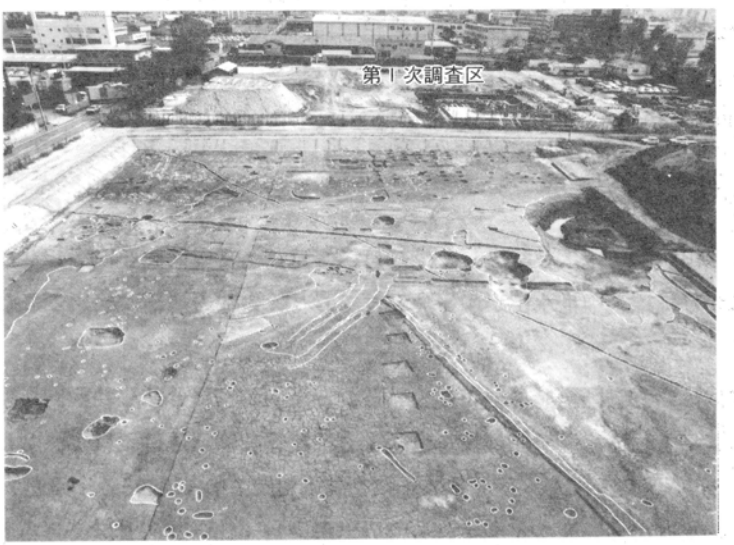
本遺跡から古代の各遺跡の分布をみていくと、官衙・寺院と考えられる遺跡のほぼ中間に位置している。本遺跡での遺構の分布・出土遺物から、席田郡久爾駅の近くで、三郡の境に位置する比較的上の集落といえよう。

(5)　中世

本遺跡では後述するように、550㎡前後の区画をもつ水田址が検出された。

周辺の中・低丘陵・台地には、同時期の集落があり、沖積地には、那珂君休遺跡などでみられるように、本遺跡と同規模の水田址が検出されている。

本遺跡周辺地域は水田として使用されたといえよう。



第２次調査区古代遺構検出状況（北から）

第３章　調査の概要

１．発掘区の設定と名称

発掘区は、試掘調査によって、工場建設計画地全域が対象地となっている。しかし東側は下水道工事・外柵工事が行なわれていること、植樹並木があり、残したいという地権者の意向があったので、2.7m前後の引きをとった。西側は試掘調査の結果、中世の溝が検出されていたが、湧水が多く土止め施設が予算の都合上できないこと、中世水田も流失していること、東側と同じように植樹があることから14mの引きをとった。南北についてはそれぞれ２m前後の引きをとった。

盛土・表土の搬出について協議を重ねたが、搬出場所がなく、東・西に土を移動する方法を取り、東側の東西42m、南北99.5mについて調査を行なった。西側は、遺構の分布状態から北より８m引きを取り、東西17m、南北37mについて調査を行ない、中世溝の延長上に東西５m、南北６mを、古代の大溝延長上に東西５m、南北15mの拡張区をもうけた。　調査区内は、調査対象地が方形区画であるため、この区画に沿った形で一辺30mの方眼を組み１区画として、北東隈から西へ１～６区まで組み、次に南の段へと行き30区まで設定した（Fig. 2参照）。

検出遺構については、柵列をＳＡ、掘立柱建物をＳＢ、竪穴住居址をＳＣ、井戸をＳＥ、土壙をＳＫ、自然河川・溝をＳＤ、炉をＳＲ、水田・畑状遺構をＳＸとし、検出順に通し番号を付した（例、ＳＤ－１、ＳＸ－２……ＳＤ－８……ＳＫ－12……ＳＣ－13……ＳＥ－88……ＳＢ－100）。なお本書の中では、遺構名と遺構記号は併記していく。

堀立柱建物柱穴については、各区の番号を頭に付し、下３桁の番号を付した。例えば10区確認の柱穴は10001・10002…10101というようになる。（Fig.3・4参照）

２．第１次調査の概要

盛土・現代水田耕土・床土を除去し、標高11.4～11.6mで遺構面を検出した。この面の北東部から東側にかけては、中世水田が削平を受けており、古代の遺構が検出された。

(1)　古代

本時期の遺構は、調査区全域に分布しているが、東側が密に分布し、西側に行くと薄くなっている。検出遺構としては、倉庫10棟を含む掘立柱建物42棟（建替えは１棟とした）竪穴住居址４基・井戸３基・土壙墓１基・炉１基・土壙46基・大溝１条・溝175条・柵列７条がある。７・８・13区検出の東西の柵列３条に囲まれる浅い溝群、14・15・20・21区に分布する溝群を畑状遺構６枚とした。試掘調査の結果・大溝（ＳＤ－１）の南・北岸は水田址の可能性ありとなっ

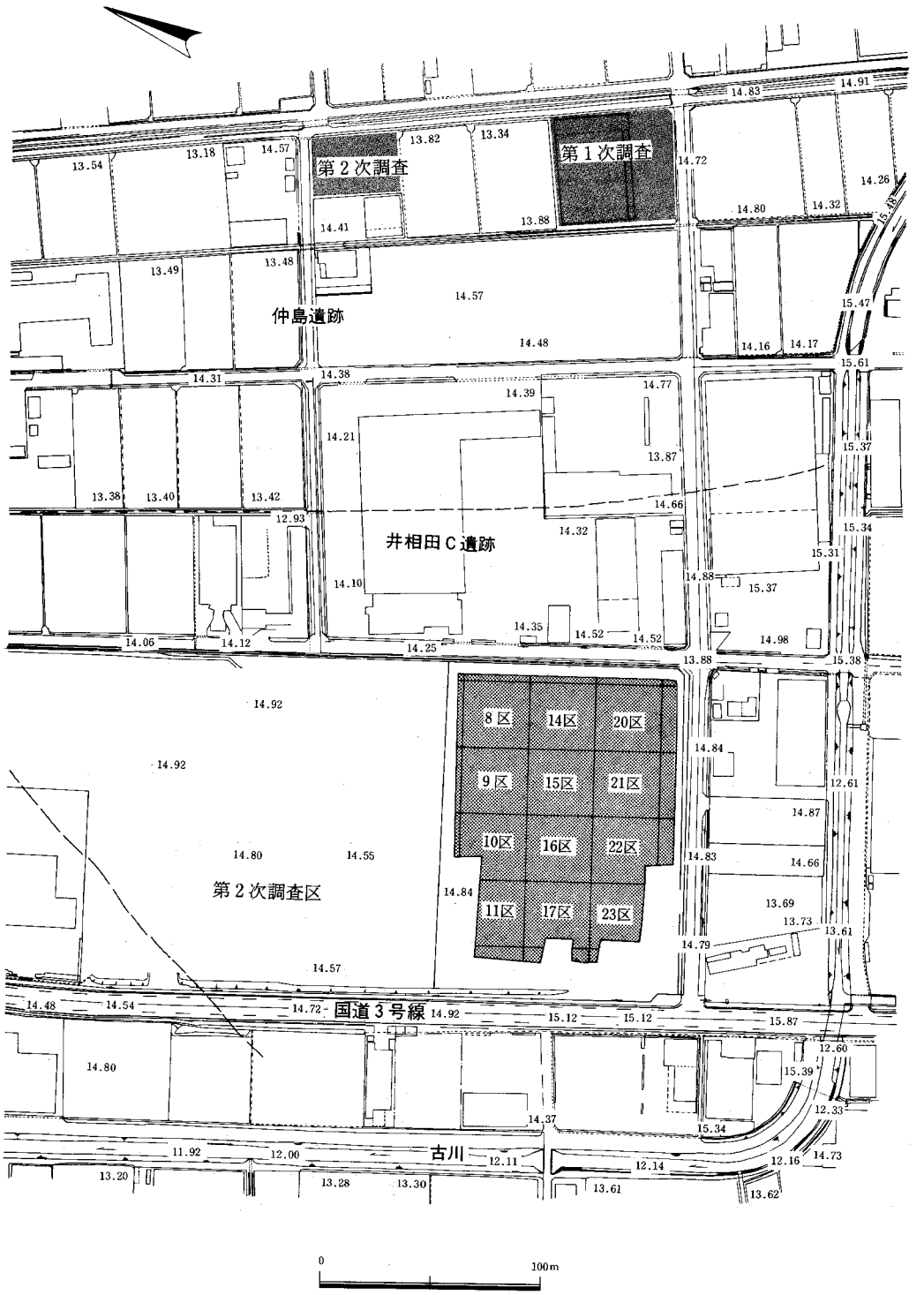


Fig. 2　調査区と遺跡地形図

ている。本調査では、丹念に確認調査を行なった結果、大溝南岸に側って幅1.5mの畦畔状の遺構を検出し、水田面と考えられる所も、黒灰色粘質土で水田耕土と推定され、水田址と考えられるが、南北方向の畦畔が確認できなかった。大溝北岸溝群の北側から第86号（SD－86）に囲まれる間も南岸と同じ土が推積しており、水田址の可能性が高いといえよう（Fig. 3）。

竪穴住居址・各土壙については、出土土器からほぼ時期限定できるが、掘立柱建物については、出土遺物が少なく時期限定できるものは少ない。しかしながら、大溝（ＳＤ－１）は、出土土器から８世紀前半代に掘削され、９世紀後半から10世紀の土器をもつ第292～294号溝との切り合い関係から、９世紀後半には大溝としての機能を失なっている。以上から、本遺跡検出の掘立柱建物群は、大溝とほぼ同時期のものといえよう。

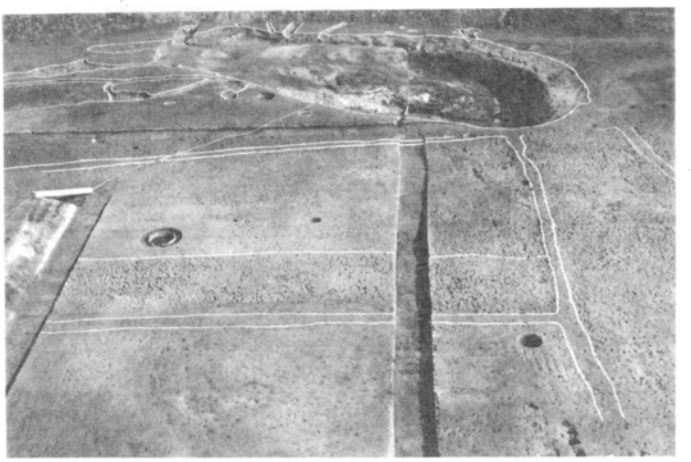
(2)　中世

調査区の南西部の15～17・21～23・27・28区で幅 30～60cm 前後の畦畔に区画された水田址を検出した。また14～18区に東西に延びる第８号溝（ＳＤ－８）を検出した。検出した水田区画は11枚で、うち第290号水田区画（ＳＸ－２９０）で、裏作のものと考えられる８条の小溝を検出した。

３．第２次調査の概要

本調査は、第１次調査区北側に接して位置する調査区で、本地に中学校建設が予定され、建設造成工事に先だって、約10,000㎡について、1986年度に調査を行なった。

調査の結果、中世の水田面２枚及び池畔状遺構・溝及び土壙墓が検出された。中世面下では、古代（奈良時代末から平安時代初期）の掘立柱建物群・井戸・竪穴住居址・土壙・溝が検出された。



第２次調査区中世水田検出状況（西方から）

第４章　調査の記録－古代の遺構と遺物

１．大溝と出土遺物

(1)　大溝（ＳＤ－１）(Fig. 3～5)

本溝は、調査区の南東部（26区）から北東部（11・17区）に流路（Ｎ－83°－Ｗ）をとる幅８ｍ前後の大溝で、1.4～2.4ｍの深さをもっている。また26区では合流しており、合流点では、大溝に直交する杭群があり、井堰の残存と考えられる。

本溝（ＳＤ－１）は20・21区で第234号溝（ＳＤ－234）を16・22区で第297号溝（ＳＤ－297）を切っている。また17区で第292～294号溝（ＳＤ－292～294）に切られ、さらに中世大溝（ＳＤ－291）によって切られている。

本溝の土層は粘質土・シルト・細砂・粗砂層からなっている。１～２層の粘質土は客土と考えられ、３～６層までは常にさらえられている。３～６層までを上層とし、以下を下層とし、遺物は分離して取り上げた。しかし、下層の遺物が古いものが多いものの時期的分離はできない。

本溝からは、多量の遺物が出土しており、以下、土器・人面墨書を含む墨書土器・木器・焼塩土器、権・カマド・瓦類について述していくことにする。

(2)　出土土器（Fig. 6～12)

本溝では大量の土器が出土したが、そのうち時期を示すもの161点について見ていくことにする。他に焼塩土器・墨書土器・古墳時代の土器があり、これについては別項で見ていくことにする。

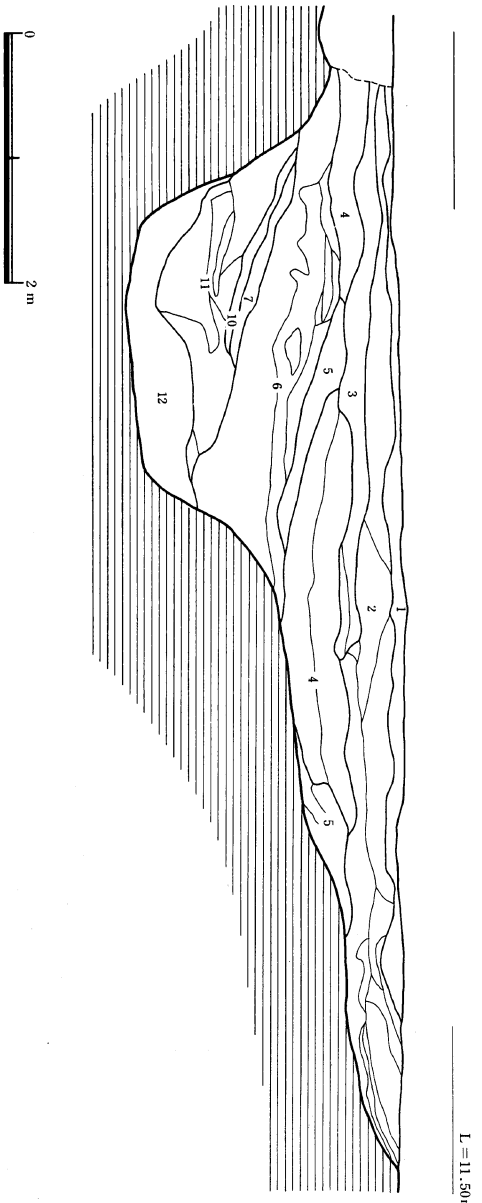
出土土器は、上・下層に分けて取りあげ作図を行なったが、時期差がないため、須恵器・土師器に大別し、各器種ごとに述していく。

須恵器（１～37・45・78～82・119～146)

器種としては蓋・坏・高坏・皿・瓶・壺・鉢・甕などがある。

蓋（１～６・37・114～123)　１に返しがあるほかは、無返しで天井部は回転ヘラ削り調整が施されている。114が７世紀後半、116・117が７世紀末から８世紀前半、他は８世紀中頃から末といえよう。

坏（７～26・45・124～136・139～141)　有高台坏と無高台坏があり、有高台坏から見ていく。口径14～15cmで４cm前後の器高をもつものが多く、口径13cm前後のもの、口径11～12cmで3.5cm前後の器高をもつものとなっている。45は口径23.2cm・器高５cmを測り、８・130も20cm以上の口径をもっている。外底部は回転ヘラ削り後、部分的にナデ調整が施されている。129が７世紀後半、12・14・20などが８世紀前半から中頃、他は８世紀後半から末のものといえよう。



1層：黄褐色～暗褐色粘質土層
2層：褐色～黄褐色粘質土層（砂質土を含む）
3層：茶褐色～黒褐色砂層
4層：黄褐色～黒色粘質土層
5層：灰白色粗砂層
6層：黒色粘質土層（砂を含む）
7層：灰黄色砂層
8層：灰色粗砂層
9層：黒色粗砂層
10層：黒色粘質土層
11層：灰色～黒色砂層
12層：青灰色砂層
13層：青灰色粘質土層
14層：灰白色砂層
15層：黄茶色砂層
16層：灰色粗砂層
17層：灰褐色砂層
18層：黒色粗砂層

Fig.5大溝（SD－１）断面図

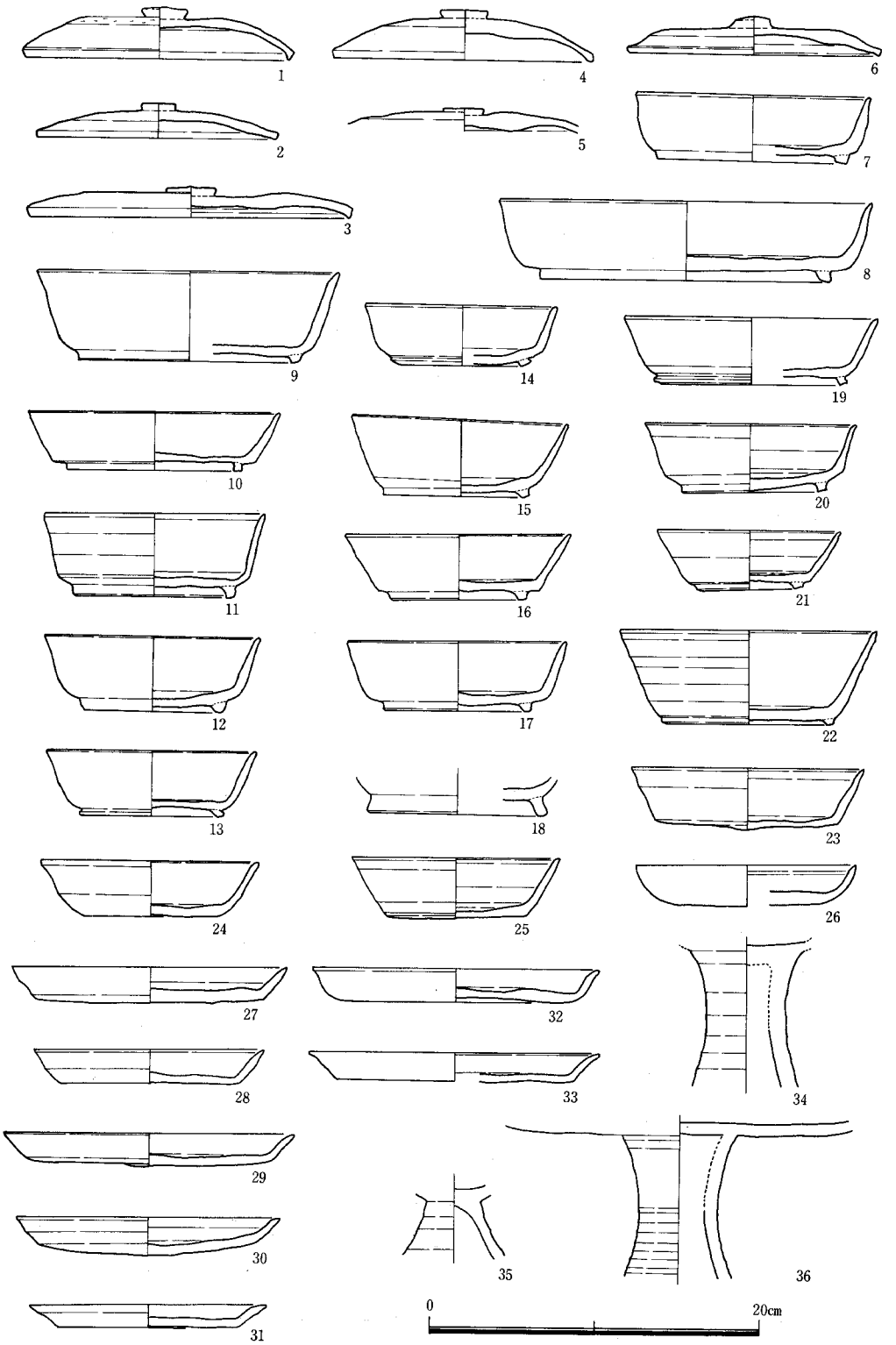


Fig. 6　大溝上層出土土器実測図(1)（須恵器）

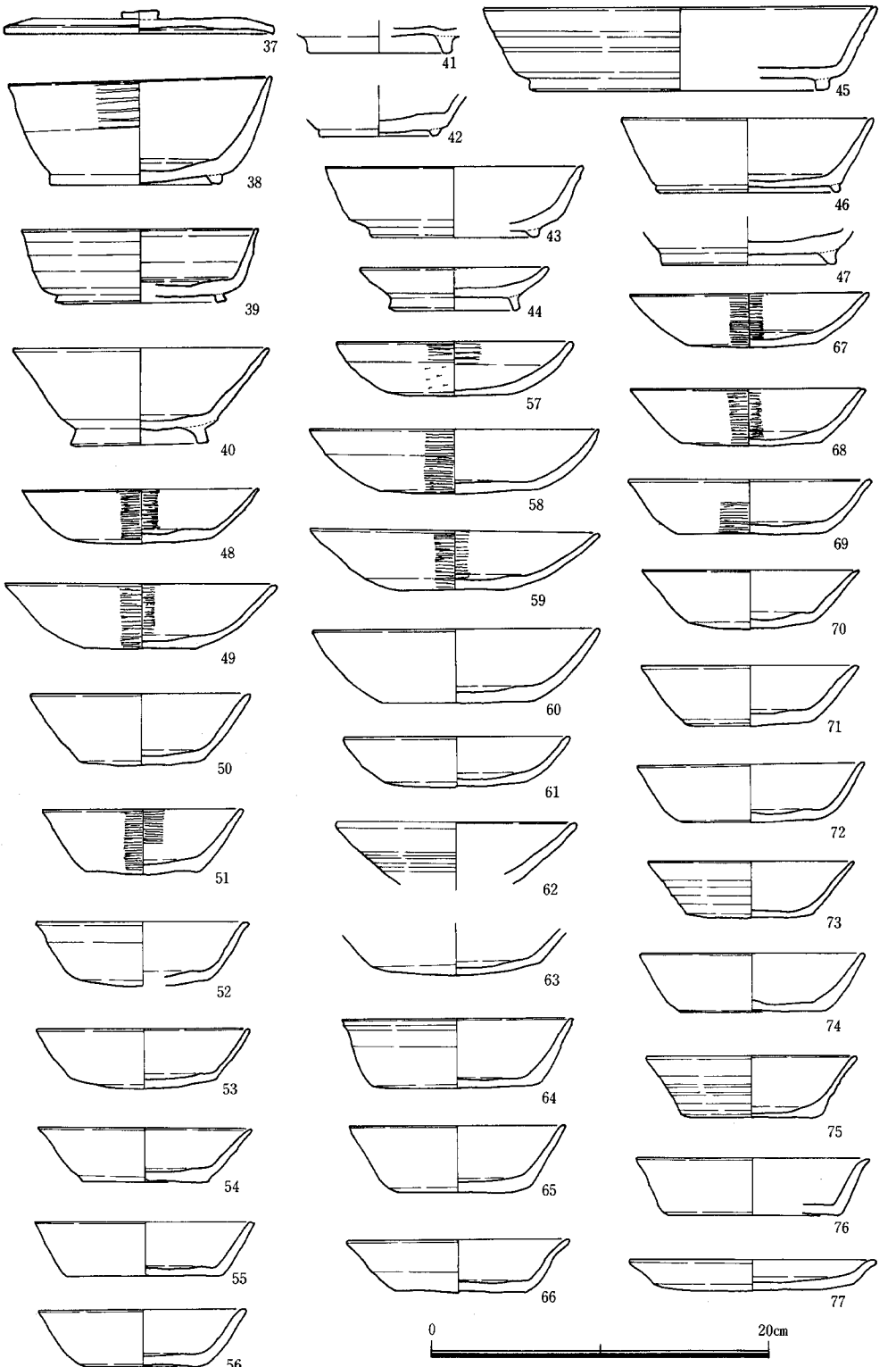


Fig. 7　大溝上層出土土器実測図(2)（土師器）

無高台坏は有高台坏に比べると、量的に少ないが、口径12.5cm前後・器高3.5前後と型がそろっている。体部と底部の境は23・24を除いて明瞭で、外底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。24のみはヘラ切り未調整。８世紀後半といえよう。

高坏（34～36）　34・36は太い脚部をもつ型で、坏部底は回転ヘラ削り調整を施している。35を除いて８世紀後半といえよう。

皿（26～33・137・138）　26・137・138は坏とすべきか。29・32・33が口径17.5cm前後で２cm前後の器高をもっている。31が小さく口径14.3cm・器高1.3cm、27～33の外底部は、ヘラ削り未調整で、体部から口縁にかけてはナデ調整が施されている。８世紀後半。

瓶（144）　口縁部のみで、器面は、丁寧なナデ調整が施され、胎土も精良で、焼成も良い。あるいは長頸壺の口縁部か。

壺（78・79・142・143）　142は、短頸壺で、口縁部のみ丁寧なナデ調整が施され、胴部もナデ調整が施されているが、石英・砂粒が器表にういている。他は長頸壺で、78ａ・ｂは別個体、78は胴部に耳をもち、すぐ上に２条の沈線を巡らせている。胴部、頸部の境は明瞭でＬ字状に立上がっている。79は有高台坏。78・79の外底部はヘラ削りが施されている。８世紀中頃から後半といえよう。

鉢（80・82）　80は口縁端をコの字に整形し、口縁部は内傾している。82の外底部はヘラ削り後ナデ調整を施されている。

甕（81・145・146）　口縁部は異なるものの外面は格子叩き、内面は青海波叩き目が施されている。146の底部は平底か。８世紀中頃といえよう。

土師器（38～44・46～77・83～113・147～160・162～164）

器種としては、蓋・坏・皿・甕・甑がある。

蓋（147・148）　口縁部内外は横ナデ調整を加え、体部から天井部にかけてはヘラ削り後ナデ調整が施されている。８世紀後半か。

坏（38～43・46～77・149～158）　有高台坏と無高台坏があり、有高台坏からみていく。40・152・153は口径が15cm以上あり、高台も高く５～６cmの器高をもつ。外底部は、ヘラ切り後ナデ調整が施され、体部内外面は、ヘラミガキが加えられている。他は口径13～15cm前後で、４cm前後の器高をもち、外底部はヘラ切り、体部内外面ともナデ調整が施されている。前者が９世紀前半から中頃。後者が８世紀中頃から後半といえよう。

無高台坏は、49などのように口径が16cm以上あるが底径が小さく、外底部は回転ヘラ削り、体部内外面はヘラミガキが施されている。48・47なども同じ型であるが、口径が14cm前後と一廻り小さくなっている。51なども同じ型で口径12.5cm前後とさらに小さくなっている。73・75は口径12.5cm前後で、外底部はヘラ切り後ナデ調整を施し、体部外面下半はヘラ削り、口縁から内面にかけては横ナデ調整が施されている。54～56・74・76は、底部と体部の境が明瞭で須

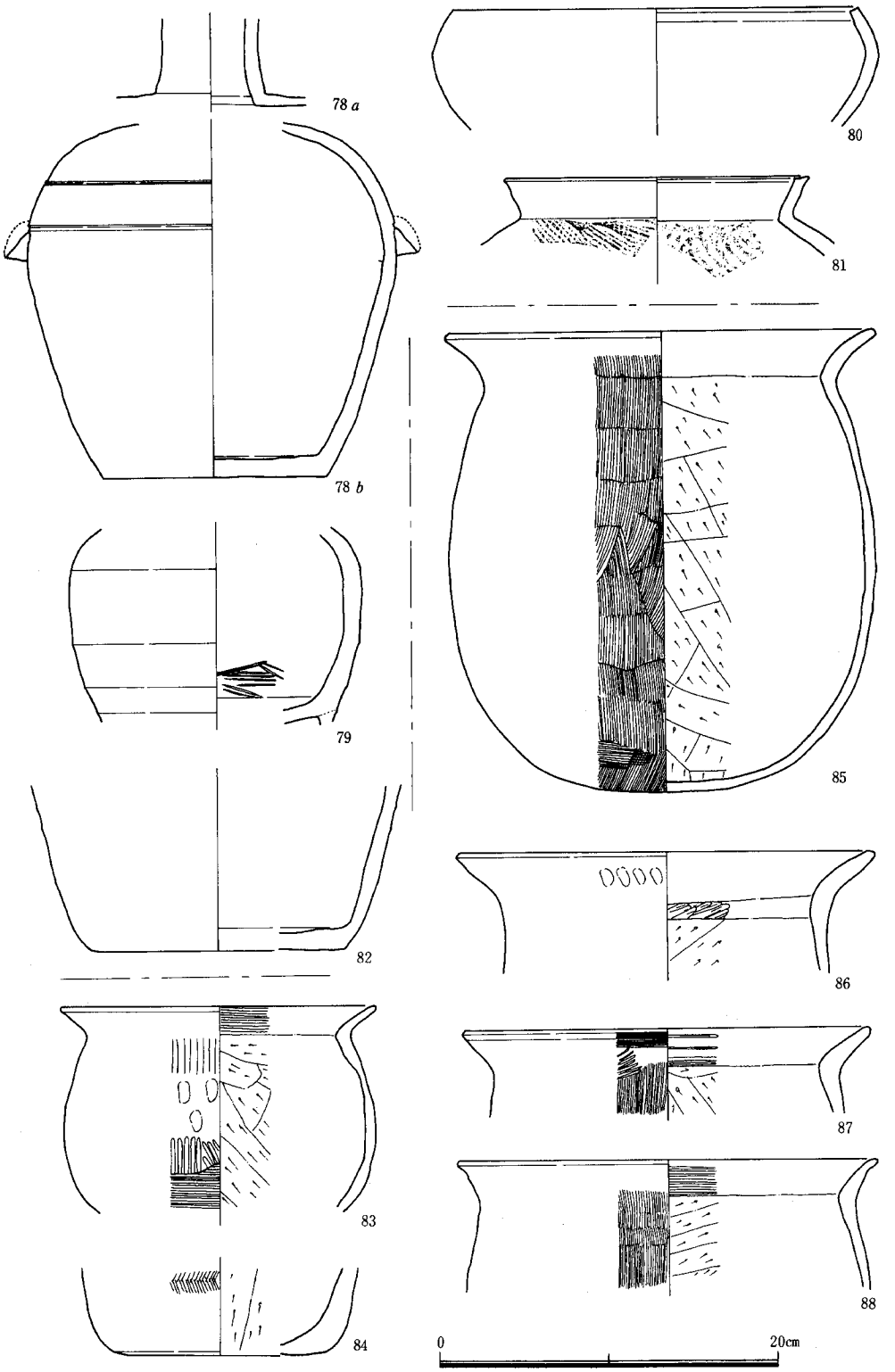


Fig. 8　大溝上層出土土器実測図 (3)

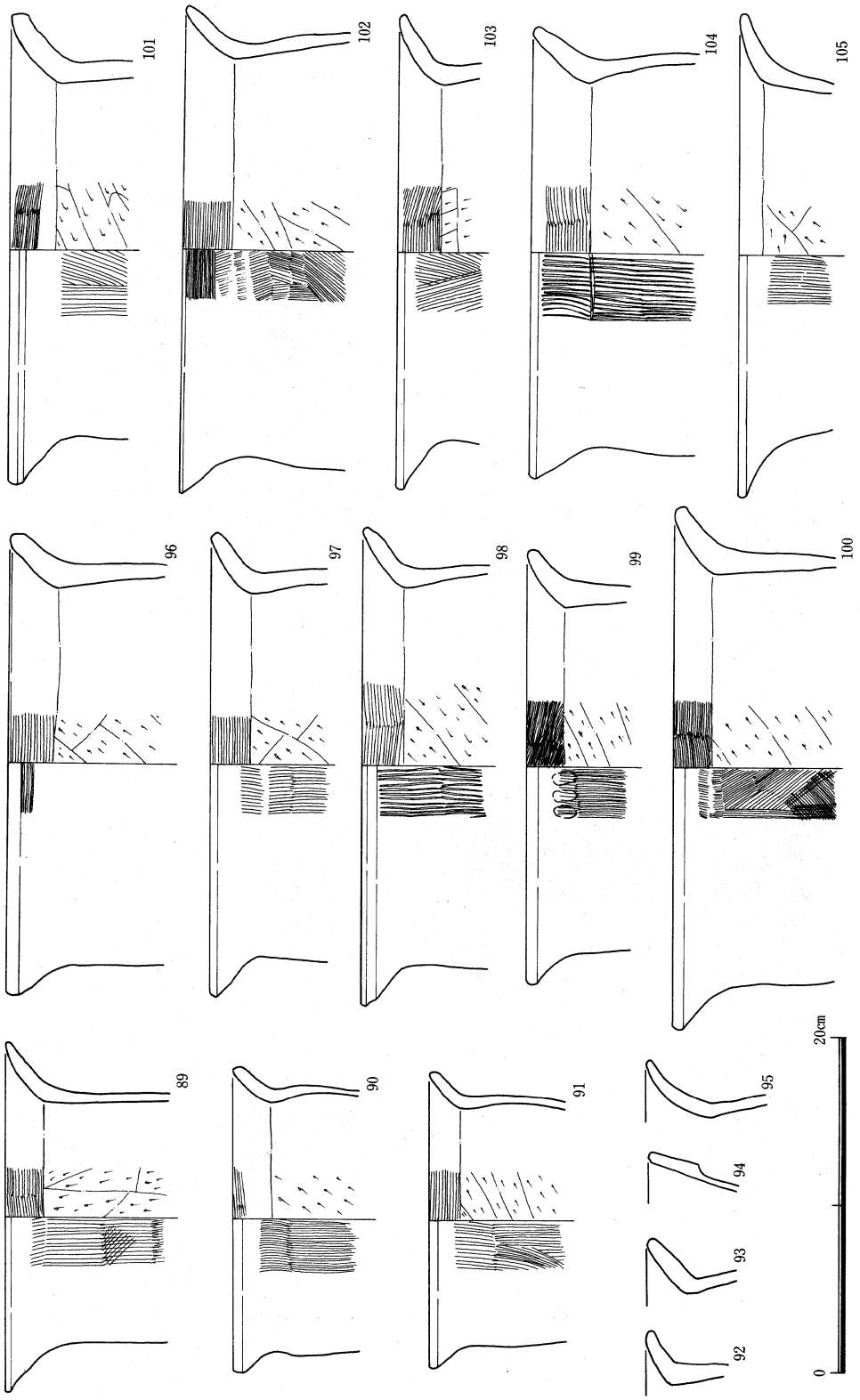


Fig. 9　大溝上層出土土器実測図(4)（土師器甕）

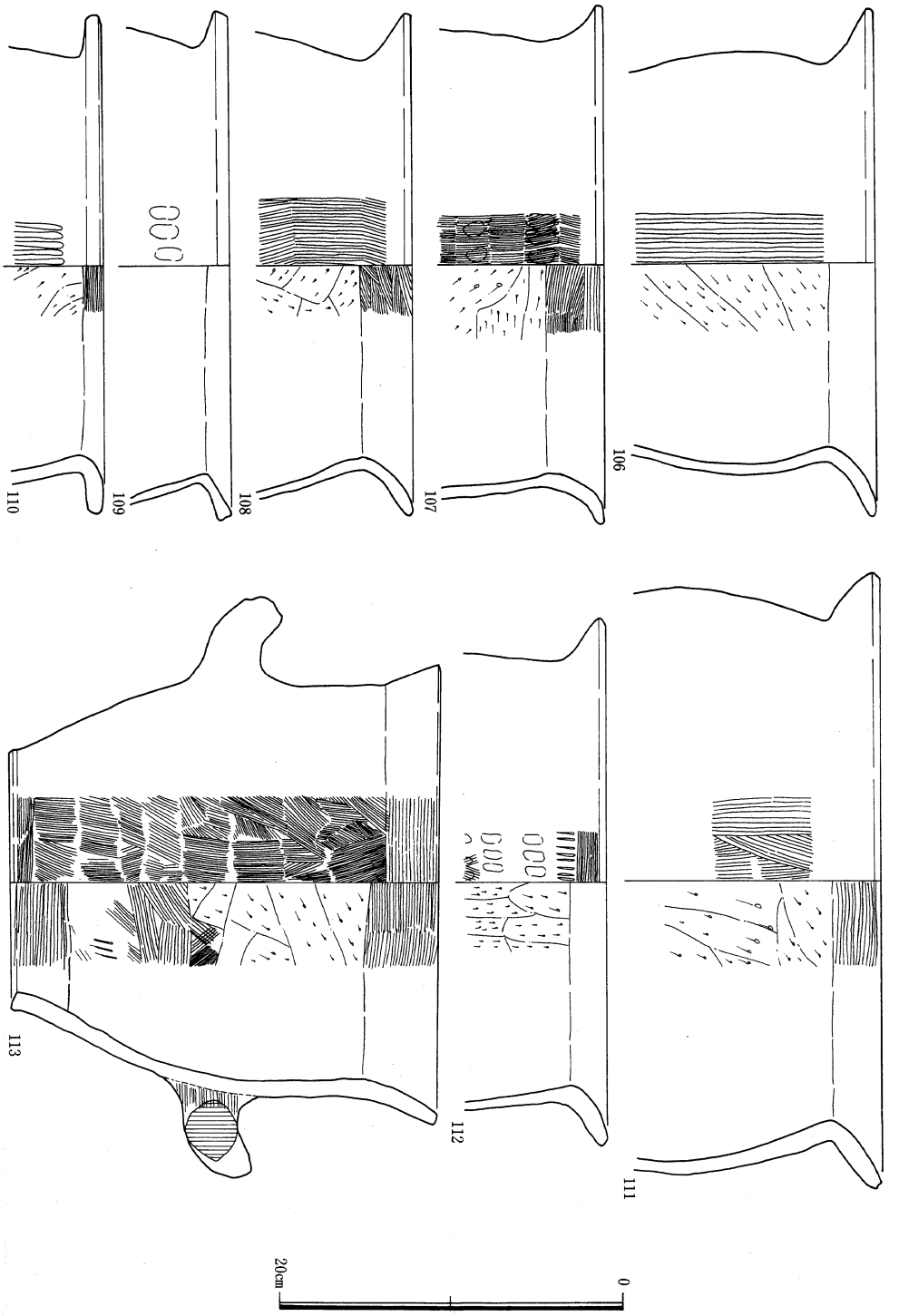


Fig. 10　大溝上層出土土器実測図 (5) (土師器甕)

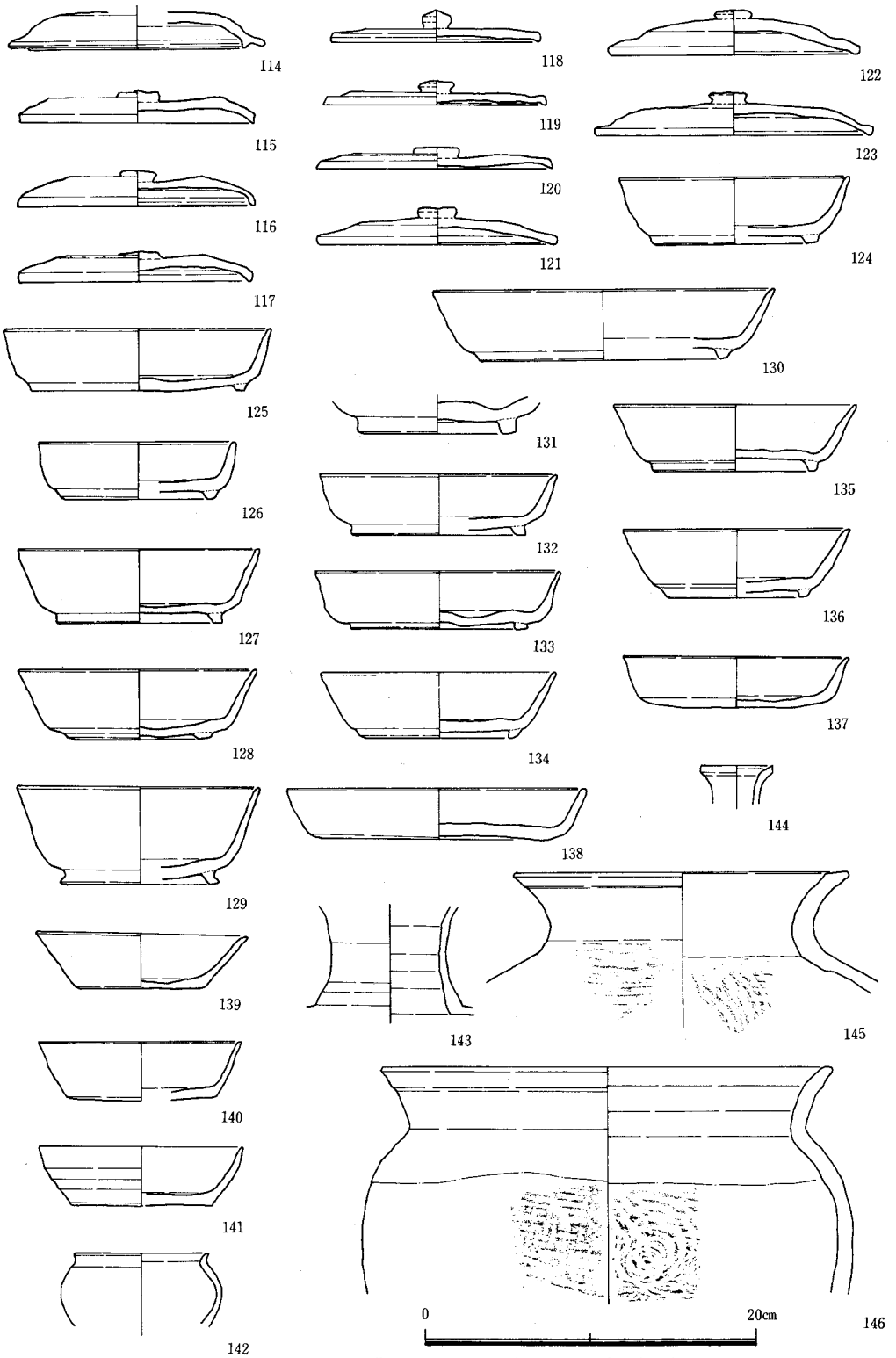


Fig. 11　大溝下層出土土器実測図(1)（須恵器）

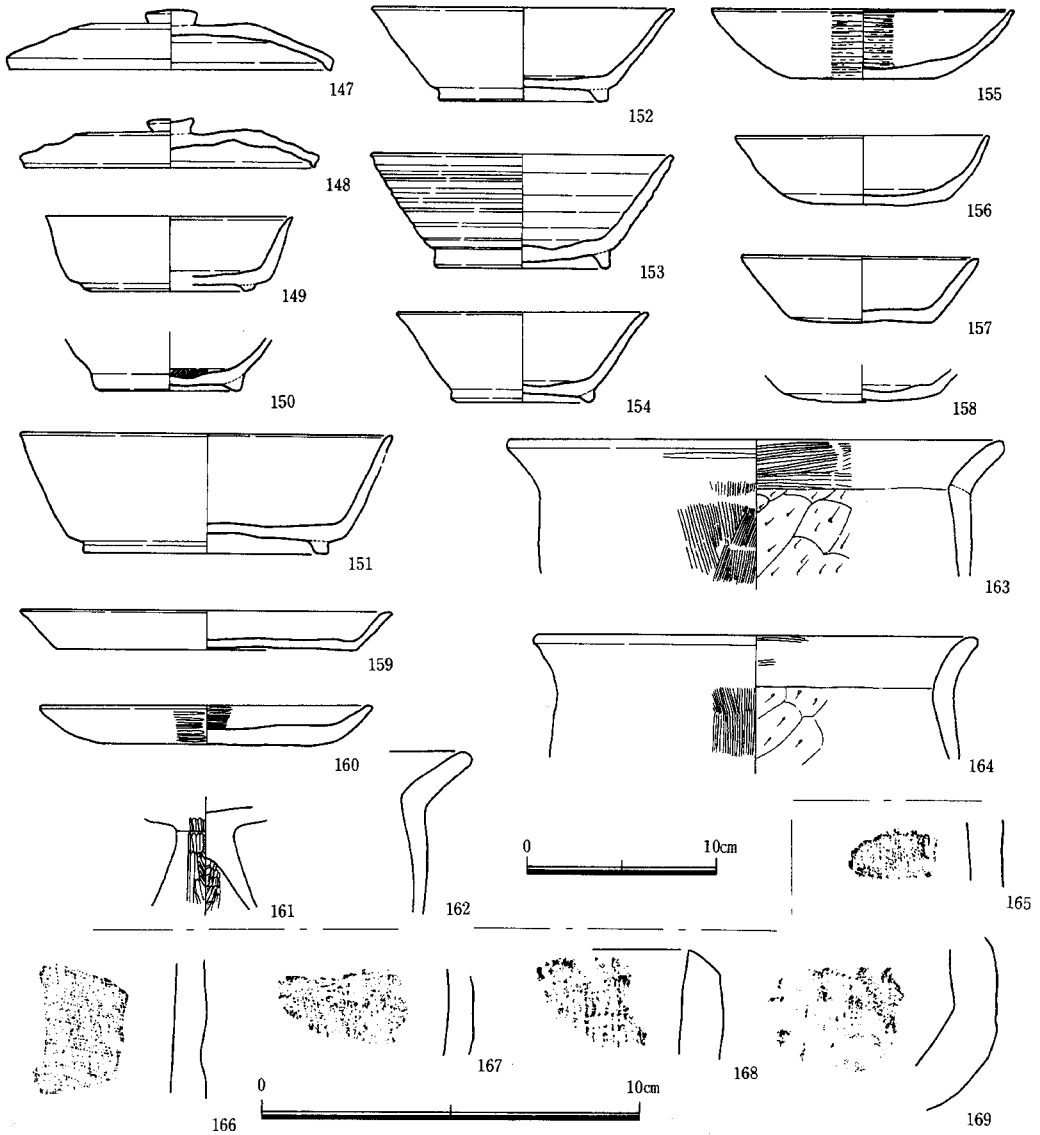


Fig. 12　大溝下層出土土器実測図(2)

恵器坏によくにている。62は口径14.3cmで、体部下半にヘラミガキが施されている内黒土器であり、ＳＤ－292～294の混入品。８世紀後半のものが多いが、66など９世紀中頃のものも含んでいる。

皿（44・77・159・160）　44は比較的高い高台をもち、口径11.1cmで器高2.6cm。外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。77・159の外底部はヘラ切り後ナデ調整を施し、体部は横ナデ調整が施されており、須恵器坏に似ている。

160は口径12.4cm・器高２cmで、外底部はヘラ切り、体部内外面はヘラミガキが施されている。

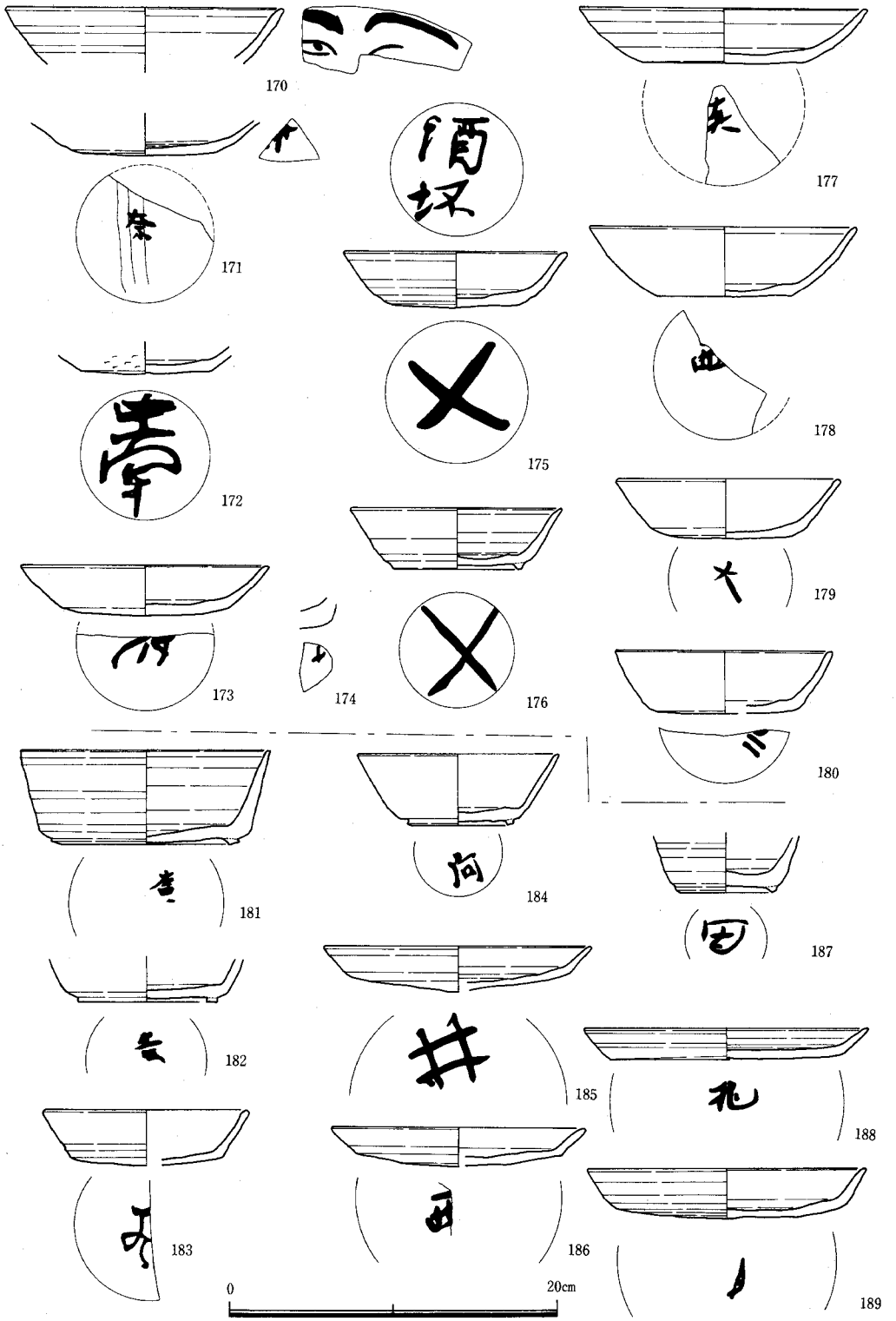


Fig. 13　大溝出土墨書土器実測図 (1)

8世紀後半から9世紀中頃といえよう。

甕(83～112・163・164)　口径18cm前後のもの、25cm前後のもの、30cm前後のものがある。85が復元完形で、口径25.6cm・器高27.4cmあり、胴部最大径は中央部にあり、口径よりやや小さい。口縁部はナデ調整で、器外面はハケ目調整、内面はヘラ削りが顕著にみられる。他の甕は、口縁部の調整が内面屈曲部まで横方向のハケ目調整を施しているものが多く、内面屈曲部下位はいずれもヘラ削りが顕著である。8世紀後半といえよう。

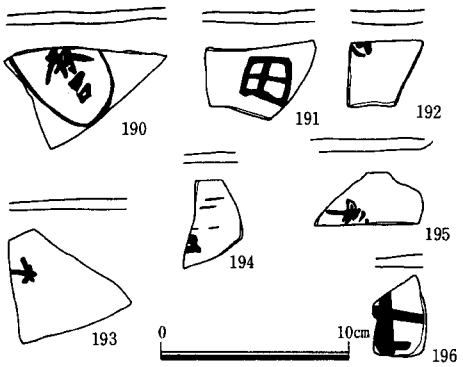


Fig. 14　大溝出土墨書土器実測図(2)

甑(コシキ)(113)　口径28.4cm・器高25cm・底径15.2cmで、口縁部内外面は横方向、体部外面はナナメ方向、底部内外面は横方向、体部内面下半部はナナメ方向のハケ目調整が施され、体部内面上半部はヘラ削りが顕著にみられる。体部中央に張り付け把手をもっている。胎土には粗い石英・砂粒を含み、焼成もよい。

(3)　墨書土器(Fig. 13・14、170～196)

本遺跡では28点出土したが、そのうち27点が本溝（ＳＤ－１）から出土した。

人面墨書土器(170)

土師器坏で、器内外面とも横ナデ調整後ヘラミガキを施している。口径17cm。口縁下の外面に人面を描いているが、破片のため眉と目が分るのみである。8世紀後半か

須恵器(181～196)

181・182・184・187は有高台坏、183は無高台坏、185・186・188・189は皿の外底部のほぼ中央部に墨書がある。190～196も外底部に墨書がある。8世紀後半。

土師器(171～180)

174・176を除いて無高台坏に墨書している。171が外底部中央と体部外面下半部に、175が底部内外に、174が外底部端に、他は外底部のほぼ中央部に墨書している。須恵器にもいえることであるが、土師器はとくに胎土も精良で、焼成も良く、体部内外面はヘラミガキが施されている。8世紀後半から末。

以上26点のうち、「中南」「田」は場所を、「西」は方位を、「麻呂」の丸囲いは人名を示していると考えられる。175は内面に「酒坏」外底に「×」があり儀器として使用されたもので、「×」は日常雑器との区別を示すものか。176も「×」があり、175と同一用途か。171は外底に「奈」があり、体部に「奈ヵ」がある。他に「真」「廣ヵ」「向」「吉ヵ」「井」「大」などがある。

(4)　出土木器(Fig. 15～17)

容器(197～200・215)

197～200は皿で、215は把手付容器、皿は口径17～20cm・器高1～2cmで、丁寧な削り加工で

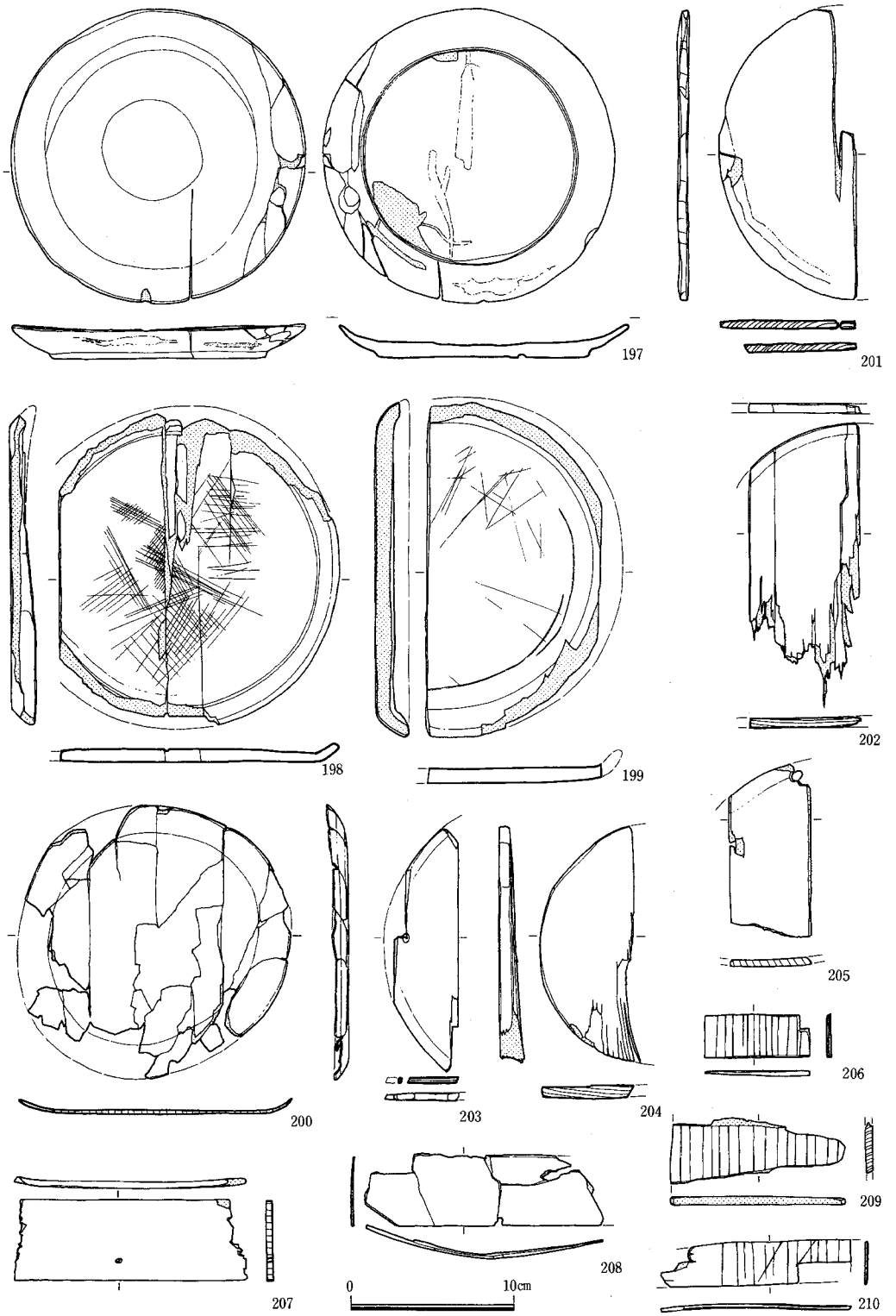


Fig. 15　大溝出土木器実測図(1)（皿・曲物）

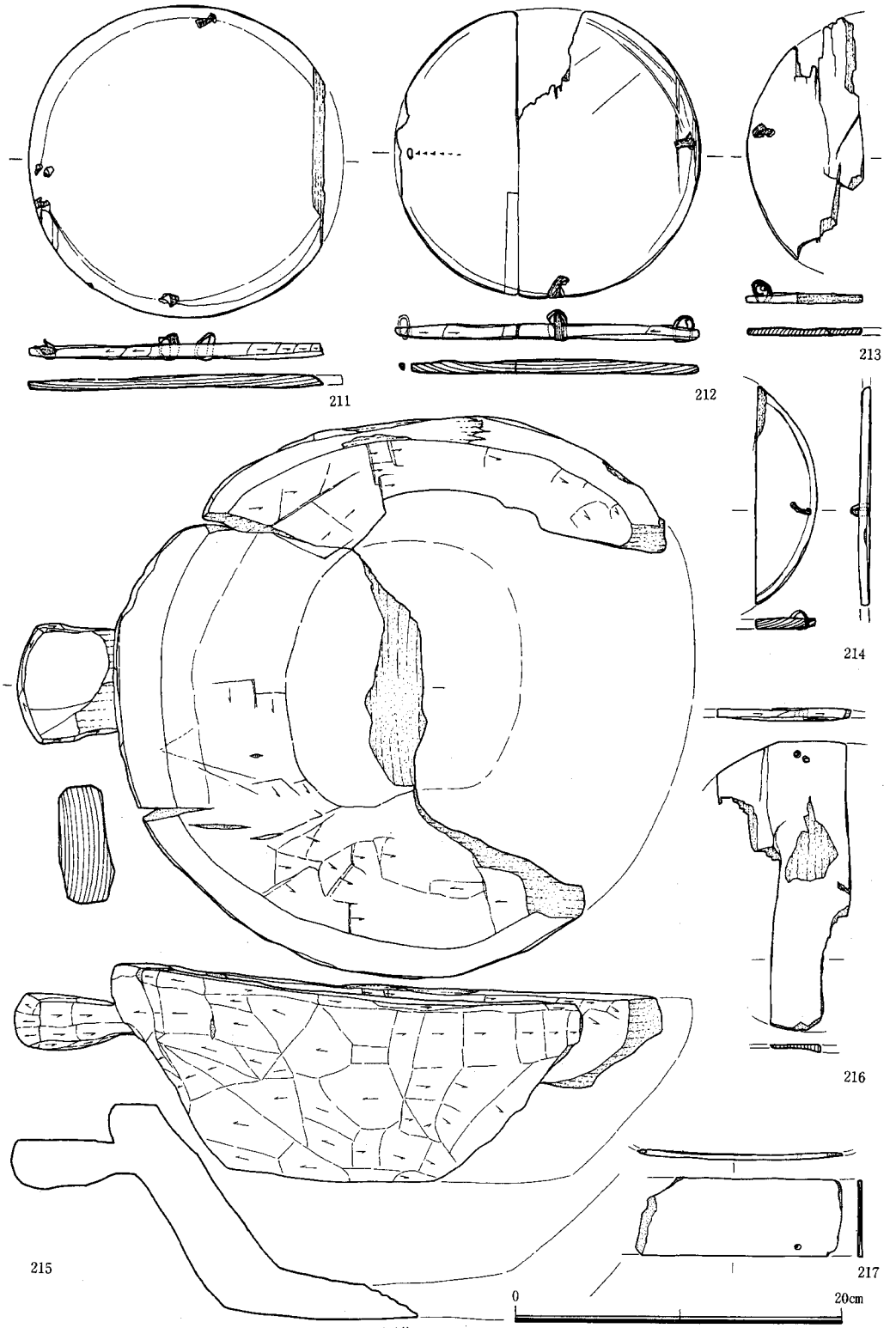


Fig. 16　大溝出土木器実測図(2)（容器・曲物）

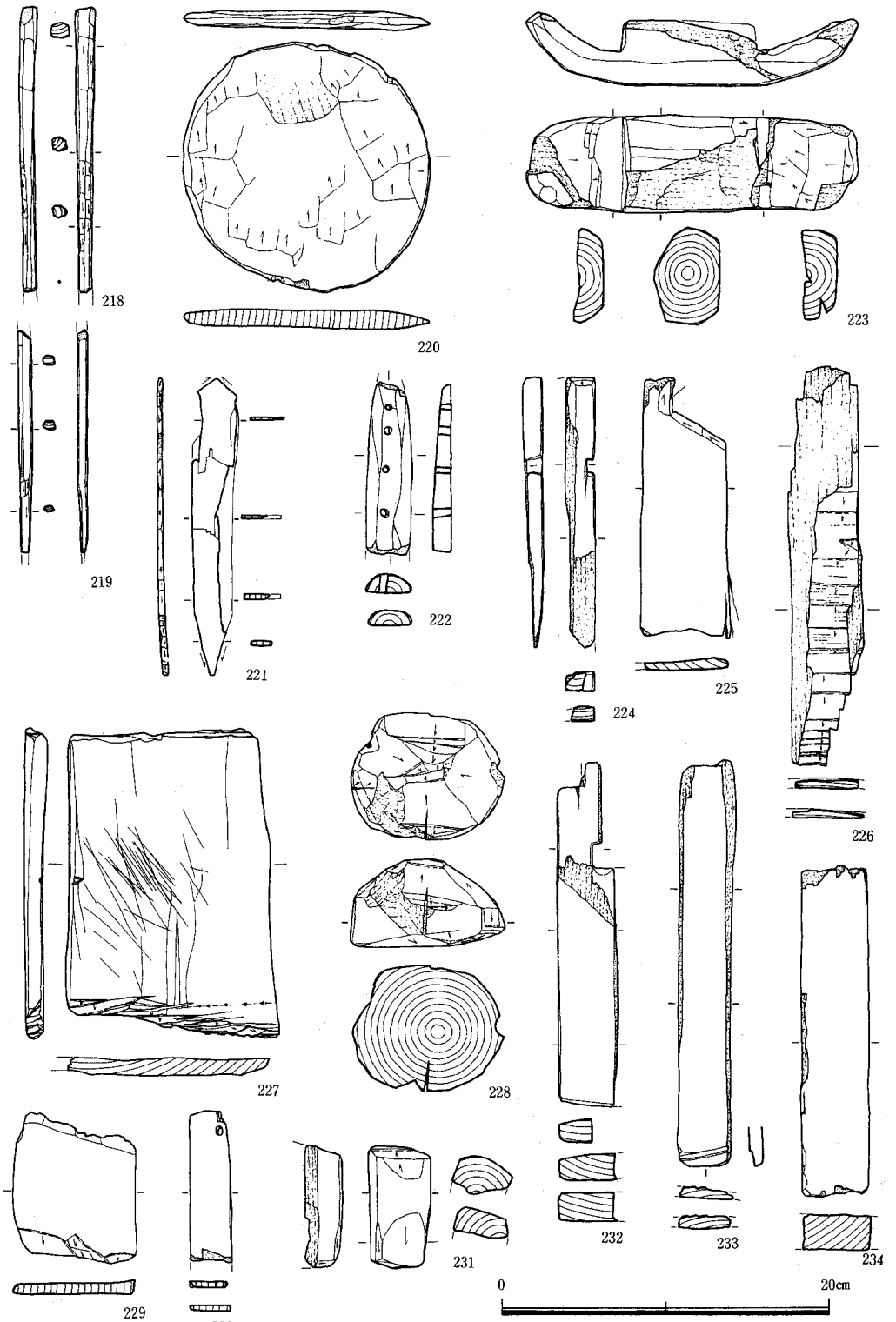


Fig. 17　大溝出土木器実測図 (3)

整形している。200は、柾目取り材を用い、削り加工整形後、器内外面に黒漆を塗布している。215は、杉の角材を挎り抜き、細かい削り加工を加え整形し、把手を造り出している。器内口径約40cm、内底径約13cm、器内高11cmの鉢状に仕上げている。

曲物（201～217）

201～205、211～216は蓋（又は底板）で、他は枠、211・212は径19cm前後で、内側に枠固定痕跡が見られ、4ヶ所で枠と板を固定したと考えられる桜皮が残っている。すべてスギを用いており、板目材使用のものが多いが、201・213・216のように柾目材使用のものもある。枠もスギを用いている。

その他の木製品

218・219は同一個体か。はしと考えられる。221はスギの厚さ3㎜前後の柾目材を用い側面を削り加工によって、頭部、基部を造り出している。墨痕はみられないが、木簡用材と考えられる。223は芯持ち材を用いた模造船。220は柾目材を用いている。臼玉（ウスダマ）か。222は、小木を縦割りし、直交する形で小孔を等間隔で穿っている。

(5)　その他の遺物

焼塩土器（Fig. 12、165～169）

168が口縁部、169が底部近くのほかは体部片で、器外面は丁寧なナデ調整が施され、内面は布圧痕が見られる。

権（Fig. 18）

石製で、長さ4.3cm、幅2.5cm、厚さ1.3cm、孔径0.6cm、重さ19.85g。器表は研磨を加え、穿孔は片側から行なわれている。

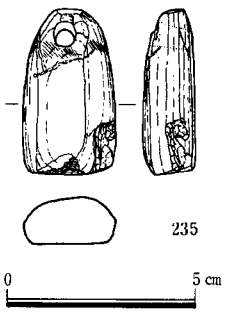


Fig. 18　大溝出土権実測図

以上のほか、把手付の移動式カマド（236～238）、搏（239）、道具瓦、平瓦、丸瓦など瓦類（240～246）、砥石などが出土している。

2．掘立柱建物と出土遺物

本遺跡では、総柱10棟を含む42棟の掘立柱建物（以下建物とする）を検出した。建物の主軸については表（Tab. 1）で表わし、柱穴間の間隔については、挿図の中に注記しているので、ここでは、建物の位置、遺存状態、遺物について述していくことにする。

また柵列7条についても、ここでふれていくことにする。

(1)　第100号建物（SB－100）（Fig.20・41、248）

9・10区検出の建物で、本調査検出建物群の中では最も西側に位置している。9410～9413・9400・10001～10007の12個の柱穴からなる2×4間の建物である。柱穴の遺存状態は40cm前後で、柱穴掘り方は径40cm前後の円形プランをもち、柱痕跡の観察から、径20cm前後の円柱を用

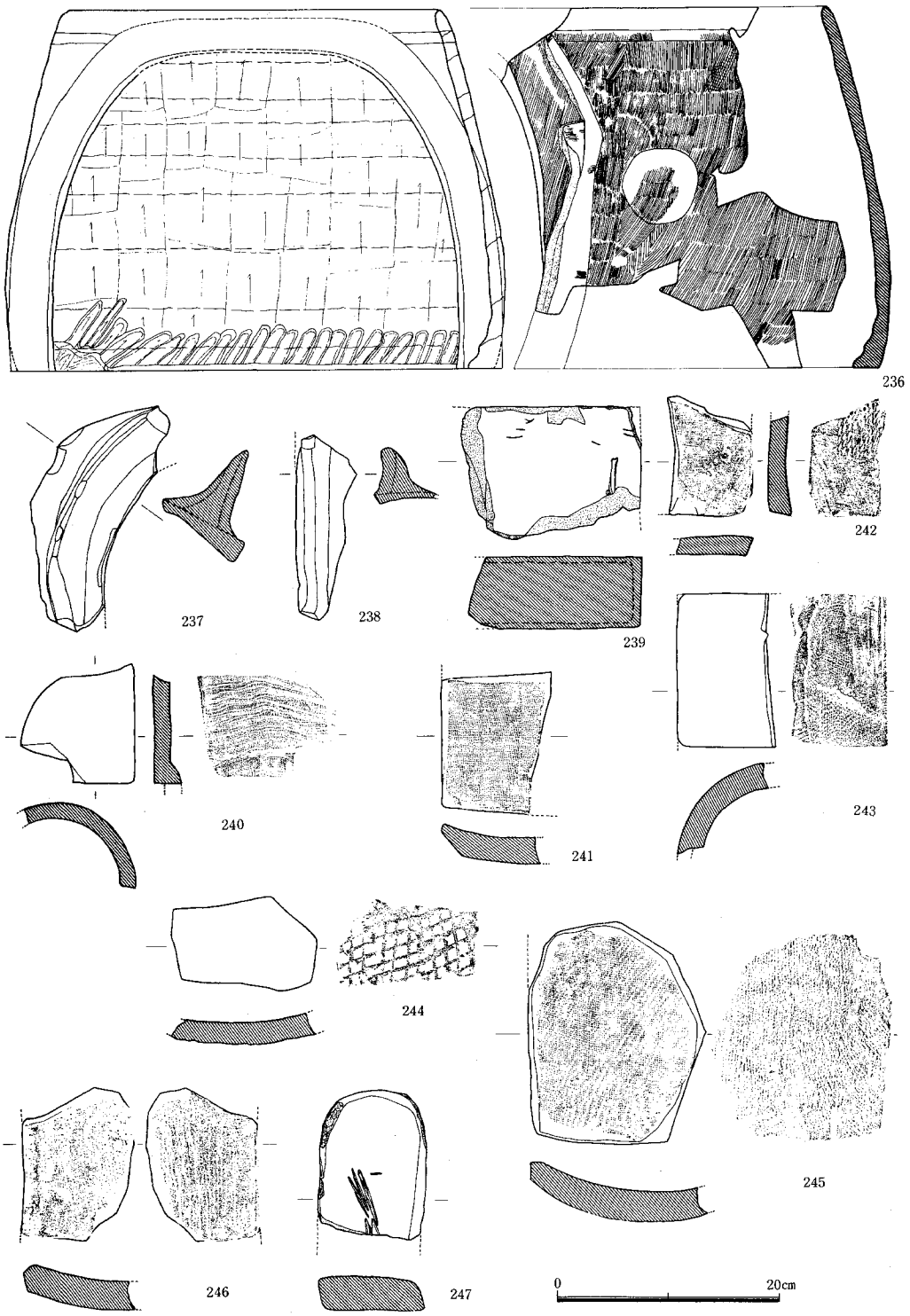


Fig. 19　大溝出土カマド・瓦類・砥石実測図

いたと考えられる。

248は柱穴9410から出土した須恵器蓋で、８世紀後半期のものといえよう。

(2)　第101号建物（ＳＢ－101）(Fig. 20)

９・10区検出でＳＢ－100の南側に位置している。9440～9444・10031～10035の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。梁行の差が大きいが、柱穴がこの周りで検出できないことから独立した建物と考えられる。柱穴の遺存状態は40cm前後である。

(3)　第102号建物（ＳＢ－102）(Fig. 21・41、249)

９区検出で、ＳＢ－103、ＳＤ－77を切っている。3015・9210～9217の９個の柱穴からなる２×２間の総柱建物で倉庫と考えられる。柱穴の遺存状態は40cm前後である。

249は柱穴9211から出土した須恵器坏の口縁部片である。

(4)　第103号建物（ＳＢ－103）(Fig. 21)

９区検出で、ＳＢ－102に切られ、ＳＤ－77を切っている。ＳＢ－104は、建物配置からＳＢ－102と同時期と考えられることからＳＢ－104に先行するといえる。9214・9216・9217・9223・

Tab. 1　掘立柱建物一覧表

遺構番号	規　模	主軸方位	出土遺物番号	時　期	備　考	遺構番号	規　模	主軸方位	出土遺物番号	時　期	備　考
SB-100	2間×4間	N-27.1°-W	248	Ⅲ期		SB-121	2間×3間	N-66.1°-E		Ⅱ期	SK-89を切る
SB-101	2間×3間	N-21.5°-W		Ⅳ期		SB-122	2間×3間	N-79.1°-E	283～286	Ⅳ期	SB-245を切る
SB-102	2間×2間	N-17.1°-W	249	Ⅳ～Ⅴ期	総柱 SB-103を切る	SB-123	2間×3間	N-53.2°-W		Ⅰ期	SK-83 SD-96に切られる　桁行一面箱
SB-103	2間×2間	N-28.7°-W		Ⅲ期	総柱	SB-124	2間×3間	N-29.1°-W	287～292	Ⅲ期	SK-84を切り、SD-140・170に切られている
SB-104	2間×3間	N-16.5°-W (N-19.9°-W)		Ⅳ～Ⅴ期	建替え有り SB-103、SD-77を切る	SB-125	2間×2間	(N-28.6°-W) N-33.1°-W	293・294	Ⅱ～Ⅲ期	SD-171・221を切る。総柱　建替え有り
SB-105	2間×2間	N-25.5°-W	250・251	Ⅳ～Ⅴ期	総柱SD-77を切る	SB-126	2間×3間	(N-19.6°-W) N-16.0°-W	295	Ⅳ～Ⅴ期	建替え有り
SB-106	2間×3間	N-19.4°-W	252	Ⅳ～Ⅴ期	SD-77・79を切る	SB-127	2間×3間	N-13.7°-W		Ⅳ期	
SB-107	(2間×3間)	N-32.0°-W		Ⅲ期		SB-128	2間×3間	N-21.4°-W		Ⅳ期	
SB-108	2間×3間	N-13.0°-W	253～256	Ⅴ期		SB-129	2間×3間	N-25.4°-W		Ⅲ期	
SB-109	2間×3間	N-12.6°-W		Ⅳ期		SB-241	2間×3間	N-20.9°-W		Ⅳ期	SD-86を切る
SB-110	2間×？	N-10.4°-W	257	Ⅴ期	梁行一面廂	SB-242	1間×3間	N-51.2°-W		Ⅰ期	SD-140・170に切られる。SK-84に切られる
SB-111	2間×3間	N-26.5°-W	258	Ⅱ～Ⅲ期	SD-33に切られる 建替え有り	SB-244	2間×5間	N-15.0°-W		Ⅳ～Ⅴ期	桁行二面廂、建替え有りSB-113 SD-51 SB-112を切る
SB-112	2間×3間	N-27.0°-W	259	Ⅱ～Ⅲ期	※	SB-245	2間×3間	N-24.1°-W		Ⅱ期	SB-122、SD-8に切られる。
SB-113	2間×3間	N-37.6°-W	260	Ⅰ期	SB-112・224 SD-51・54・56に切られる	SB-261	2間×3間	N-27.9°-W		Ⅲ期	SK-73、SD-8に切られる。
SB-114	2間×2間	N-21.7°-W		Ⅳ期	総柱	SB-263	2間×3間	N-78.0°-W (N-77.6°-W)	297	Ⅰ期	総柱
SB-115	2間×3間	N-18.0°-W	261・262	Ⅳ期	桁行一面廂	SB-268	2間×2間	N-50.6°-W		Ⅰ期	SD-191を切る。SD-176・185～189に切られる。総柱
SB-116	2間×3間	N-23.6°-W		Ⅱ期		SB-269	2間×2間	N-29.0°-W		Ⅲ期	SD-190を切る（総柱？）
SB-117	2間×2間	N-64.0°-E (N-67.7°-E)	263～268	Ⅲ～Ⅳ期	梁行一面廂、建替え有り SB-118、SA-133を切る。	SB-270	2間×2間	N-46.0°-E		Ⅰ期	SD-194に切られる。（総柱？）
SB-118	2間×3間	N-23.4°-W	269～278	Ⅱ期	SA-133を切る。SB-117に切られる。建替え有り	SB-271	2間×2間	N-31.5°-E		Ⅲ期	SK-161、SD-218を切る
SB-119	2間×3間	N-21.1°-W	279・280	Ⅳ期		SB-272	1間×3間	N-80.4°-W		Ⅰ期	
SB-120	2間×3間	N-30.1°-W	281・282	Ⅲ期	SK-87、SD-96を切る。SD-8に切られる。	SB-273	(2間×2間)	N-33.0°-W	298・299		（総柱？）

※ SA-41、SD-39、SB-113を切る。
桁行一面廂　建替え２回有り。
SB-244に切られる。

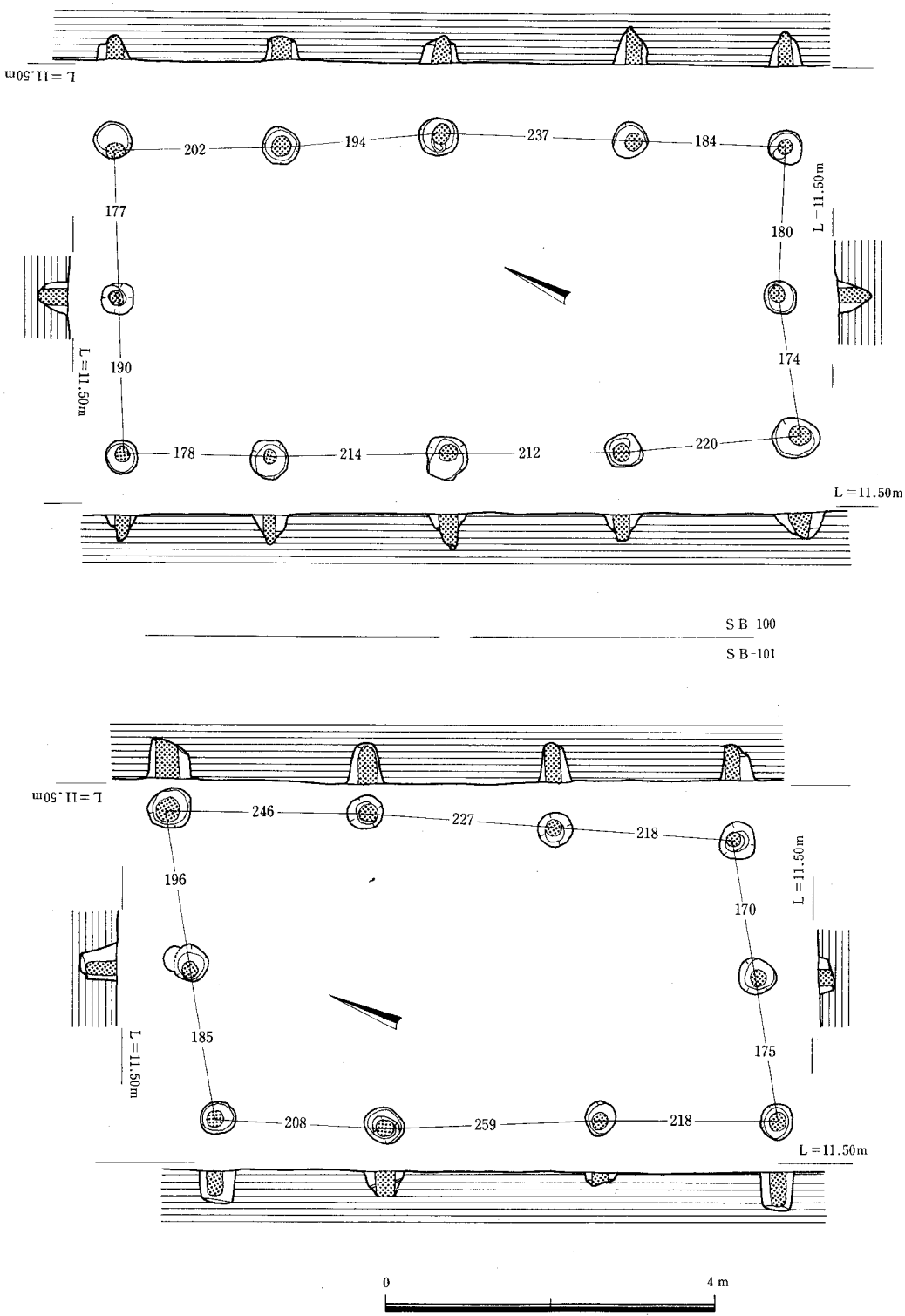


Fig.20　第100・101号掘立柱建物実測図

9241・9243・9389・9393・9395の９個の柱穴からなる２×２間の総柱の建物で倉庫と考えられる。柱穴の遺存状態は30～15cmである。

(5)　第104号建物（ＳＢ－104）(Fig. 22)

９区検出で、ＳＢ－102の東西の桁柱筋を通す形で南側に位置し、ＳＢ－103、ＳＤ－77を切っている。9230～9239の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴の遺存状態は50cm前後と比較的良く、柱穴掘り方は径40cm前後の円形プランをもち、柱痕跡の観察から径15cm前後の円柱をもちいたと考えられる。また柱穴断面観察から建替えが行なわれていると考えられる。

(6)　第105号建物（ＳＢ－105）(Fig. 22・41、250・251)

９区検出でＳＢ－104の南に位置し、ＳＤ－77を切っている。9262～9270の９個の柱穴からなる２×２間の総柱の建物で倉庫と考えられる。柱穴の切り合い関係から本建物に先行する建物の建替えの可能性が高い。柱穴の遺存状態は50cm前後で比較的良く、掘り方は径40cm前後の円形プランをもち、柱痕跡の観察から径15cm前後の円柱をもちいたと考えられる。

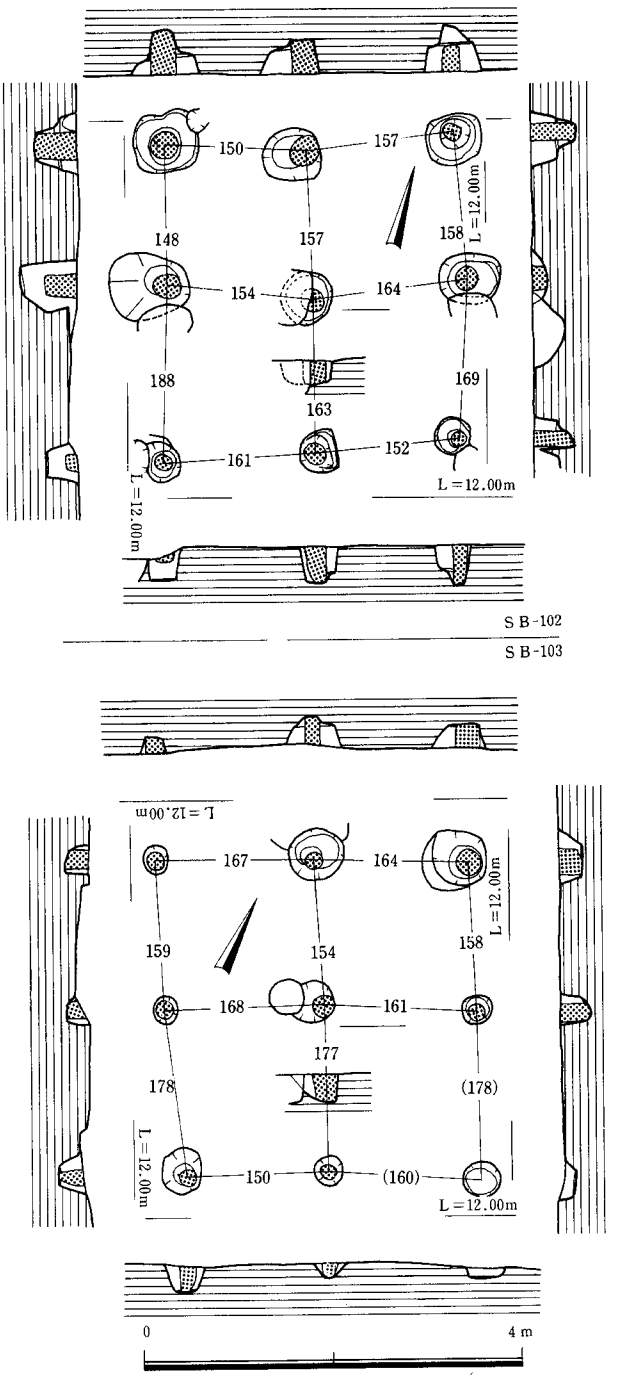


Fig. 21　第102・103号掘立柱建物実測図

251は柱穴9262から出土した土師器皿、250は柱穴9265から出土した須恵器蓋である。８世紀後半期のものか。

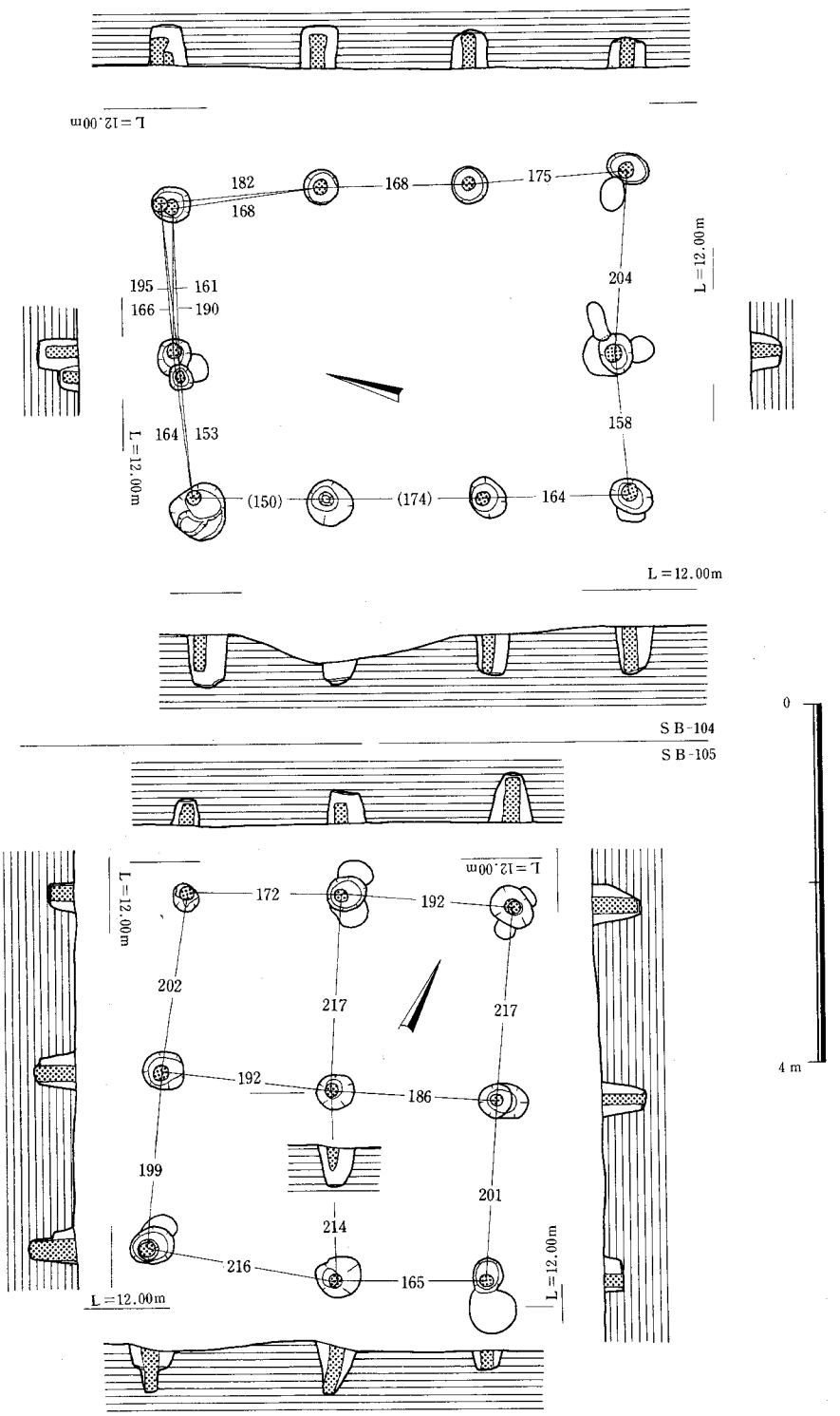


Fig. 22　第104・105号掘立柱建物実測図

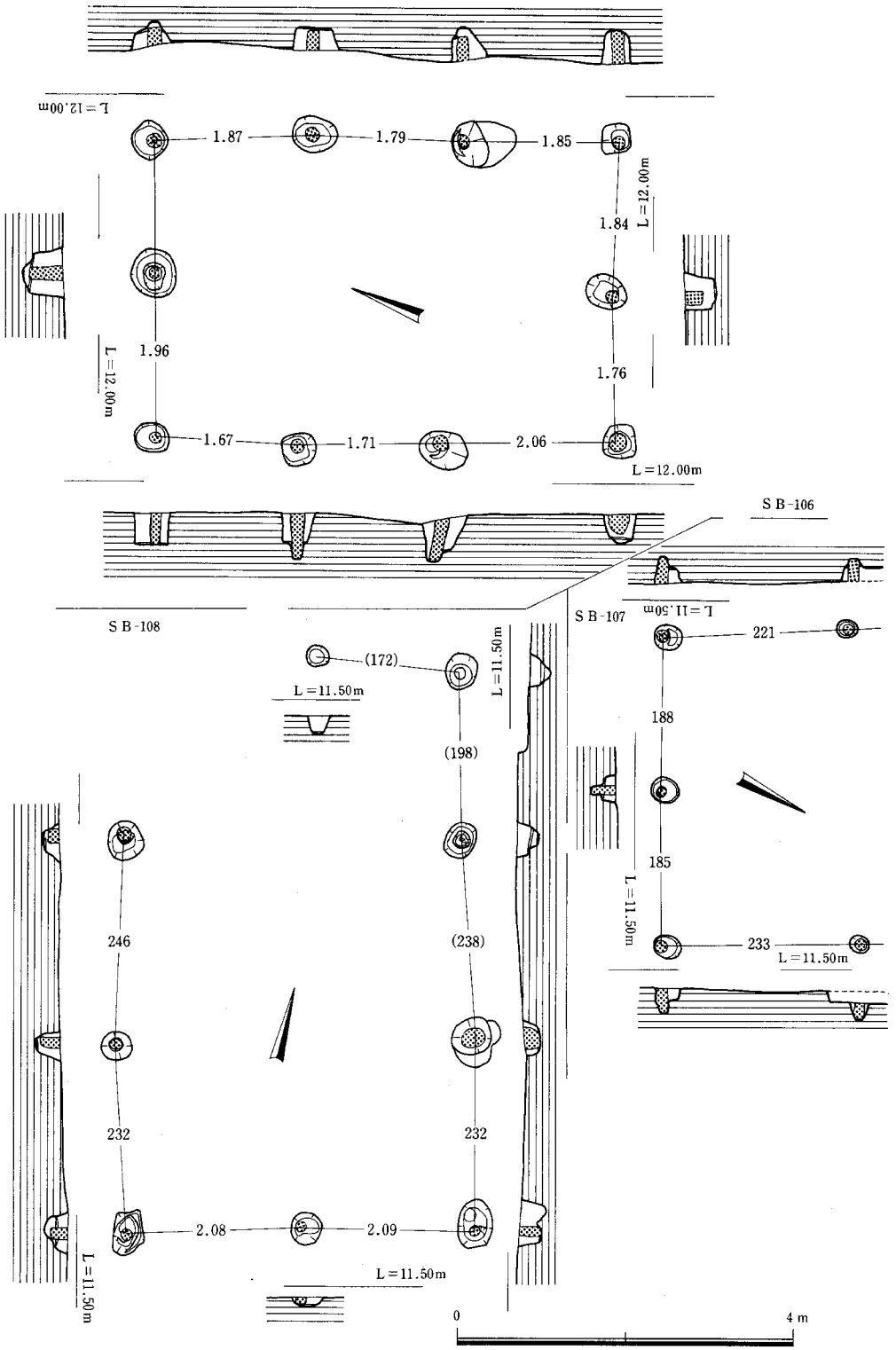


Fig. 23　第106～108号掘立柱建物実測図

(7)　第106号建物（ＳＢ－106）(Fig. 23・41、252)

９区検出でＳＢ－105の南に位置し、ＳＤ－77・79を切っている。9285～9293・9264の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴の遺存状態は40cm前後である。

252は、柱穴9287から出土した須恵器坏の口縁部片である。

(8)　第107号建物（ＳＢ－107）(Fig. 23)

２・８区検出で、ＳＡ－24の北側に位置している。2001・2005・8007・8023・8024の５個の柱穴を検出したが、調査区外に延びているため規模は分らないが２×３間の建物か。柱穴の遺存状態は30cm前後である。

(9)　第108号建物（ＳＢ－108）(Fig. 23・41、253～256)

２・８区検出の建物である。2012・2014・2050・8045～8050の９個の柱穴を検出し、北東隅の柱穴は未確認であるが２×３間の建物である。柱穴遺存在状態は25cm前後である。

256は柱穴8045、253・254は柱穴8047、255は柱穴8050からそれぞれ出土したもので、253・256は須恵器、254は土師器蓋、255は土師器甕である。８世紀前半期のものか。

(10)　第109号建物（ＳＢ－109）(Fig. 24)

３・９区検出でＳＢ－110と切り合っているが柱穴が切り合っていないので先後関係は分らない。3004・3006～3008・9030～9035の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴遺存状態は45cm前後である。

(11)　第110号建物（ＳＢ－110）(Fig. 24・41、257)

３・９区検出で3010・9036～9041の７個の柱穴を検出したが、調査区外へ延びているため規模は分らない。南側梁の柱穴は一辺40cm前後の方形プランをもつが、南側の廂の柱穴は23cm前後の円形プランをもっている。柱穴遺存状態は20cm～60cmである。

257は柱穴9039から出土した須恵器坏で８世紀後半期のものか。

(12)　第111号建物（ＳＢ－111）(Fig. 25・41、258)

８区検出でＳＤ－33に切られている。8121～8125・8127～8130の柱穴及びＳＤ－46（布掘り）からなる２×３間の建物である。梁の中柱柱穴は方形プランを呈しているが、桁柱穴は長方形プランをもっており、桁行は布掘りがあったと考えられる。柱穴、布掘りの遺存状態は35cm前後で、柱痕跡の観察から径15cm前後の円柱を用いていたと考えられる。また柱穴等の断面観察から建替えが行なわれているとみられる。

258は柱穴8127から出土した須恵器皿？の口縁部片である。

(13)　第112号建物（ＳＢ－112）(Fig. 25・41、259)

８区検出で、ＳＡ－41・ＳＤ－39・ＳＢ－113を切り、ＳＢ－244に切られている。8165～8172・8174の９個の柱穴を検出し、北東隅の柱穴は現代の電柱のため消失している。また東側桁柱の東側に8175～8178の４個の柱穴があり、２×３間の東側桁廂をもつ建物である。柱穴遺存状態

は50cm前後と比較的良く、掘り方は径60cm前後の円形プランをもち、柱痕跡の観察から径15cm前後の円柱を用いていたと考えられる。柱穴の切り合いから２回の建替えが行なわれているといえる。

259は柱穴8174から出土した須恵器坏？の口縁部である。

⑭　第113号建物（ＳＢ－113）(Fig. 26・41、260)

８区検出で、ＳＢ－112・224、ＳＤ－51・54・56に切られている。8168・8203・8226・8228・8231・8234・8236・8239・8250・8291の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴遺存状態は25cm前後である。

260は柱穴8250から出土した須恵器有高台坏底部片である。

⑮　第144号建物（ＳＢ－114）(Fig. 26)

９区検出で、西側を現代排水溝のため削られている。9113～9116・9341・9342の６個の柱穴を検出した。柱穴の遺存状態は30cmあるものもあるが10cm前後と悪く、西側にも延びないことから

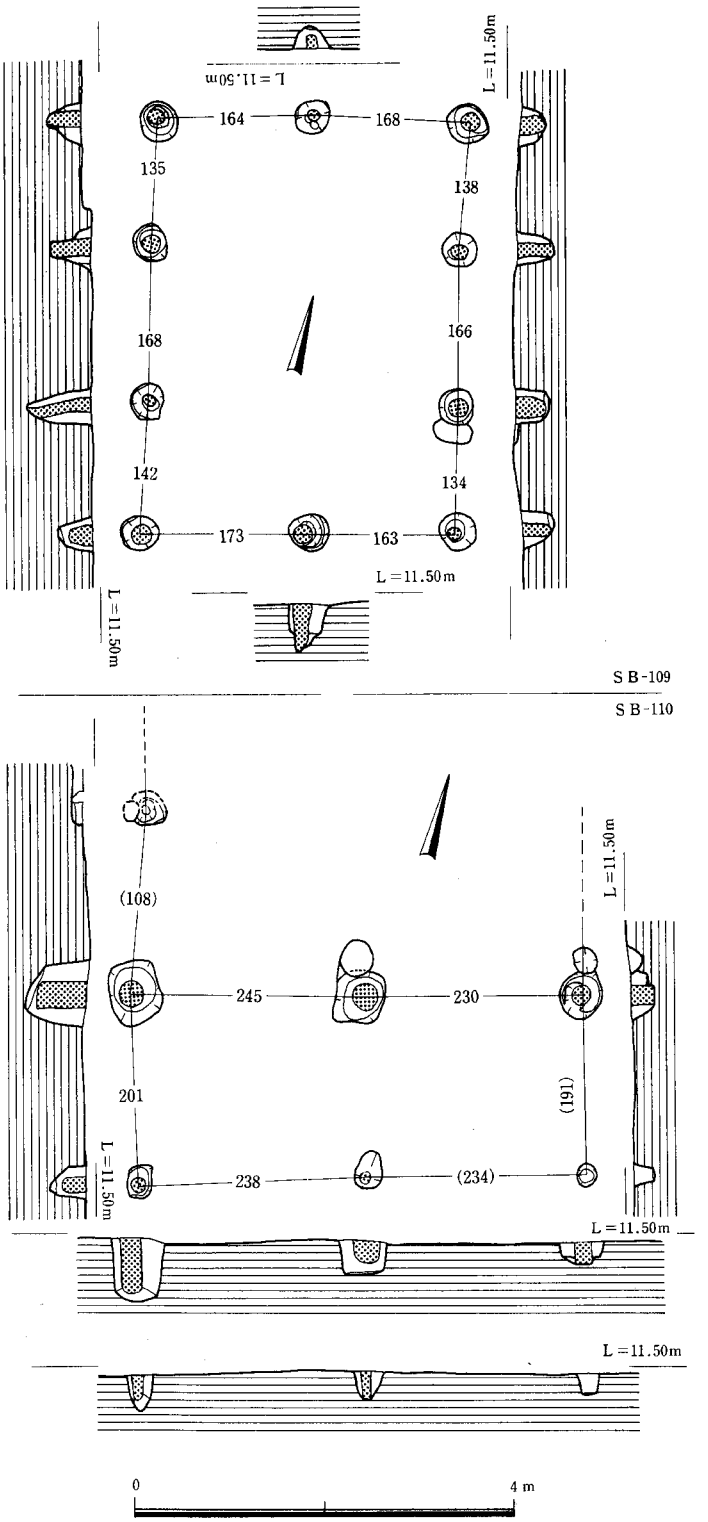


Fig. 24　第109・110号掘立柱建物実測図

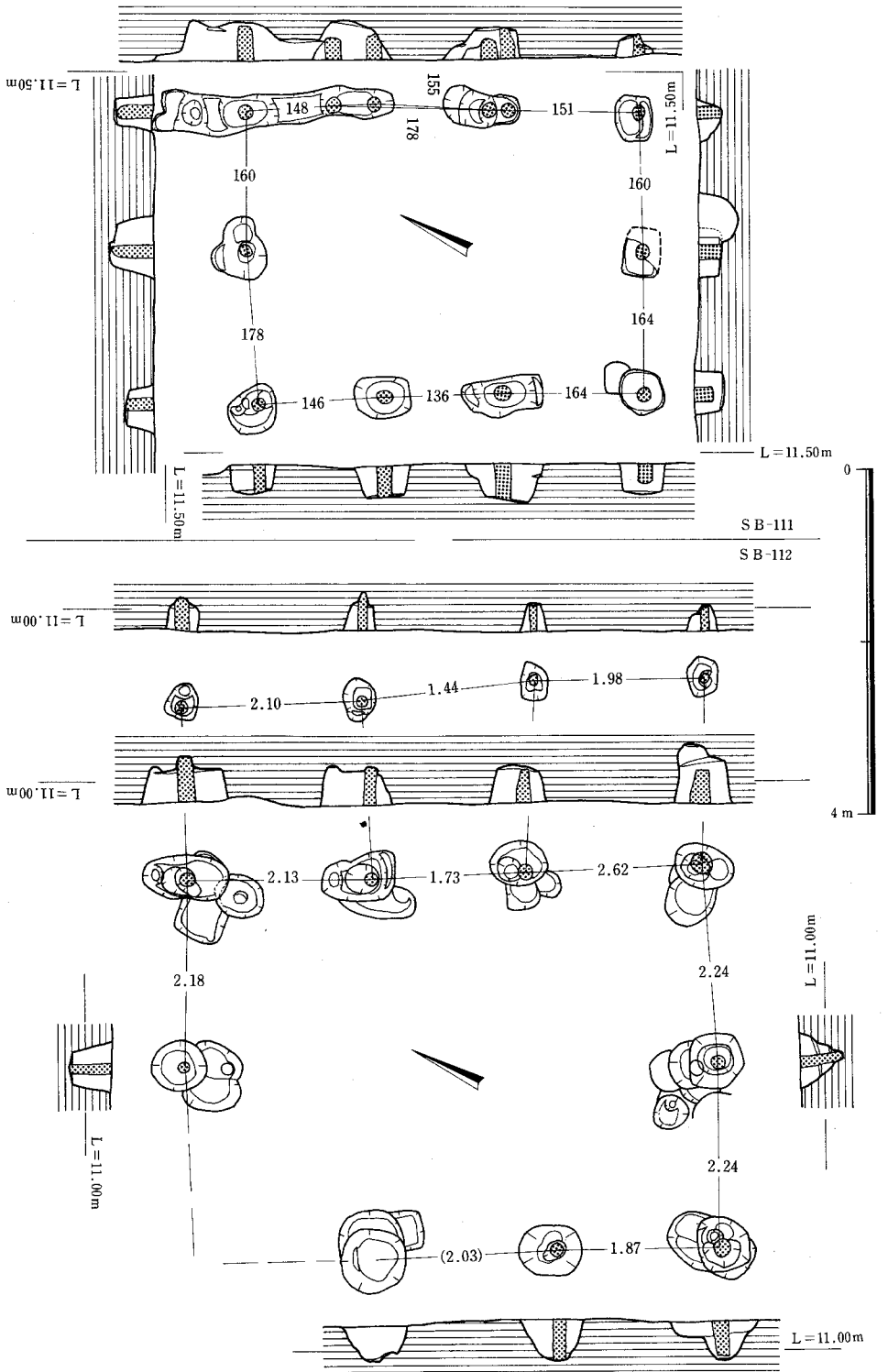


Fig. 25　第111・112号掘立柱建物実測図

２×２間の総柱の建物で倉庫と考えられる。

⑯　第115号建物（ＳＢ－115）(Fig.27・41、261・262)

８・９区検出で、ＳＢ－116と切り合っているが柱穴の切り合い関係がないため先後関係は分らない。8333・8356・8358・8363～8365・8368・8369・8373・8375・9119・9123・9126の13個の柱穴を検出したが、桁柱１個を現代排水溜升のため消失している。２×３間の西側桁廂をもつ建物である。柱穴遺存状態は30cm前後である。

262は柱穴8364から出土した土師器坏、261は柱穴8373から出土した土師器甕の口縁部片である。８世紀末か。

⑰　第116号建物（ＳＢ－116）(Fig.27)

８・14区検出で、

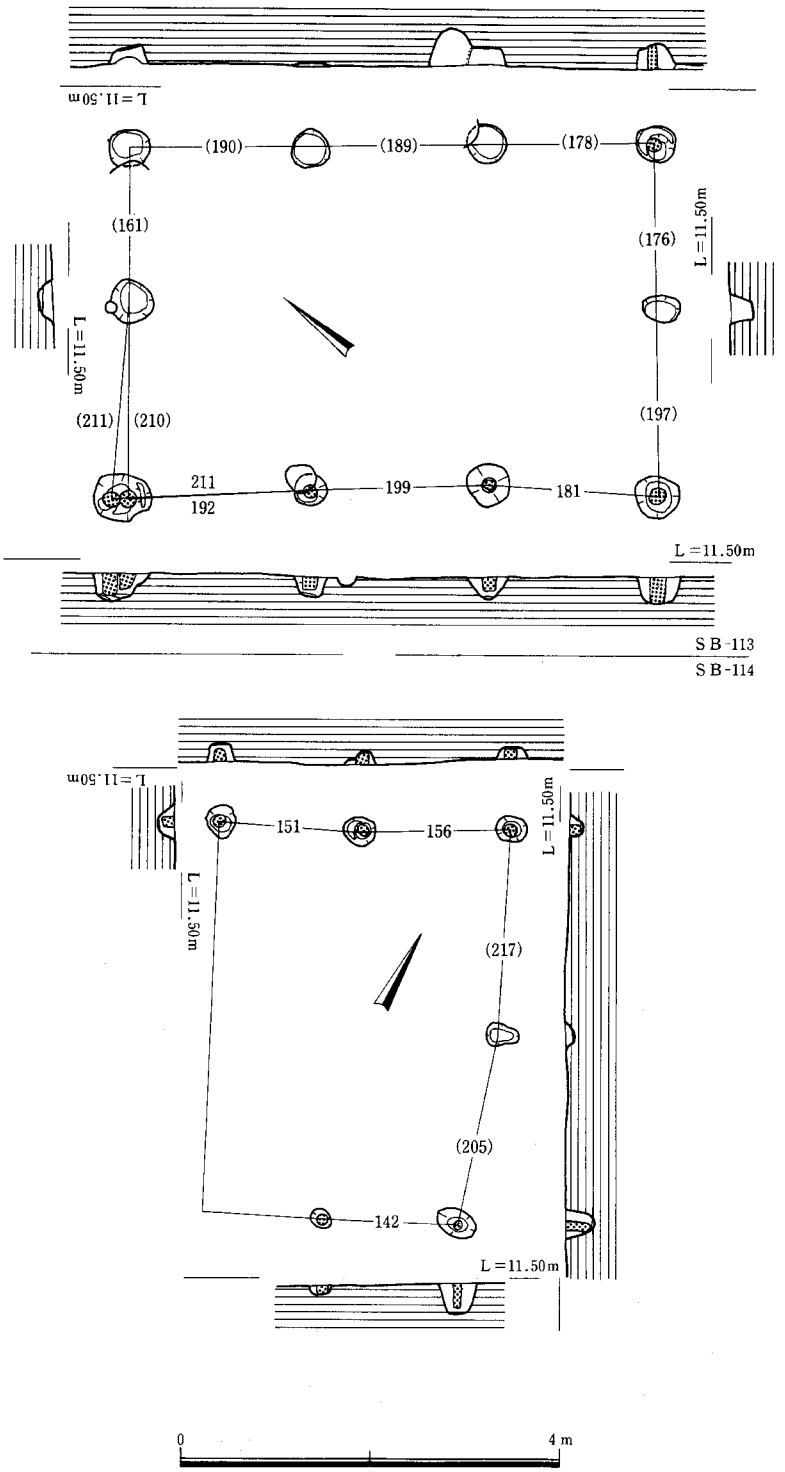
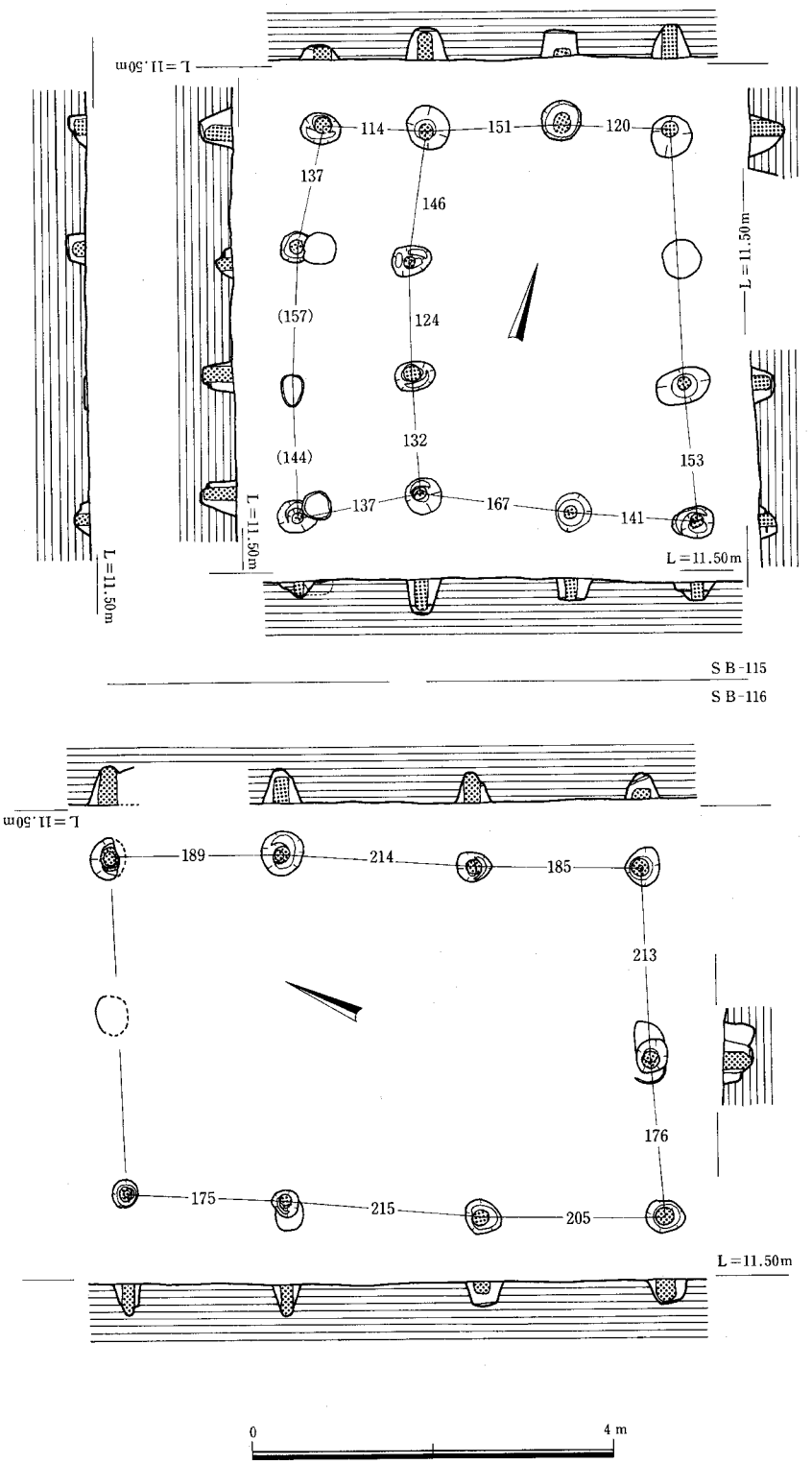


Fig. 26　第113・114号掘立柱建物実測図



ＳＡ－307の西側に位置している。8334ａ・同ｂ・8349・8353・8367・8370・8376・14001～14003の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴遺存状態は30cm前後である。

Fig. 27　第115・116号掘立柱建物実測図

⑱　第117号建物（ＳＢ－117）(Fig. 28・41、263～268)

14区検出で、遺物出土状態からＳＢ－118、ＳＡ－133を切っている。本調査区で数少ない東西棟の１棟である。14010～14019・14191の11個の柱穴からなる２×２間の東側梁廂をもつ建物といえよう。14209の柱穴を中柱とすると２×３間の総柱の建物で倉庫とも考えられる。柱穴遺存状態は比較的良く50cm前後で、柱穴掘り方は方形を呈し、柱痕跡の観察から径20cm前後の円柱を用いたといえよう。柱穴の切り合いから建替えが行なわれたと考えられる。

263・264が柱穴14010、264・265が柱穴14016、266が柱穴14017、268が柱穴14018からそれぞれ出土した。263・264は須恵器坏で、264は有高台坏。265・268は土師器坏で、267は土師器蓋である。いずれも柱穴掘り方から出土したもので、８世紀後半期のものか。

⑲　第118号建物（ＳＢ－118）(Fig. 28・41、269～278)

14区検出で、ＳＡ－133を切り、ＳＢ－117に切られている。ＳＢ－119との先後関係は分らない。14020～14029の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴遺存状態は40cm前後で、柱穴掘り方は径45cmの円形を呈し、柱痕跡の観察から径15cm前後の円柱を用いたと考えられる。柱穴の断面観察から建替えが行なわれたと考えられる。

274・292は柱穴14020、275・276は柱穴14021、278は柱穴14022、269・273は柱穴14023、271・277は柱穴14024、270は柱穴14028からそれぞれ出土した。271は須恵器皿の口縁部片、274は須恵器有高台坏、他は土師器で269～270は坏口縁部片、273は有高台坏、275～277は無高台坏、278は甕である。276・278などは柱痕跡から出土した。この建物は８世紀中頃か。

⑳　第119号建物（ＳＢ－119）(Fig. 29・41、279・280)

14区検出で、ＳＢ－118・ＳＤ－96との先後関係は分らない。14030～14039の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴の遺存状態は30cm前後である。

279は柱穴14030から出土した須恵器、280は柱穴14039から出土した土師器甕である。

㉑　第120号建物（ＳＢ－120）(Fig. 29・41、281・282)

14区検出で、ＳＫ－87・ＳＤ－96を切り、ＳＤ－８に切られている。14164・14200・14204・14205・14220・14310・14311・14366・14500・14501の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴遺存状態は35cm前後である。

282は柱穴14200から出土した須恵器坏口縁部片、281は柱穴14310から出土した土師器坏である。８世紀前半期と考えられるＳＫ－87との切り合い関係から８世紀後半期のものか。

㉒　第121号建物（ＳＢ－121）(Fig. 30)

14区検出で、ＳＢ－118の南北側の梁行と柱筋を通した形で西側に位置し、ＳＫ－89を切っている。14238・14239・14242・14249・14253・14267・14269・14276～14279・14283・14285・14286の14個の柱穴からなる２×３間の北側桁廂の建物で東西棟である。柱穴遺存状態は30cm前後あるものもあるが、良いとは言えない。ただ桁廂の柱穴遺存状態は25cmから40cm前後ある。柱穴

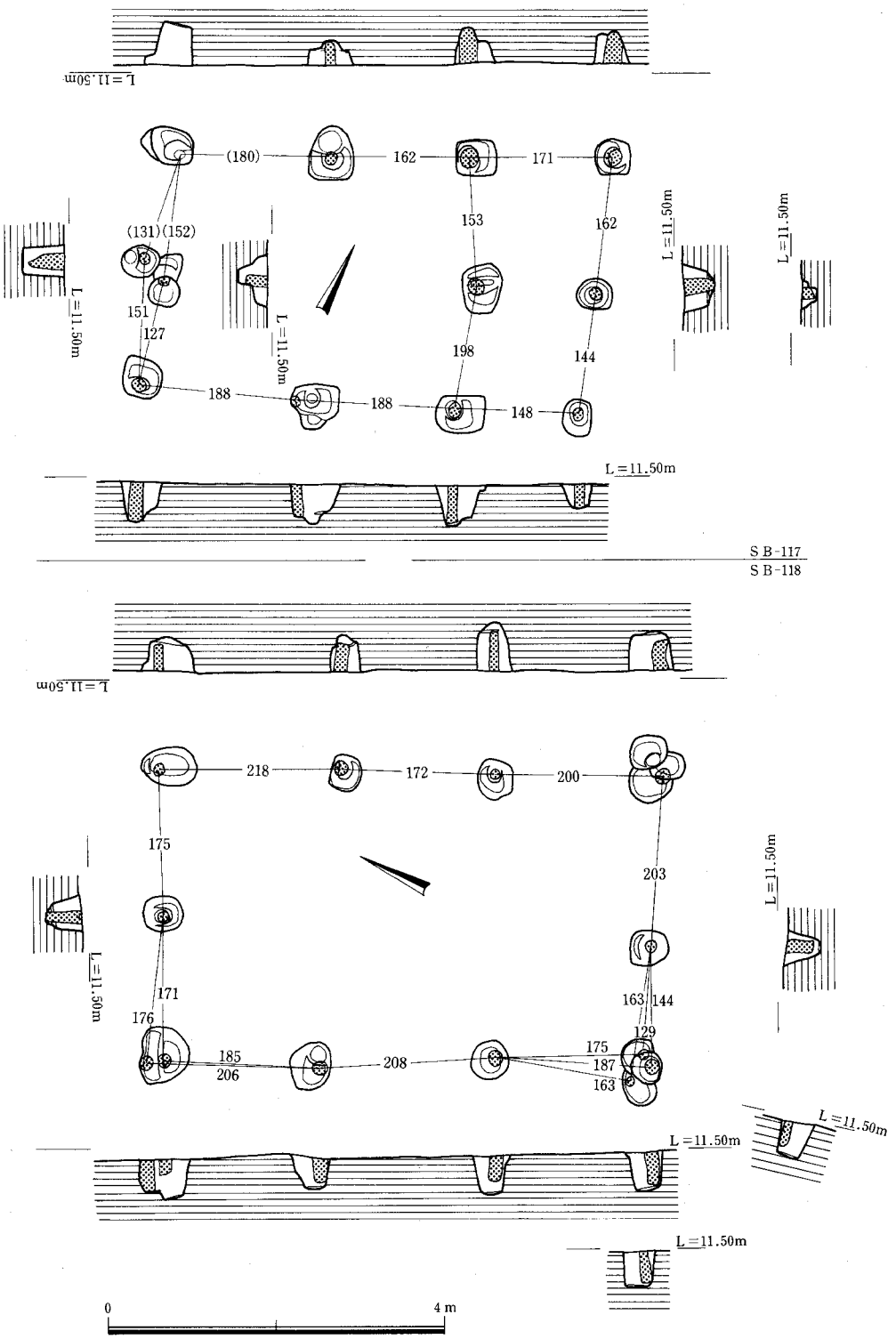


Fig. 28　第117・118号掘立柱建物実測図

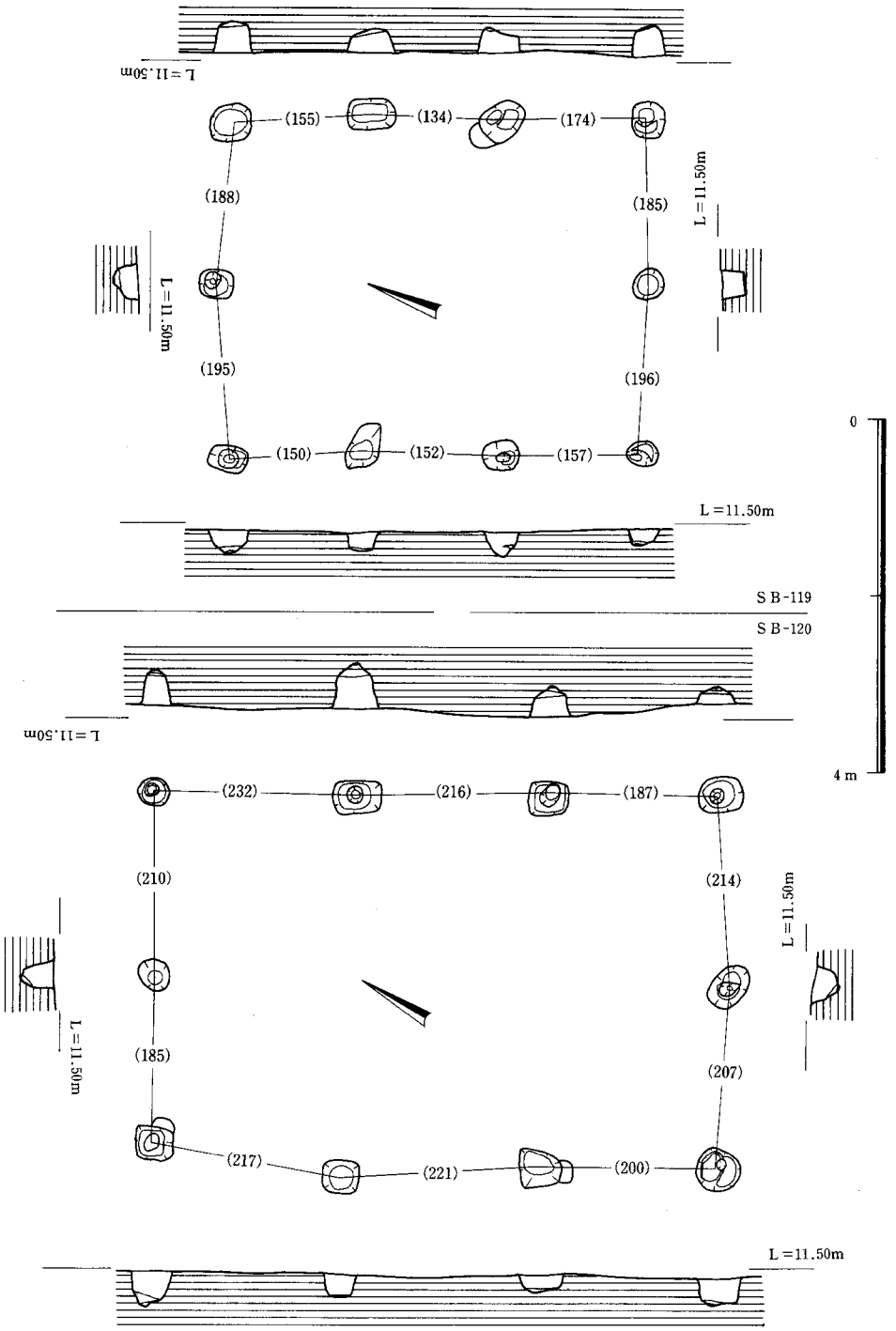


Fig. 29　第119・120号掘立柱建物実測図

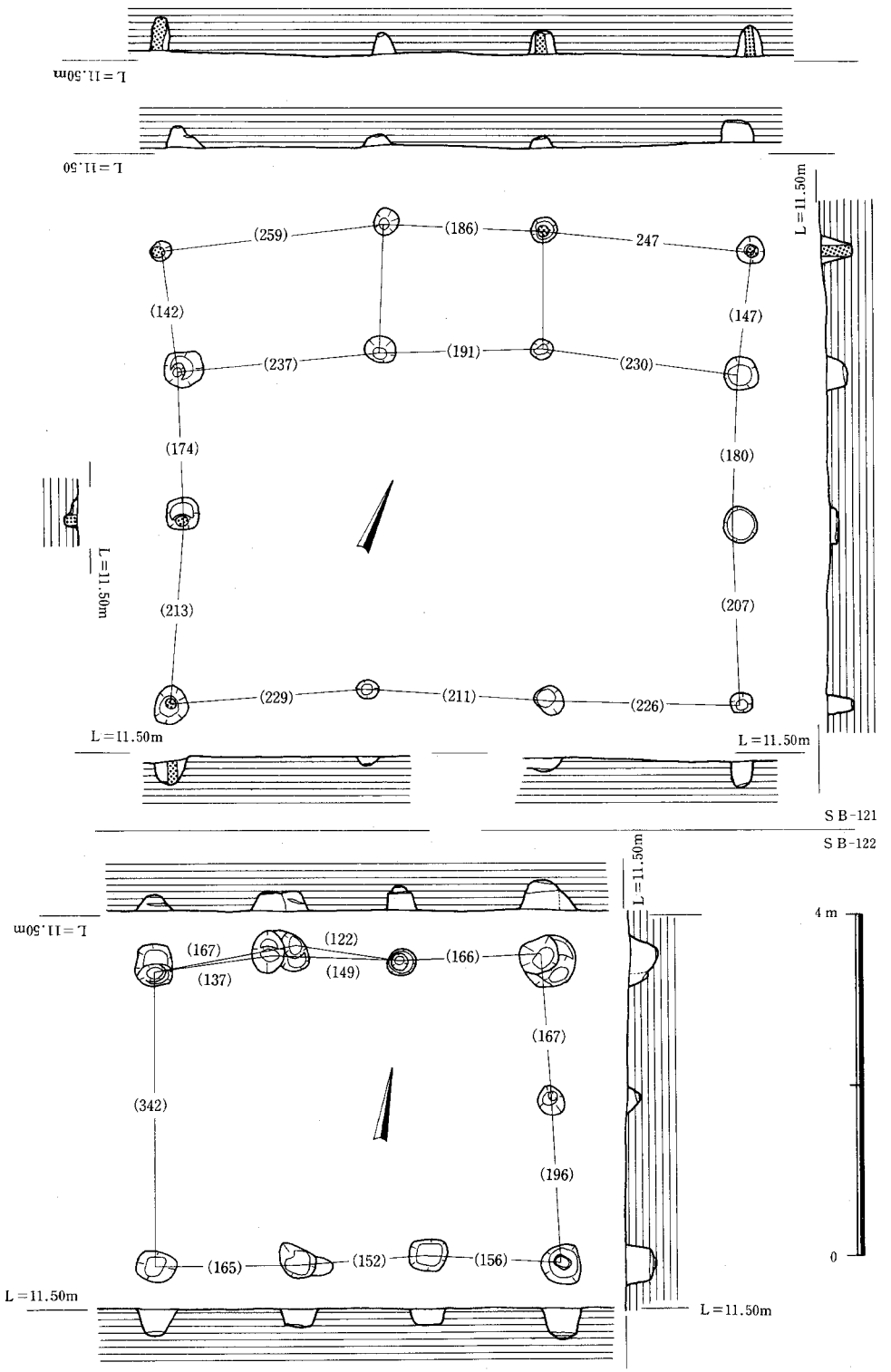


Fig. 30　第121・122号掘立柱建物実測図

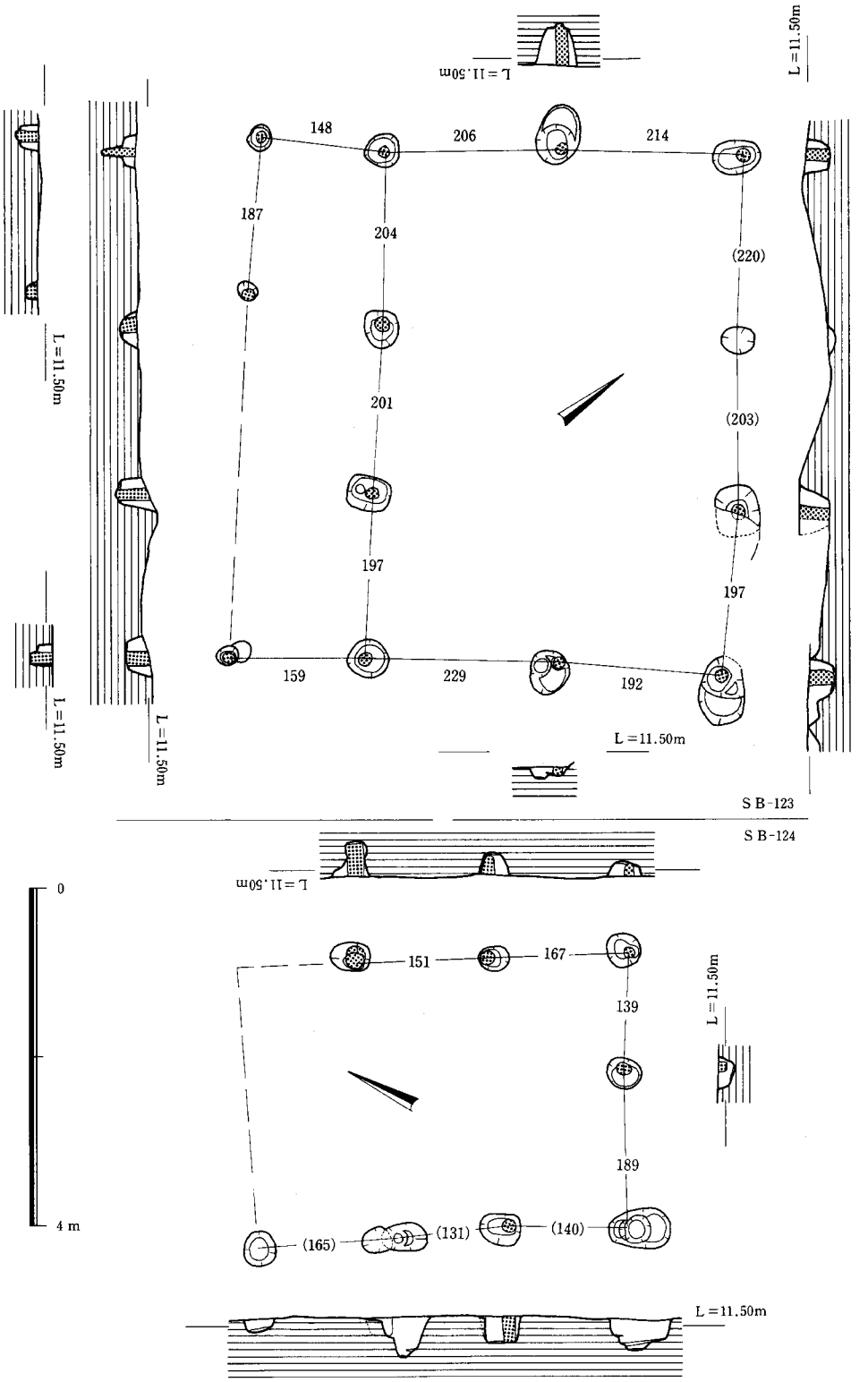


Fig. 31　第123・124号掘立柱建物実測図

は径40cm前後の円形を呈し、柱痕跡の観察から12cm前後の円柱を用いていたと考えられる。

(23)　第122号建物（ＳＢ－122）(Fig. 30・41、283～286)

14・15区検出で、ＳＢ－245を切っているが、ＳＢ－261との先後関係は分らない。14295・14297・14299・14302・14303・14305・14307・15091・15092の９個の柱穴を検出したが、梁柱穴は現代排水溝のため消失している。２×３間の建物である。柱穴の遺存状態は35cm前後である。

285が柱穴14299出土の土師器坏底部で、他は柱穴14307出土の須恵器である。283が蓋で、284は坏口縁部片、286は有高台坏底部である。８世紀中頃のものか。

(24)　第123号建物（ＳＢ－123）(Fig. 31)

14・20区検出で、ＳＫ－83・ＳＤ－96に切られている。また現代建物基礎によって切られている。14353・14358・14360・14363・14368・14372・14400・20031・20032・20034・20040・20041の13個の柱穴を検出したが、桁廂の柱穴１個がＳＫ－83のため消失している。２×３間の西側桁廂の建物である。柱穴遺存状態は40cm前後で、柱穴は不正形になっているが方形を呈していたと考えられる。柱痕跡の観察から径15cm前後の円柱を用いていたとみられる。廂の柱穴は径20cm前後の円形を呈し、建物本体より浅くなっている。また柱穴20041には柱痕跡の下に平らな根石が置かれている。

(25)　第124号建物（ＳＢ－124）(Fig. 31・41、287～292)

14・20区検出で、ＳＫ－84を切り、ＳＤ－140・170に切られている。ＳＢ－242との先後関係は分らない。14330・14344・14339・20010・20011・20015・20018・20021の８個の柱穴を検出したが、北東部はＳＫ－84を先に掘り上げたため柱穴は消失している(Fig. 52参照)。２×３間の建物である。柱穴遺存状態は40cm前後である。

288・290～292は柱穴14339、287は柱穴20010、289は柱穴20041からそれぞれ出土した土師器である。287は有高台坏、288・290は坏、他は甕である。柱穴14339は柱痕跡の出土土器であり、ＳＫ－84との切り合い関係から本棟は8世紀後半期のものか。

(26)　第125号建物（ＳＢ－125）(Fig. 32・41、293・294)

20区検出で、ＳＤ－171・221を切っている。20022・20058・20074・20081・20082・20087・20995・20996・20999の９個の柱穴からなる総柱の建物で倉庫と考えられる。柱穴の遺存状態は50cm前後と比較的良く、柱穴掘り方は径55cm前後の円形を呈し、柱痕跡の観察から径15cm前後の円柱を用いたと考えられる。また柱穴の切り合い関係から建替えが行なわれたといえる。構造としては、中柱の柱穴が浅く平行する２側辺の柱穴がしっかりしている。

293は柱穴20074から出土した土師器有高台坏、294は柱穴20022から出土した須恵器坏口縁部である。８世紀後半期のものか。

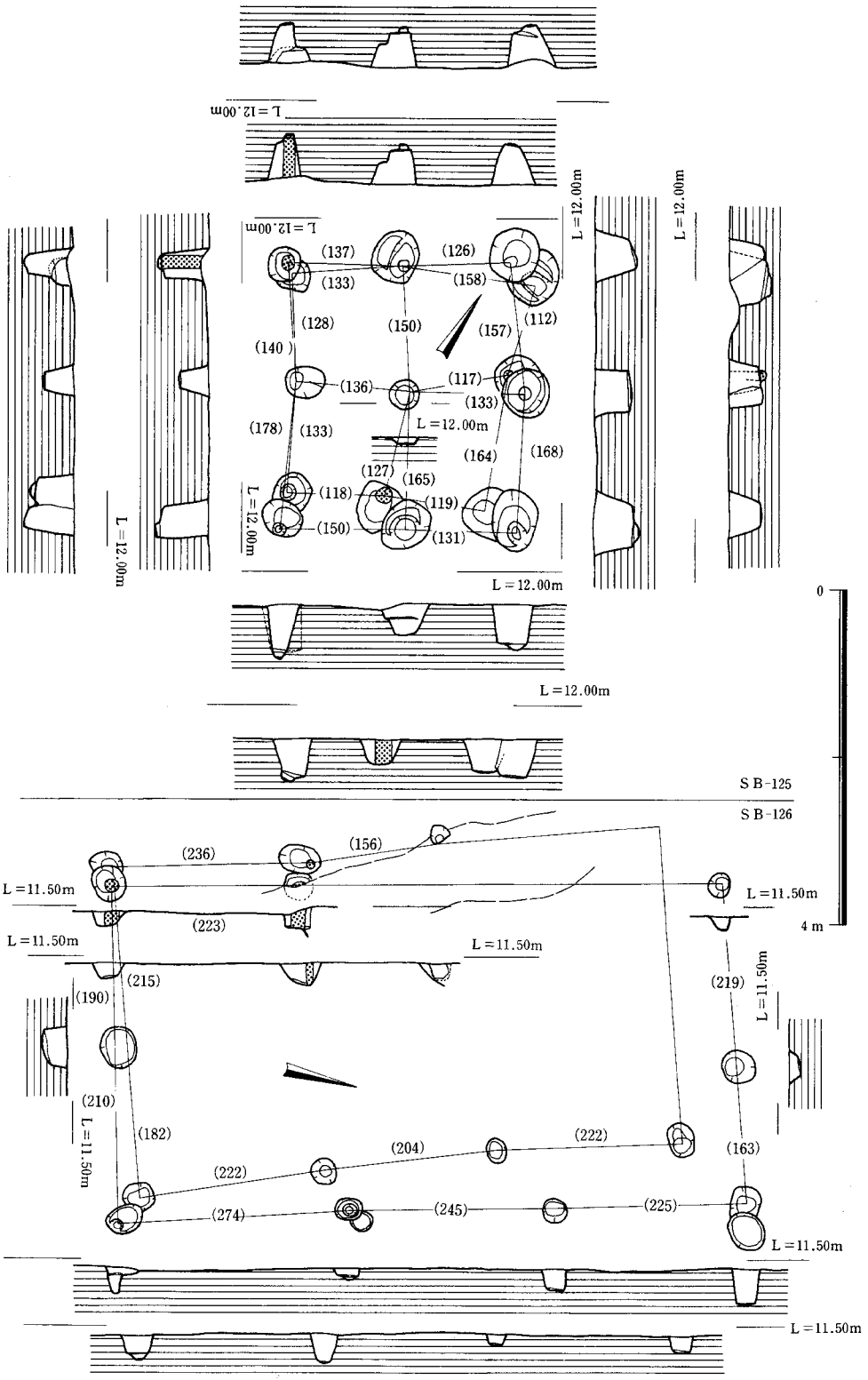


Fig. 32　第125・126号掘立柱建物実測図

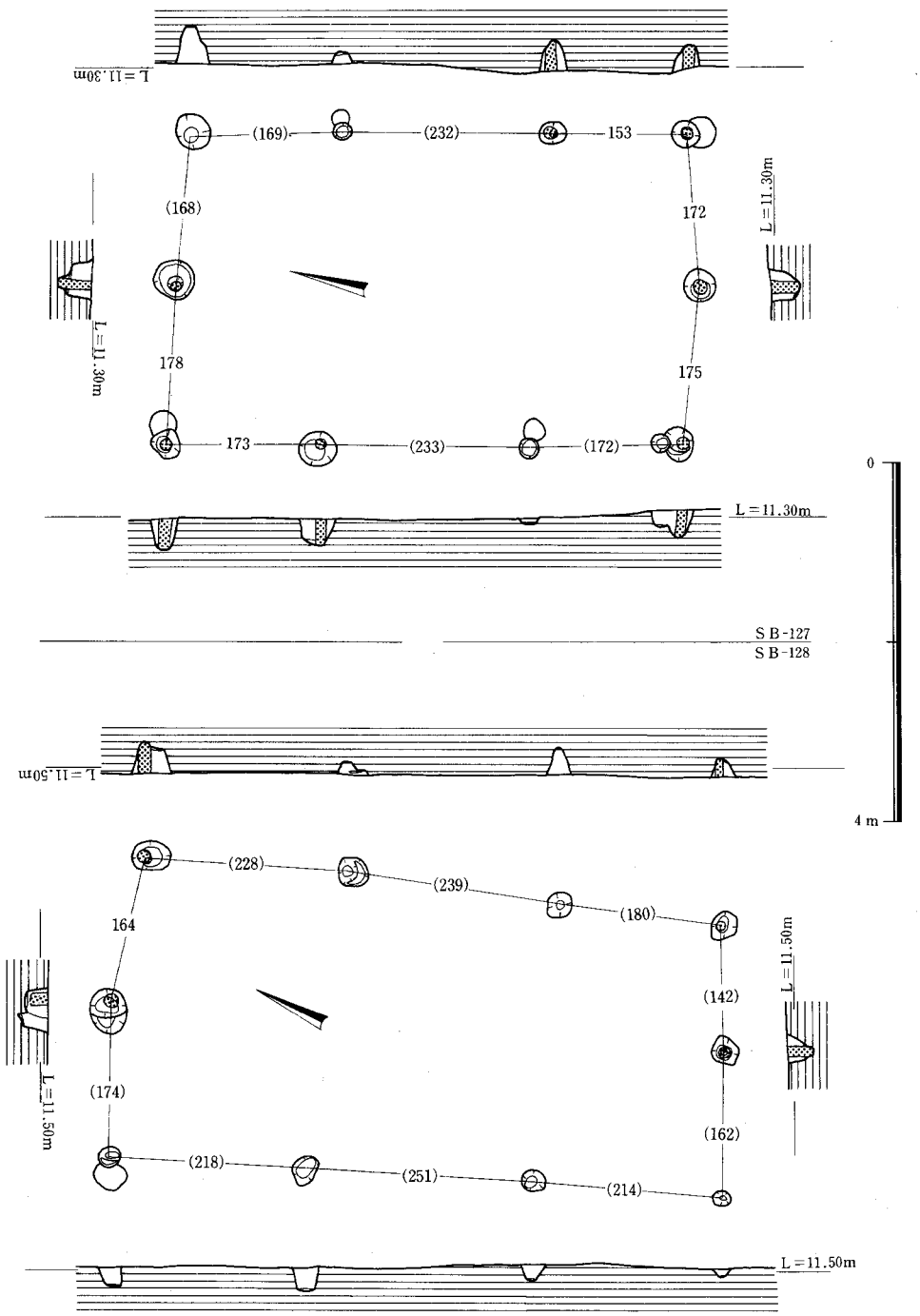


Fig. 33　第127・128号掘立柱建物実測図

(27)　第126号建物（ＳＢ－126）（Fig. 32・41、295）

８区検出で、ＳＢ－224の西側に位置している。8113・8116・8119・8312・8315・8317・8359・8361・8998の９個の柱穴を検出したが、西側桁柱１個は現代排水溝のため消失している。２×３間の建物である。また8313・8315・8317・8118・8120・8361・8359・8700の８個の柱穴を検出し、北西部は現代排水溝のため消失しているが、本棟に先行する２×３間の建物と考えられる。柱穴遺存状態は30cm前後である。

295は柱穴8315

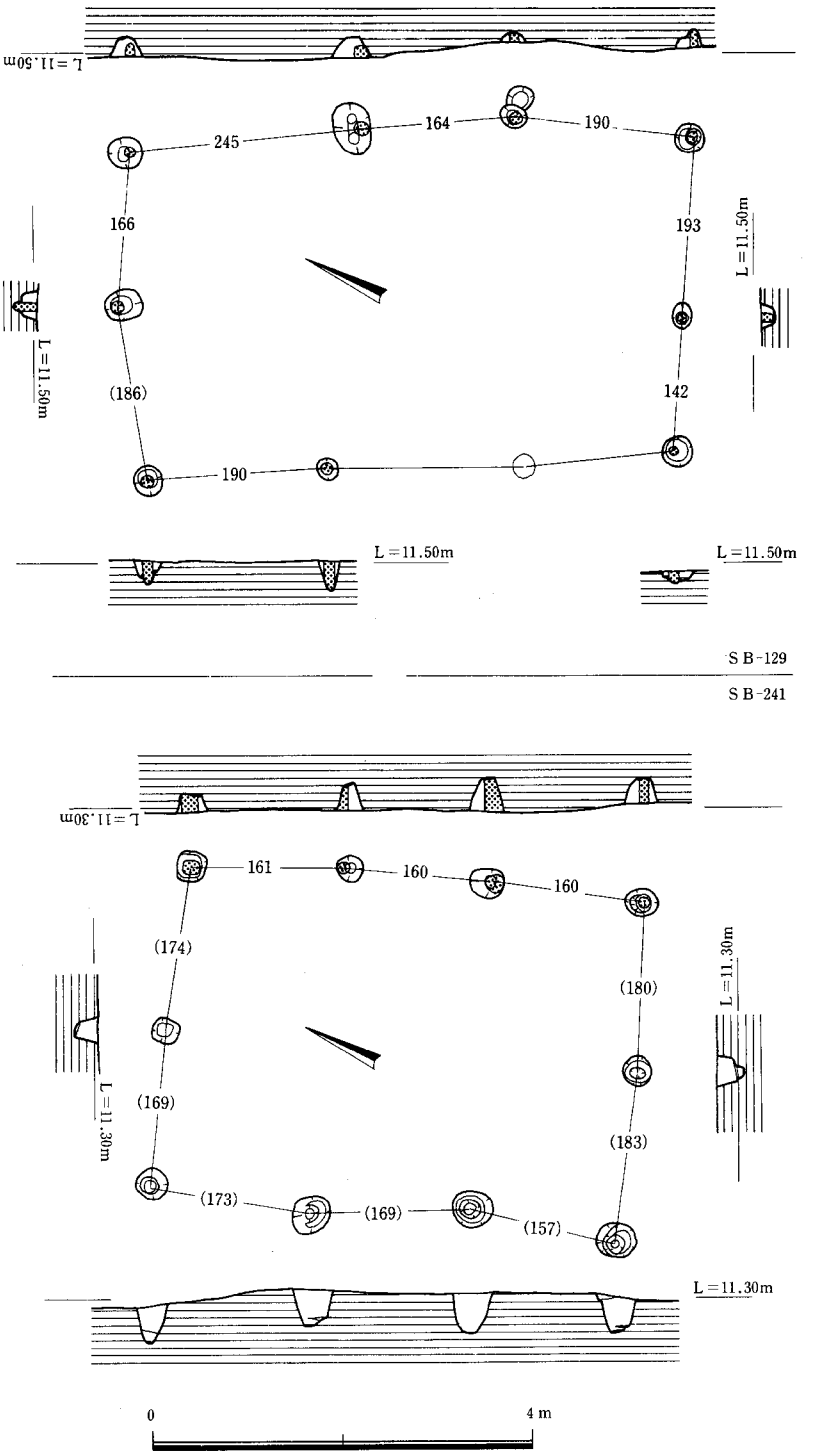


Fig. 34　第129・241号掘立柱建物実測図

から出土した土師器坏の口縁部である。

(28)　第127号建物（ＳＢ－127）(Fig. 33)

２・８区検出で、ＳＢ－108の西側に位置し、ＳＤ－47と切り合っているが先後関係は分らない。2019・2025・8071・8072・8077・8079・8083・8084・8088・8090の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴の遺存状態は30cm前後で、柱穴掘り方は径40cm前後の円形を呈し、柱痕跡の観察から径12cm前後の円柱を用いたと考えられる。

(29)　第128号建物（ＳＢ－128）(Fig. 33)

９区検出で、ＳＢ－100・104の間に位置している。9372～9380・9500の10個の柱穴からなる２×３間の建物で、ＳＢ－101と同様梁行が異なっている。柱穴遺存状態は25cm前後である。

(30)　第129号建物（ＳＢ－129）(Fig. 34)

15区検出で、ＳＤ－86の東側に位置している。15119・15120・15122・15131・15136・15146～15149の９個の柱穴を検出したが、桁柱１個は試掘トレンチで消失している。２×３間の建物である。柱穴遺存状態は30cm前後で柱穴堀り方は径30cm前後の円径を呈し、柱痕跡の観察から径12cm前後の円柱を用いていたと考えられる。

(31)　第241号建物（ＳＢ－241）(Fig. 34)

15区検出で、ＳＤ－86を切り、ＳＢ－129の南に位置している。15153～15158・15161・15164～15166の10個の柱穴からなる２×３間の建物である。柱穴遺存状態は40cm前後である。

(32)　第242号建物（ＳＢ－242）(Fig. 35)

14・20区検出で、ＳＤ－140・170に切られているが、ＳＫ－84・ＳＢ－124との先後関係は分らない。14317・14318・14331・14332・14336・14342・14510・20017の８個の柱穴からなる１×３間の建物である。柱穴遺存状態は30cm前後である。

(33)　第244号建物（ＳＢ－244）(Fig. 36)

８区検出で、ＳＢ－112・113を切っており、さらに、ＳＤ－51も切っている。8164・8169・8227・8229・8237・8238・8241・8242・8246～8248・8257・8258・8262・8266・8267・8271・8273・8278・8279・8288・8291・8292・8294・8295・8297の26個の柱穴からなる２×５間の桁両廂の建物である。本調区検出の中で最も大きい規模をもっており主屋と考えられる。柱穴堀り方は径35～50cmの円形を呈し、柱痕跡の観察から、径15～20cmの円柱を用いていたと考えられる。また柱穴の切り合い関係から建替えが行なわれていると考えられる。

(34)　第245号建物（ＳＢ－245）(Fig. 35)

14区検出で、ＳＢ－122、ＳＤ－８に切られているが、ＳＢ－261との先後関係は分らない。14303・14306・14319・14320・14323・14068・14880・14881・15090の９個の柱穴を検出したが、桁柱が消失している。２×３間の東西棟の建物である。柱穴遺存状態は、南側は40cm前後で、北側は現代排水溝などで削平されており悪い。

㉟　第261号建物（ＳＢ－261）(Fig. 37)

14・15区検出で、ＳＫ－93・ＳＤ－８に切られている。14300・14321・14326・14327・14642・15622・15623・15998の８個の柱穴を検出したが、北西部隅は現代排水溝溜升によって削られている。北へ延びていないので２×３間の建物と考えられる。柱穴遺存状態は25cm前後である。

㊱　第263号建物（ＳＢ－263）(Fig. 37・41、297)

20区検出で、本調査区の中で最も南で、大溝の北に、大溝に沿って位置している。20214・20218・20222・20234・20251・20253・20257・20260～20262・20502・20503の12個の柱穴からなる２×３間の総柱の

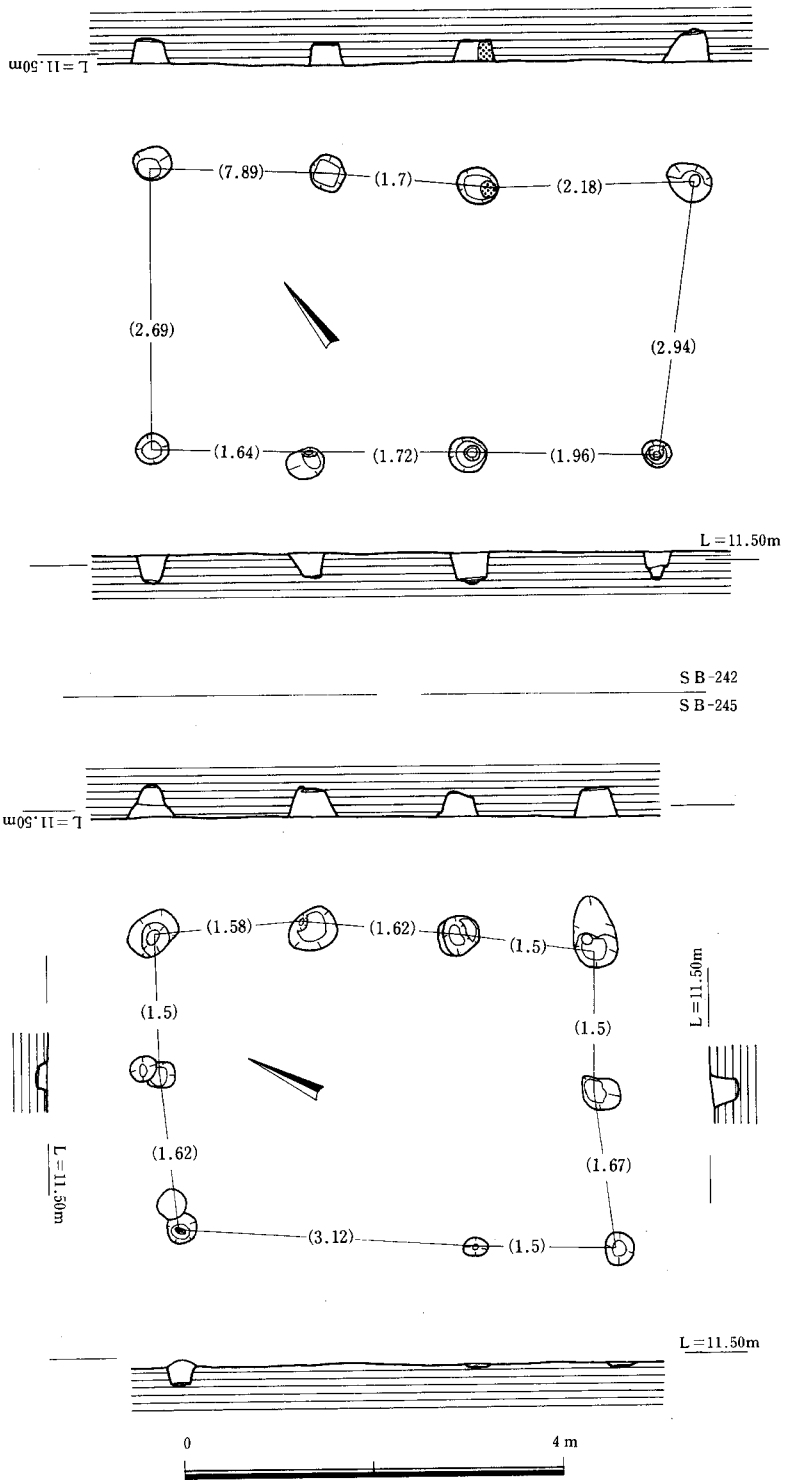


Fig. 35　第242・245号掘立柱建物実測図

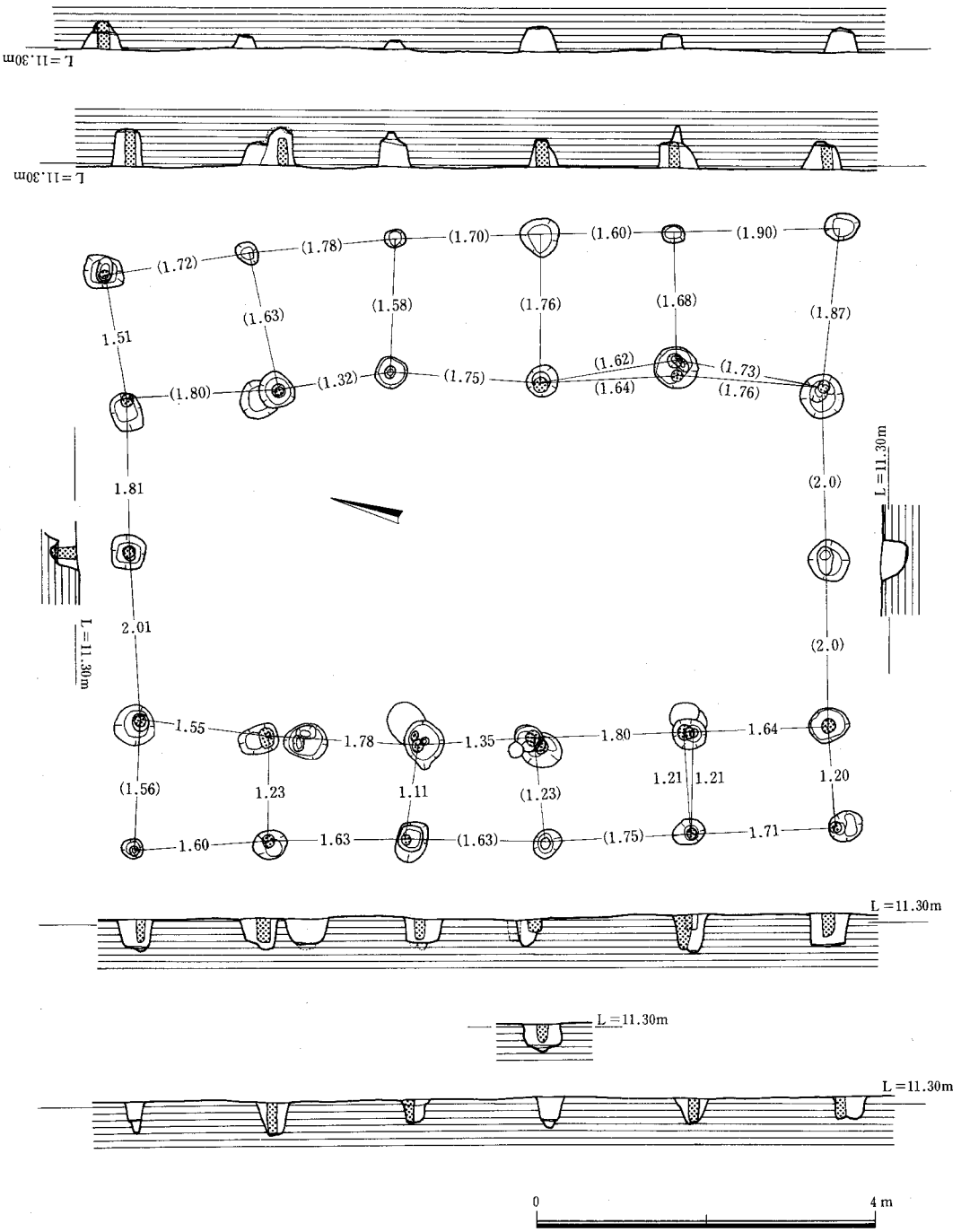


Fig. 36　第244号掘立柱建物実測図

建物で倉庫と考えられる。

柱穴の遺存状態は40cm前後で、柱穴堀り方は径30cm前後の円形を呈している。

297は本棟柱穴から出土した土師器甕である。

(37)　第268号建物（ＳＢ－268）(Fig. 38)

14・15・20・21区検出で、ＳＤ－191を切っているが、ＳＤ－176・185～189の溝群に切られている。ＳＢ－269との先後関係は分らない。14357・15085・20002・20003・20006・21024・21025・21030・21600の９個の柱穴からなる２×２間の総柱の建物で倉庫と考えられる。柱穴遺存状態は20cm前後である。

(38)　第269号建物（ＳＢ－269）(Fig. 38)

15・21区検出で、ＳＤ－190を切っている。15077・15082・15084・21029・21022・21670～21672の８個の柱穴からなる２×２間の建物で、倉庫と考えられる。柱穴遺存状態は20～50cmである。

(39)　第270号建物（ＳＢ－270）(Fig. 39)

20区検出で、ＳＤ－194に切られているが、ＳＢ－271との先後関係は分らない。20116・20119・20120・20744～20747の８個の柱穴からなる２×２間の建物で倉庫と考えられる。中柱が消失したものか。柱穴遺存状

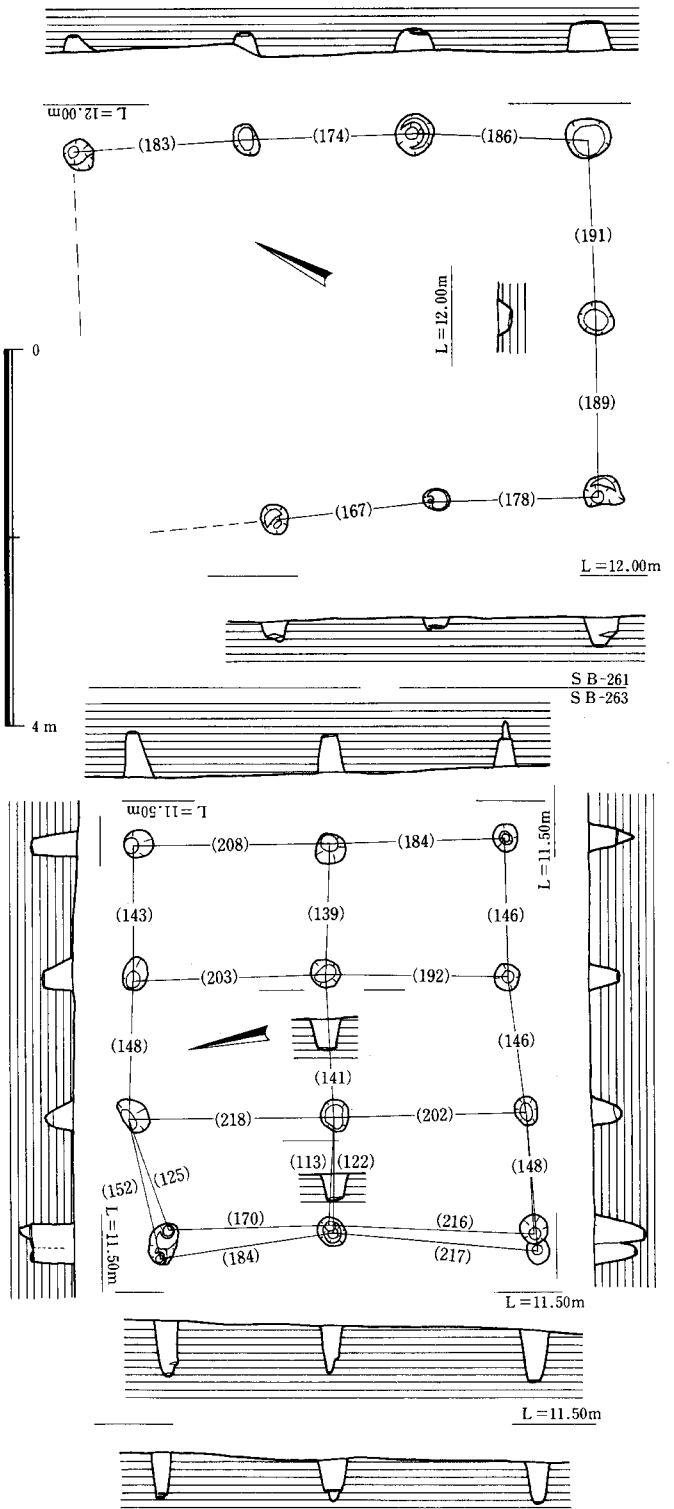


Fig. 37　第261・263号掘立柱建物実測図

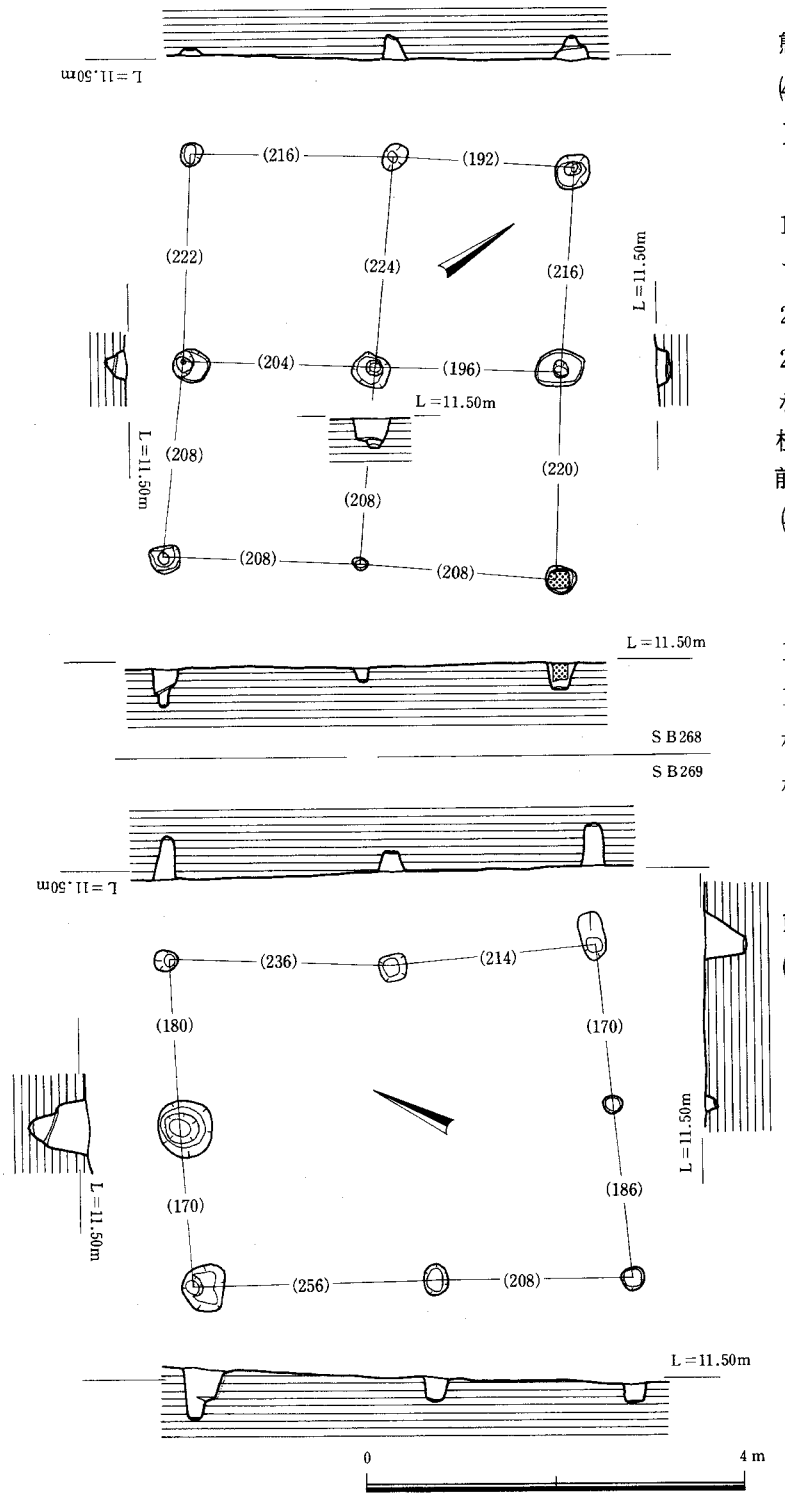


Fig. 38　第268・269号掘立柱建物実測図

態は20cm前後である。

(40)　第271号建物（ＳＢ－271）（Fig. 39）

20区検出で、ＳＫ－161・ＳＤ－218を切っている。20036・20101・20115・20119・20671～20673の７個の柱穴からなる２×２間の建物で、柱穴の遺存状態は30cm前後である。

(41)　第272号建物（ＳＢ－272）（Fig. 40）

15・21区検出で、15067・15071・15811～15814・21003の７個の柱穴を検出したが、桁柱１個は消失している。１×３間の建物と考えられる。柱穴の遺存状態は悪い。

(42)　第273号建物（ＳＢ－273）（Fig.40・41、298・299）

20区検出で、ＳＤ－216等溝群との先後関係は分らない。20106・20107・20131・20144～20146の６個の柱穴を検出し１×２間となるが、平行する側柱がしっかりした２×２間の総柱の建物で倉庫と考えられる。柱穴遺存状態は

50～30cmである。

298・299は柱穴20107から出土した土師器坏である。９世紀初頭のものか。

(43) 柵列（ＳＡ）　(Fig. 3・4)

柵列としては、ＳＡ－24・41・133・306～308の６条を検出した。ＳＡ－24・41・133については、畑状遺構の中でふれていくことにするので、ここではＳＡ－306～308についてみていくことにする。

ＳＡ－306は９区検出で、ＳＢ－107の東側に平行して位置している。9009・9012・9025・9060・9078・9140の柱穴からなり、1.2～2.2mの間隔をもちＮ－13°－Ｗで延びている。柱穴の遺存状態は30cm前後である。

ＳＡ－307は８・14区検出で、ＳＢ－116の東側に平行して位置している。8319・8322・8329・8343・8344・8347・14231の柱穴からなり、1.6～2.1mの間隔をもちＮ－26°－Ｗで延びている。柱穴遺存状態は40cm前後である。

ＳＡ－308は、大溝（ＳＤ－１）の北側に位置するもので、２回以上の造り替えが行なわれていると考えられる。

(44) 柱穴出土遺物 (Fig. 42)

本調査区では多数の柱穴を検出したが、遺存状態が良い物でも55cm前後であり、浅い柱穴は、後世の削平によって消滅していると考えられる。

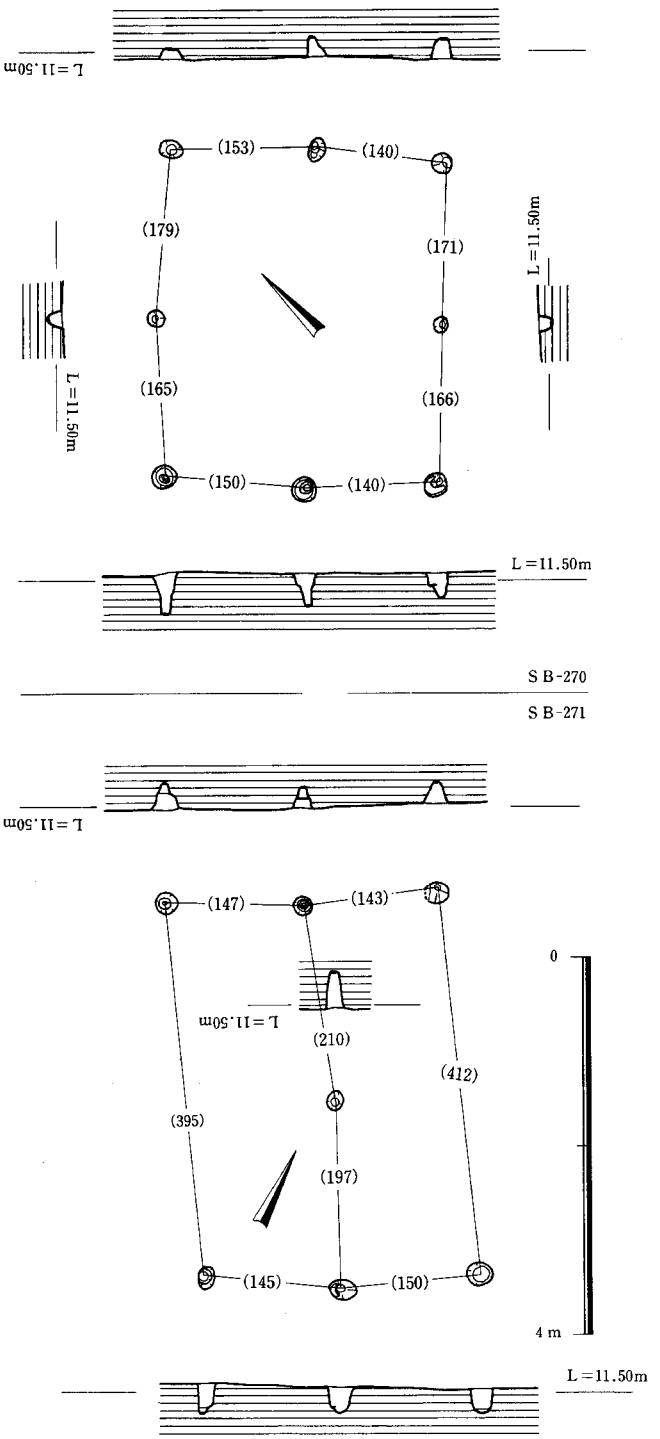


Fig. 39　第270・271号掘立柱建物実測図

ここでふれる遺物は、建物の柱穴とは考えられるが、建物としてまとめることができない柱穴から出土したものである。

300～306は８区検出、307～314は９区検出、315～329は14区検出、330～333は15区検出、334～340は20区検出、341～345は21区検出の各柱穴から出土した遺物である。330・321・322・338は須恵器無返し蓋、334は土師器蓋である。305・307～309・311～313・317～320・323・326～328・333・342・343は須恵器坏で、301～303・305・316・324ａ・324ｂ・331・334・336・337・341・344は土師器坏で、有高台と無高台がある。304・310は須恵器皿で、329・330・340・345は土師器甕である。306は器表に叩き目がある土師器で製塩土器（玄海灘式）と考えられる。314は土製紡錘車で、手捏整形後ナデを加えている。穿孔は棒状工具で表裏から行なわれている。

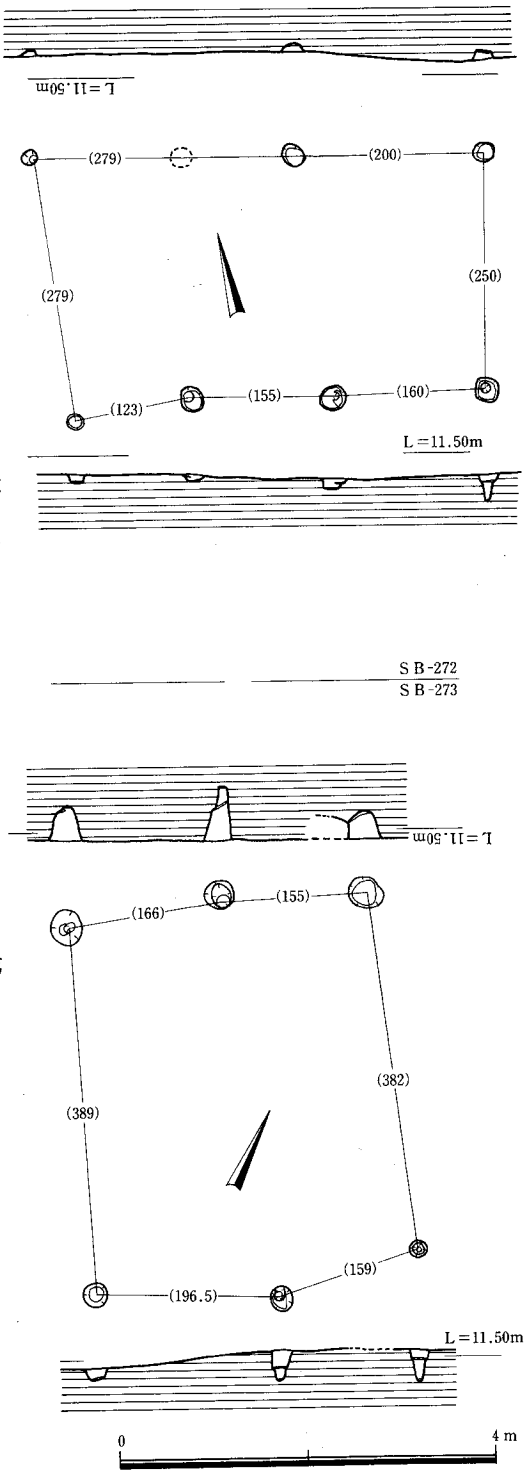


Fig. 40　第272・273号掘立柱建物実測図

参考文献

石松好雄他編1977『大宰府史跡昭和51年度発掘調査概報』
石松好雄他編1978『大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報』
前川威洋1978『福岡南バイパス関係埋葬文化財調査報告第８集』
石松好雄他編1979『大宰府史跡昭和53年度発掘調査概報』
石松好雄他編1980『大宰府史跡昭和54年度発掘調査概報』
舟山良一編1980『仲島遺跡Ⅰ』
舟山良一編1981『仲島遺跡Ⅱ』
石松好雄他編1982『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』
柳沢一男編1983『板付周辺遺跡調査報告書(9)』
石松好雄他編1983『大宰府史跡昭和57年度発掘調査概報』
石松好雄他編1984『大宰府史跡昭和58年度発掘調査概報』
石松好雄他編1985『大宰府史跡昭和59年度発掘調査概報』
杉山富雄編1985『板付周辺遺跡調査報告書（10)』
舟山良一編1986『仲島遺跡Ⅴ』
石松好雄他編1986『大宰府史跡昭和60年度発掘調査概報』

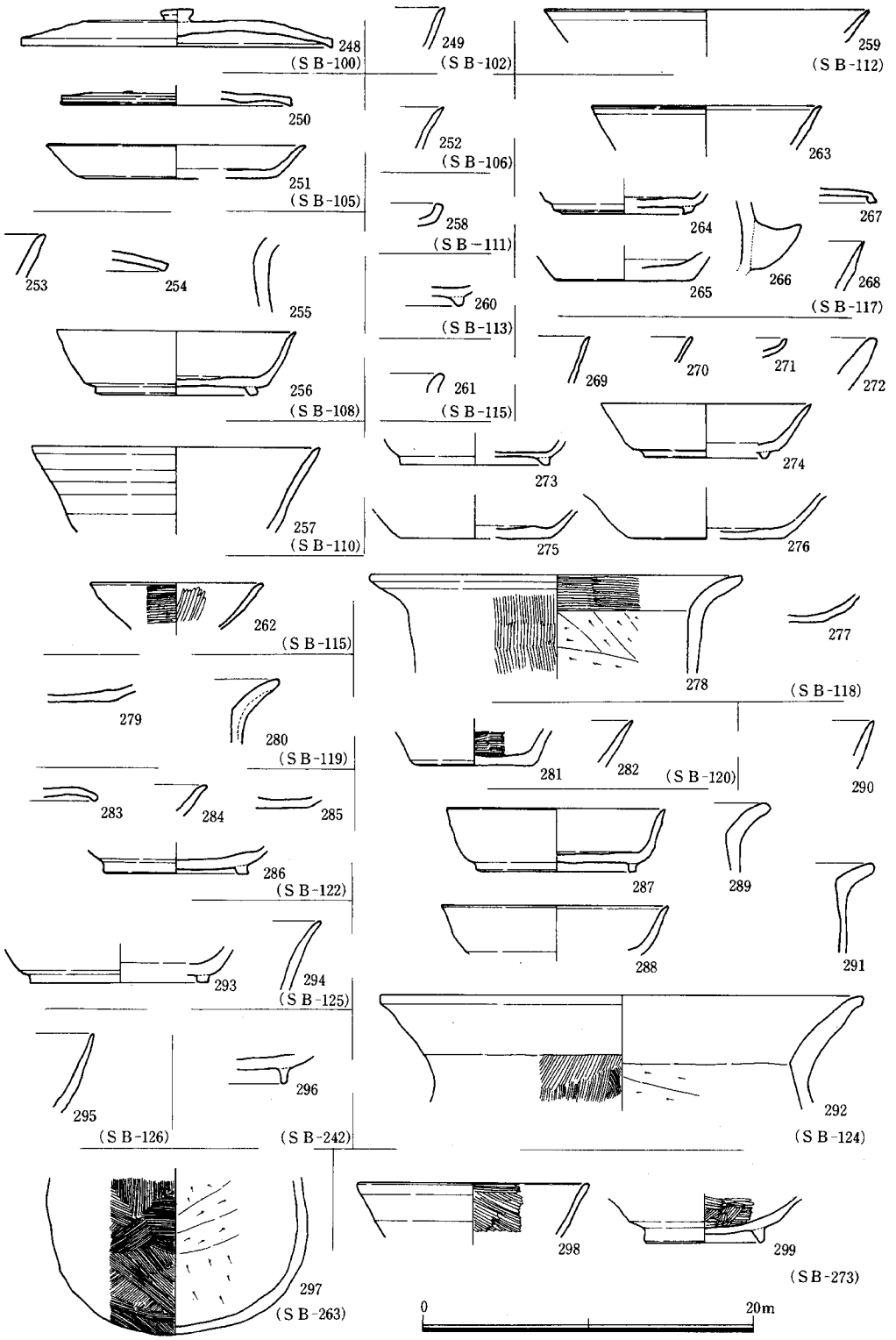


Fig. 41　各掘立柱建物出土土器実測図

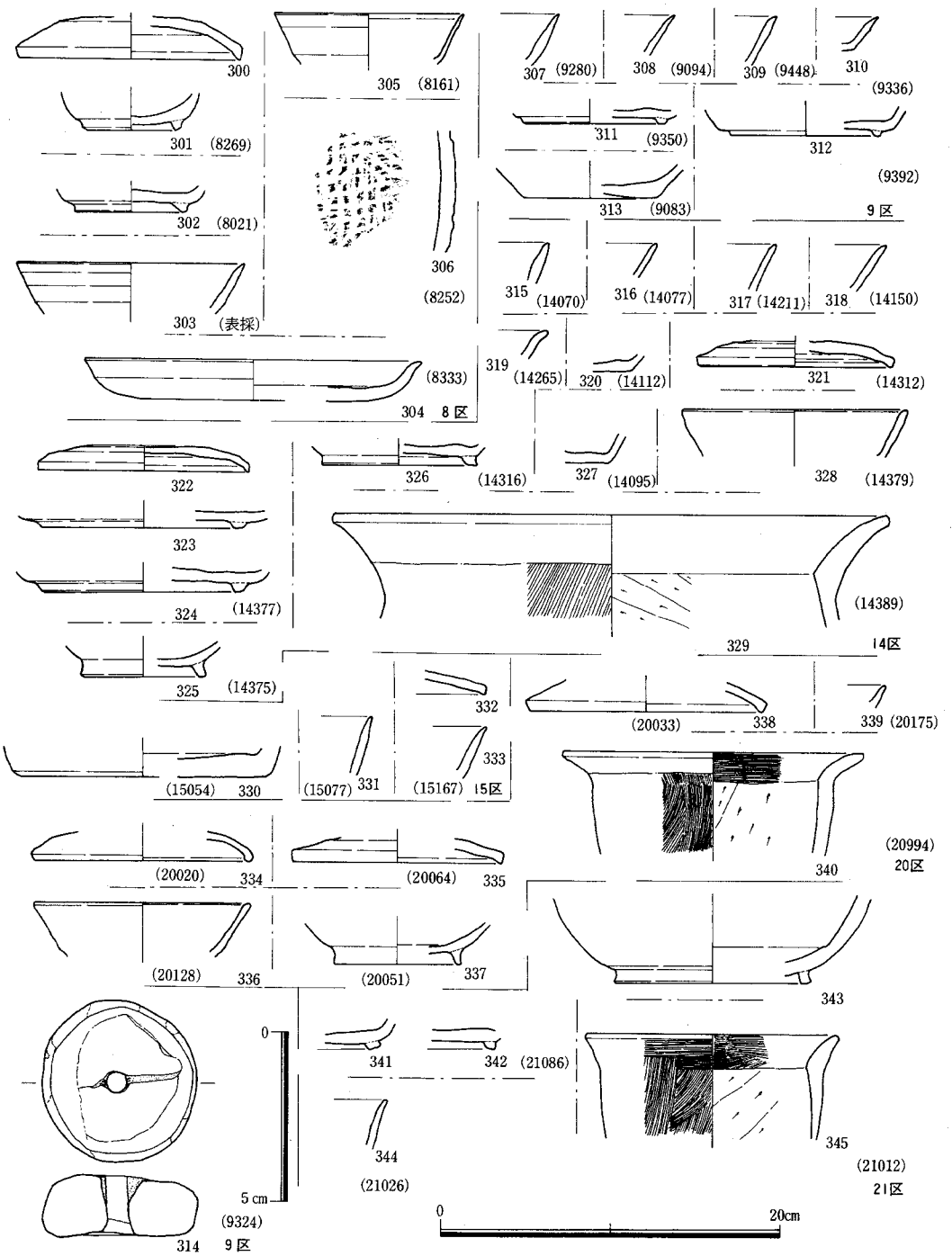


Fig. 42　掘立柱建物柱穴出土遺物実測図

３．竪穴住居址と出土遺物

本調査区は、掘立柱建物を主体とする集落であるが、その中で隅丸方形を呈する比較的大きい土壙４基が検出された。これらの土壙は張り床が検出されたり、床面が叩きしめられていることなどから、ここでは竪穴住居址として扱う。

(1)　第13号竪穴住居址（ＳＣ－13）(Fig. 43・44)

７・13区検出で、ＳＤ－68に切られている。6.4×（3.1＋α）ｍを検出したが、調査対象外の東側へ延びているため規模は分らない。遺構遺存状態は約50cmで、上から暗灰褐色土・灰褐色土・黄褐色粘質土混り灰褐色土・黄白色粘土混り灰褐色粘質土が覆土となっている。完掘状況でみるとベットをもつ竪穴になるが、ベットの面で一面張り床となり、粘土混りの土を叩きしめている。隅丸方形の竪穴住居址と考えられるが、柱穴は未確認である。ちなみに完掘後の床面は、凹凸がみられる。遺物は、ほとんどのものが、張り床の下から出土した。

出土遺物（Fig. 44）

本遺構からは須恵器・土師器がまとまって出土した。他に移動式カマド片も出土した。

須恵器（346～366）

蓋（346～349）　いずれも返しなしのもので、口縁部端は先端がつぶれた三角形状をなしている。天井部から体部にかけてはヘラ削り、つまみ接合部はナデ調整、口縁部から内面にかけては横ナデ調整が施されている。346は口径21.8cm・器高3.6cmである。

坏（350～360）　底部がないものがあるが、有高台坏と考えられる。口径は360が最も大きく19.8cmあり、356の底径10.8cmと対応すると考えられる。口径が最も小さいのは363の10.2cm・器高3.4cmで底径7.8cmである。354は口径17.8cm・器高5.5cmで底径10.2cmで、高台の高さは４mmである。外底部はヘラ切り後、ナデ調整が施され、体部内外面は横ナデ調整が施されている。底部と体部の境は比較的明瞭である。８世紀中頃のものか。

土師器（367～382）

蓋（367～370）　いずれも返し無しである。367は、体部と天井部の境は不明瞭で、体部から天井にかけては回転ヘラ削り後ヘラミガキを施し、口縁部は横ナデ調整が施している。口径は21.2cmである。

坏（371～373）　371・372は有高台坏でヘラ切り後、ナデ調整が施されている。373は横ナデ調整後ヘラミガキが施されている。

Tab. 2　竪穴住居址一覧表

遺構番号	形　状	規　模（m）	出土遺物番号	備　考
ＳＣ－13	不整方形	6.4×(3.1＋α)	346～382	ＳＤ－68に切られる。8世紀中頃～後半
ＳＣ－14	隅丸方形	3.9×3.4×0.26	383、384	ＳＤ－33～35に切られる。８世紀前半
ＳＣ－15	不整形	(4.0＋α)×3.1×0.27		ＳＤ－56、57、60に切られる。
ＳＣ－82	〃	7 ×2.3×0.1		

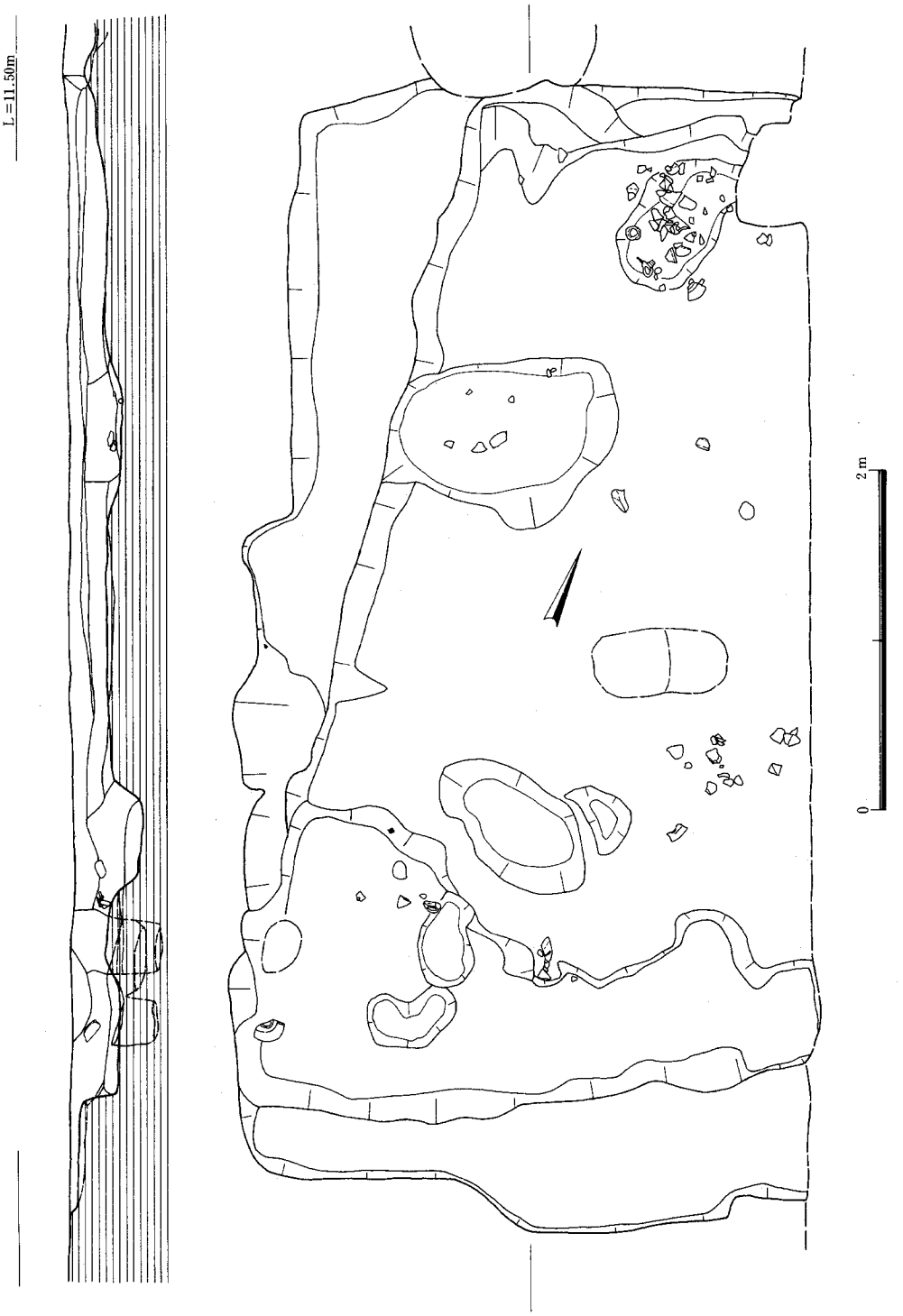


Fig. 43　第13号竪穴住居址実測図

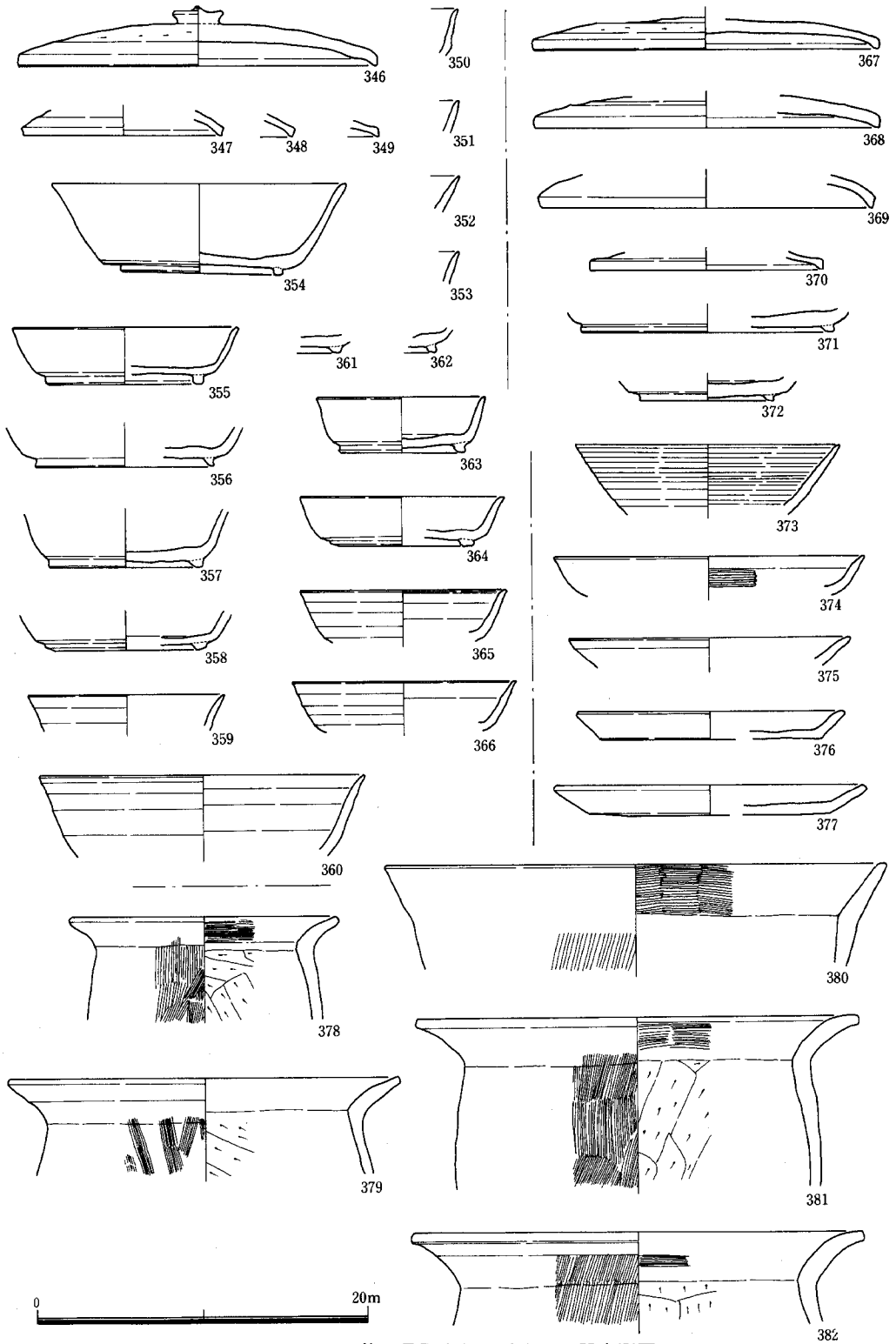


Fig. 44　第13号竪穴住居址出土土器実測図

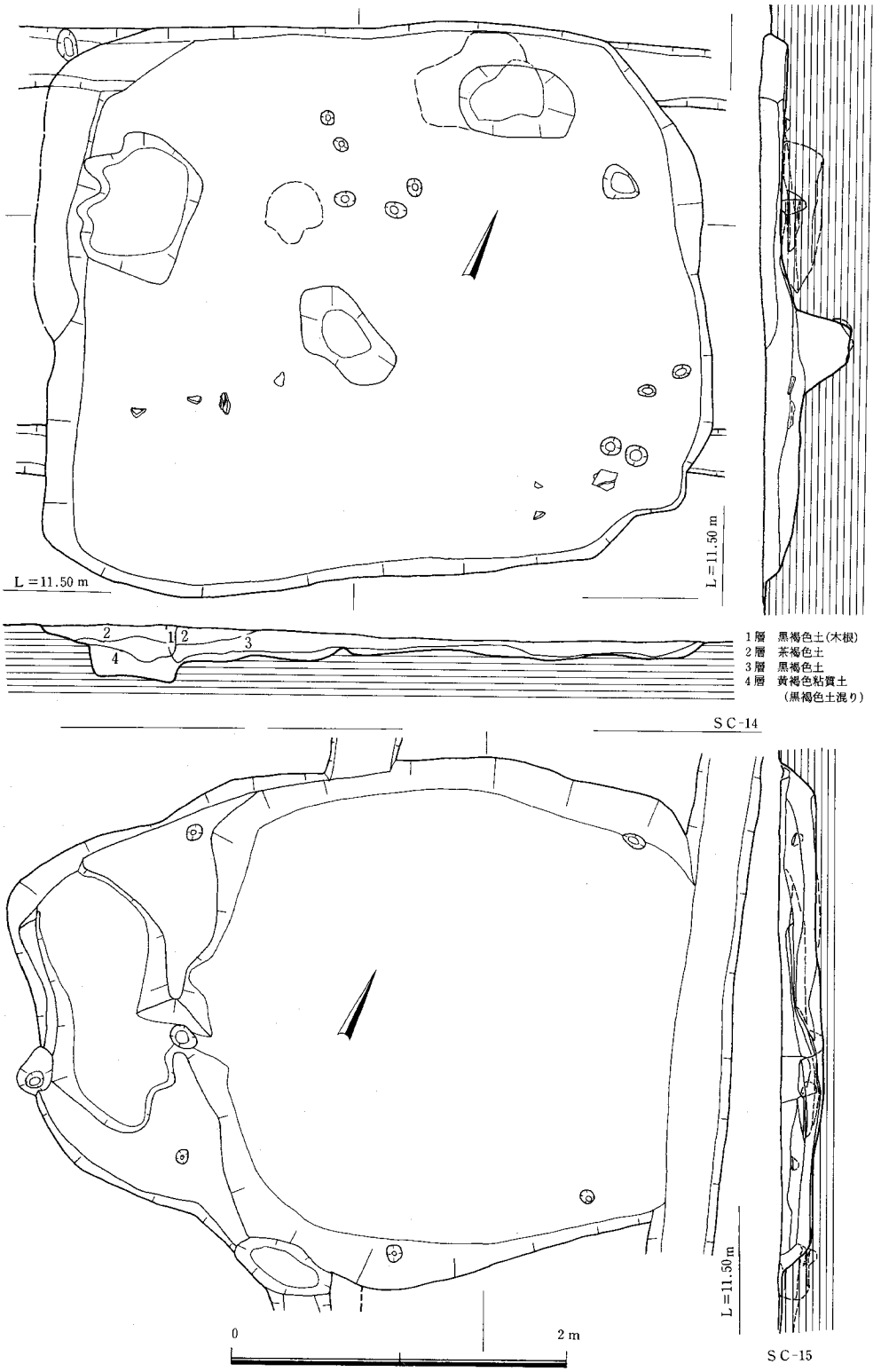


Fig. 45　第14・15号竪穴住居址実測図

皿(374～377)　374が口径18.3cm・器高2.2＋αcmと比較的深い。376・377は口径16.4cm・19cm、器高1.7cm・1.8cmで、体部と底部の境は明瞭である。外底部はヘラ切りで、体部から口縁内外面は横ナデ調整が施されている。

甕（378～382）　378が口径16.4cmと小形で、他は24cmをこえている。すべて体部外面は縦方向のハケ目調整が施され、体部内面の屈曲部下はヘラ削りが顕著である。379の口縁部はナデ調整が施されているが、他は、口縁部内面に横方向のハケ目調整がみられる。

以上の出土土器と出土状態から本竪穴は８世紀中頃から後半のものといえよう。

(2)　第14号竪穴住居址（ＳＣ－14）(Fig. 45・46)

８区検出で、ＳＢ－111の東側に位置し、ＳＤ－33～35に切られている。長軸3.9m、短軸3.4mの隅丸方形を呈する土壙で、附設土壙？などを除くと、遺存状態は10cm前後である。床面は叩きしめられているが、柱穴は未確認である。柱穴は本竪穴の外に巡っていたと考えられるが削平されている。遺物は少ないが、床面から出土した。

出土土器（Fig. 46）

383は須恵器蓋で、口縁端部は折り曲げている。384は底径13.4cmの有高台坏で、外底部はヘラ切り後、ナデ調整を施している。

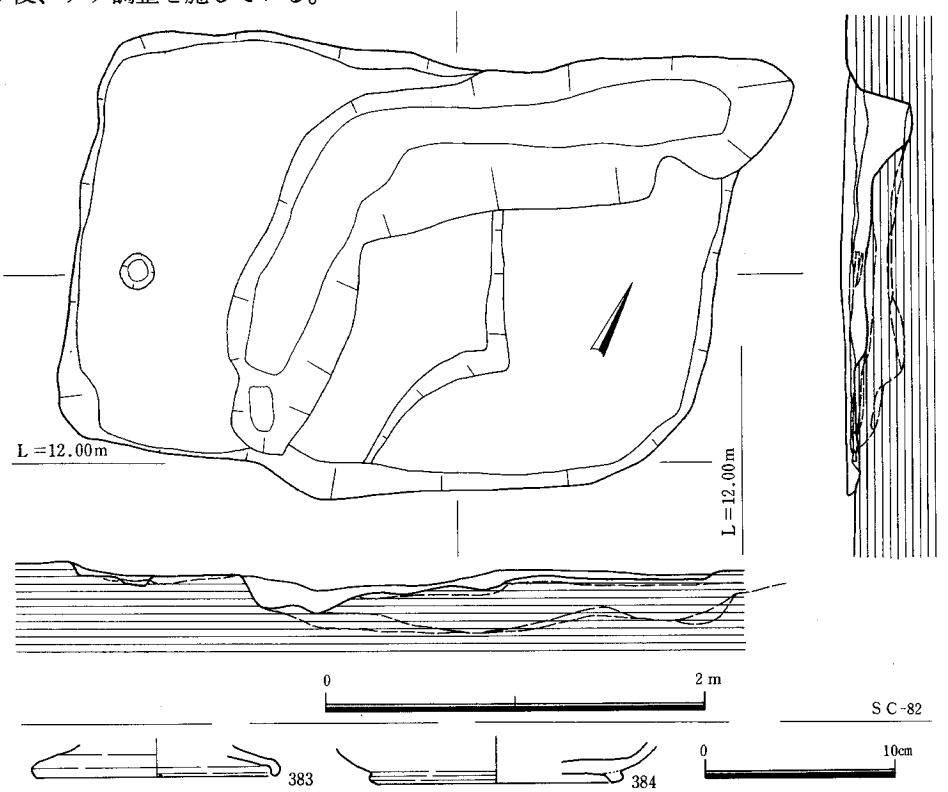


Fig. 46　第82号竪穴住居址及び第14号竪穴住居址出土土器実測図

出土土器から本竪穴は８世紀前半期のものか。

(3)　第15号竪穴住居址（ＳＣ－15）(Fig. 45)

８区検出で、ＳＤ－56・57・60に切られている。長軸４ｍ・短軸3.1ｍの不正形の土壙である。遺存状態は30cm前後で、上から暗茶褐色土・黒褐色土・黄褐色土が覆土となっている。柱穴は未確認であるが、床面が叩きしめられており、ＳＣ－13・14と共通性があるため竪穴住居址とした。

(4)　第82号竪穴住居址（ＳＣ－82）(Fig. 45)

８・14区検出で、ＳＢ－116の東側に位置している。長軸3.5ｍ、短軸2.3ｍの長方形を呈する土壙で、遺存状態は10cm前後と悪い。床面は凹凸があり、安定していない。また茶褐色土・暗茶褐色土を覆土としているが、出土遺物もなく、柱穴も未確認である。

４．井戸と出土遺物

本調査区では、３基の井戸を検出したが、他にＳＫ－16・93など井戸の可能性が高いものもあるが、含水層まで達していないので、後者については、土壙として扱うことにする。

本遺跡でみると、第２次調査区で８世紀後半期の木枠組みをもった井戸が検出されている。

(1)　第80号井戸（ＳＥ－80）

９区検出で、ＳＢ－104の東側に位置している。径1.1ｍの円形を呈し、遺存状態は73cmの深さをもっている。断面は袋状を呈し、暗茶褐色土・灰白色砂・暗灰色シルト・黒色粘質土・灰色砂・黄褐色粗砂が覆土となっており、含水層まで達している。出土遺物は少なく、小片が多いため図化しなかったが８世紀後半期から９世紀前半期のものと考えられる。

(2)　第88号井戸（ＳＥ－88）(Fig. 47)

第20区検出で、ＳＢ－125の南側に位置し、ＳＤ－172・202を切っている。径３ｍ前後の不正円形を呈し、遺存状態は1.1ｍの深さをもち、断面は摺（スリ）鉢状をなしている。砂質土・粘質土・粗砂が覆土となっており、含水層まで達している。

出土土器（385～395）

須恵器（385・391・395）

385は、有高台坏で外底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。391は高坏脚部・395は甕である。

Tab.３　井　戸　一　覧　表

遺構番号	形　　状	規　　模（m）	出土遺物番号	備　　考
ＳＥ－80	円　　形	1.1×0.71×0.73		８世紀後半～９世紀前半
ＳＥ－88	不整楕円形	3.45×2.55×1.10	385～395	ＳＯ－172・202を切る。８世紀後半
ＳＥ－91	円　　形	1 .4×1.35×0.74	396～400	８世紀後半

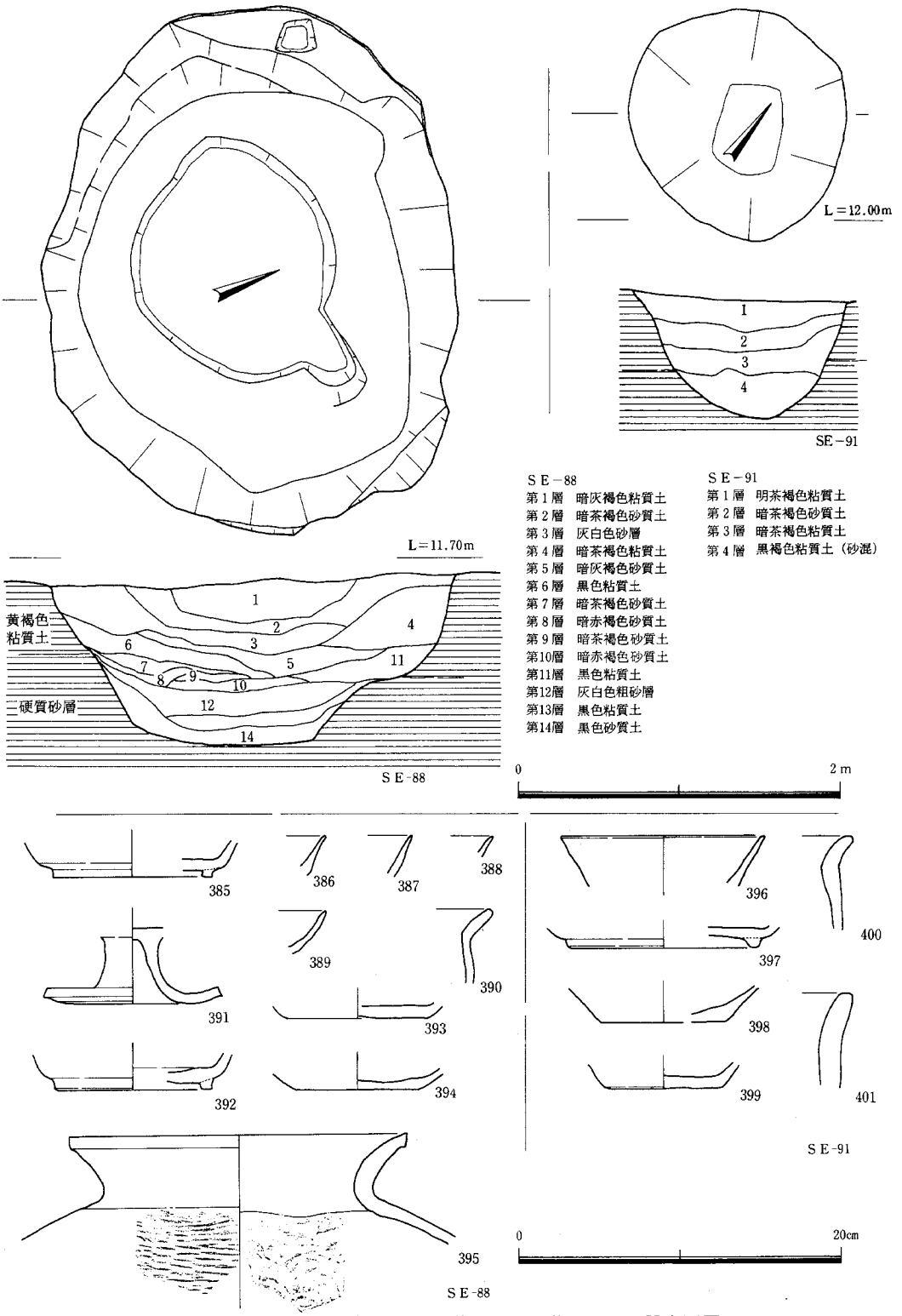


Fig. 47　第88・91号井戸及び同井戸出土土器実測図

土師器（386～390・392～394）

386～389・392～394は坏である。392・393は有高台坏で、外底部はヘラ切り後、ナデ調整が施されている。394は無高台坏で外底部はヘラ切り、体部内外面はナデ調整が施されている。390は甕の口縁部片である。８世紀後半期のものか。

(3)　第91号井戸（ＳＥ－91）(Fig. 47)

20区検出で、ＳＢ－２６８の南側に接して位置している。径1.4mの円形を呈し、遺存状態は74cmの深さをもち、断面は摺鉢状をなしている。粘質土・砂質土を覆土とし、含水層まで達している。

出土土器（396～401）　**土師器**

396～399は坏で、397は有高台坏、398・399は無高台坏である。外底部はヘラ切り後、ナデ調整が施され、体部は横ナデ調整が施されている。398・399の底部と体部の境は明瞭である。400・401の甕は口縁部片である。８世紀後半期のものか。

５．土壙と出土遺物

本調査区では46基の土壙を検出した。井戸状を呈するもの、土壙墓と考えられるもの、竪穴住居址と考えられるものなど各種がある。ここでは一括して、遺物が出土している土壙についてみていくことにする。

(1)　第83号土壙（ＳＫ－83）(Fig. 48)

20区検出で、ＳＢ－123を切っている。一辺約１mの方形を呈し、床面は凹みがあるものの、壁は直に立ち上がっている。東側が現代建物基礎のため削平されているが、遺存状態は15～37cmである。覆土は，茶褐色～黒色の粘質土で、人為的に埋められ、床の凹みは、水平になるように固められている。遺物は、床上約10cmの所に甕が倒立した形で出土した。覆土堆積状態・遺物出土状態から墓と考えられる。

出土遺物（402・403）

402は須恵器無高台坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。403は土師器甕である。

出土土器から本土壙は、８世紀後半期のものといえよう。

(2)　第93号土壙（ＳＫ－93）(Fig. 48・49)

15区検出で、ＳＢ－261を切っている。一辺1.7m前後の方形を呈し、床もほぼ平らで、壁は直に立ち上がる。床には柱穴と考えられる３個の浅い凹まりがある。壁・床面は叩きしめられており、柱穴があることから、何らかの附設があったと思われる。覆土は茶褐色～黒灰色粘質土で、遺存状態は67cmである。遺物は、下半部からまとまって出土した。

出土遺物（406～436）

新羅土器（415）

壺の胴上半部片と考えられ、器外面は丁寧な横ナデ調整後、コンパスを使った径５㎜の円紋が付されている。また円紋下には２条の沈線が巡っている。胎土は精良で、器面は青灰色を呈し、焼成も良い。本遺跡ではＳＫ－85などから４点（３個体？）出土している。

須恵器（406～414）

蓋（406・407）　口縁端は丸みをもちナデ調整が施され、天井部はヘラ削り後ナデ調整が施されている。406は口径15.4cm、407は口径12.5cmで器高1.9cmである。

坏（408・410・411）　有高台坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。体部と底部の境は不明瞭である。410は口径11.5cm・器高4.7cmで底径は5.9cmである。

皿（409・413・414）　外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部は横ナデ調整が施されている。414は口径19.8cm・器高２cmで底径15.8cmである。

Tab. 4　土壙一覧表

遺構番号	形　状	規　模（m）	出土遺物番号	備　考	遺構番号	形　状	規　模（m）	出土遺物番号	備　考
ＳＫ- 11	隅丸方形	2.4×0.95(＋α)×0.36	437～442	８Ｃ前半～中頃	ＳＫ-159	隅丸方形	0.9×0.8×0.2	404	
ＳＫ- 12	円　形	2.0×1.9×0.28	443～445	ＳＤ-38・40に切られる ８Ｃ後半	ＳＫ-160	方　形	1.2×9.6×0.50	405	墓か、８Ｃ後半
ＳＫ- 16	不　整 隅丸方形	1.4×1.2×0.77		ＳＤ-62を切る 井戸か	ＳＫ-161	不 整 形	2.65×2.25×0.13	608～613	SB-271・SD-216に切られる ８Ｃ後半
ＳＫ- 17	〃	1.2×0.75×0.25		土壙墓か	ＳＫ-162	不整円形	0.9×0.65×0.58		土壙墓か、
ＳＫ- 18	〃	1.5×0.9×0.03			ＳＫ-163	不　整 楕 円 形	1.7×1.4×0.7	614～620	SK-164・SD-231を切る ９Ｃ前半
ＳＫ- 19	不　整 長楕円形	1.6×1.0×0.29			ＳＫ-164	不整円形	1.7×1.65×0.5	621～622	ＳＫ-163に切られる ８Ｃ後半
ＳＫ- 20	〃	(2.7)×2.2×0.44	446～454	ＳＤ-56・54・55に切られる ８Ｃ前半～中頃	ＳＫ-165	不 整 形	5.1×2.45×0.55	623～630	ＳＤ-231に切られる ８Ｃ後半
ＳＫ- 26	隅丸方形	1.3×0.75×0.6		ＳＤ-32・ＳＤ-27に切られる 土壙墓か	ＳＫ-167	不整方形	1.15×0.5×0.08	640	土壙墓、9Ｃ末～10Ｃ初
ＳＫ- 81	不整円形	1.3×1.2×0.09			ＳＫ-168	楕 円 形	1.1×0.7×0.42		
ＳＫ- 83	方　形	1.1×1.0	402・403	ＳＢ-123を切る 墓か、８Ｃ後半	ＳＫ-231	不 整 形	3.9×1.35×0.07		
ＳＫ- 84	不 整 形	3.7×2.5×0.55	455～523	SB-242を切り、SB-124・SD-140に切られる。８Ｃ前半～後半	ＳＫ-237	不整方形	1.05×0.9×0.09		ＳＤ-96を切る
ＳＫ- 85	〃	3.6×2.1×0.28	525～547	SD-174・195・187・188を切る ８Ｃ前半～中頃	ＳＫ-246	不整円形	0.8×0.6×0.76		
ＳＫ- 87	〃	3.85×2.05×0.25	548～562	ＳＢ-120に切られる ８Ｃ前半	ＳＫ-247	長楕円形	1.15×0.75×0.26		
ＳＫ- 89	隅丸方形	2.5×1.8×0.16		ＳＢ-121に切られる	ＳＫ-250	隅丸方形	1.3×0.8×0.76		ＳＤ-86を切る
ＳＫ- 90	不整方形	2.9×2.8×0.27	563～599	８Ｃ前半～後半	ＳＫ-251	円　形	径0.75×0.14		
ＳＫ- 92	不 整 形	2.15×1.55×0.25	600～607	８Ｃ後半～９Ｃ前半	ＳＫ-252	楕 円 形	0.95×0.75×0.07		
ＳＫ- 93	方　形	1.7×1.65	406～436	ＳＢ-261を切る ８Ｃ中頃～後半	ＳＫ-253	不 整 形	1.3×0.85×0.06		ＳＤ-8に切られる
ＳＫ-149	不整方形	1.7×1.5×0.05			ＳＫ-254	不整方形	3.5×2.1×0.17	636、637	SD-8に切られる 竪穴住居址？ ８Ｃ後半
ＳＫ-150	不 整 形	1.75×0.4(＋α)×0.07			ＳＫ-258	円　形	0.75×0.65×0.11		
ＳＫ-151	不 整 形	2.1(＋α)×0.7×0.09			ＳＫ-259	円　形	0.85×0.75×0.10		
ＳＫ-152	不整方形	0.6(＋α)×0.35×0.08			ＳＫ-262	不　整 隅丸方形	0.8×0.7×？		
ＳＫ-155	隅丸方形	0.9×0.8×0.20		SA-133・SD-99を切る	ＳＫ-264	不 整 形	0.95×0.55×0.14		ＳＤ-86に切られる 炉か？
ＳＫ-158	不整円形	0.65×0.4(＋α)×0.08			ＳＫ-265	不整方形	0.8×0.6×0.37		

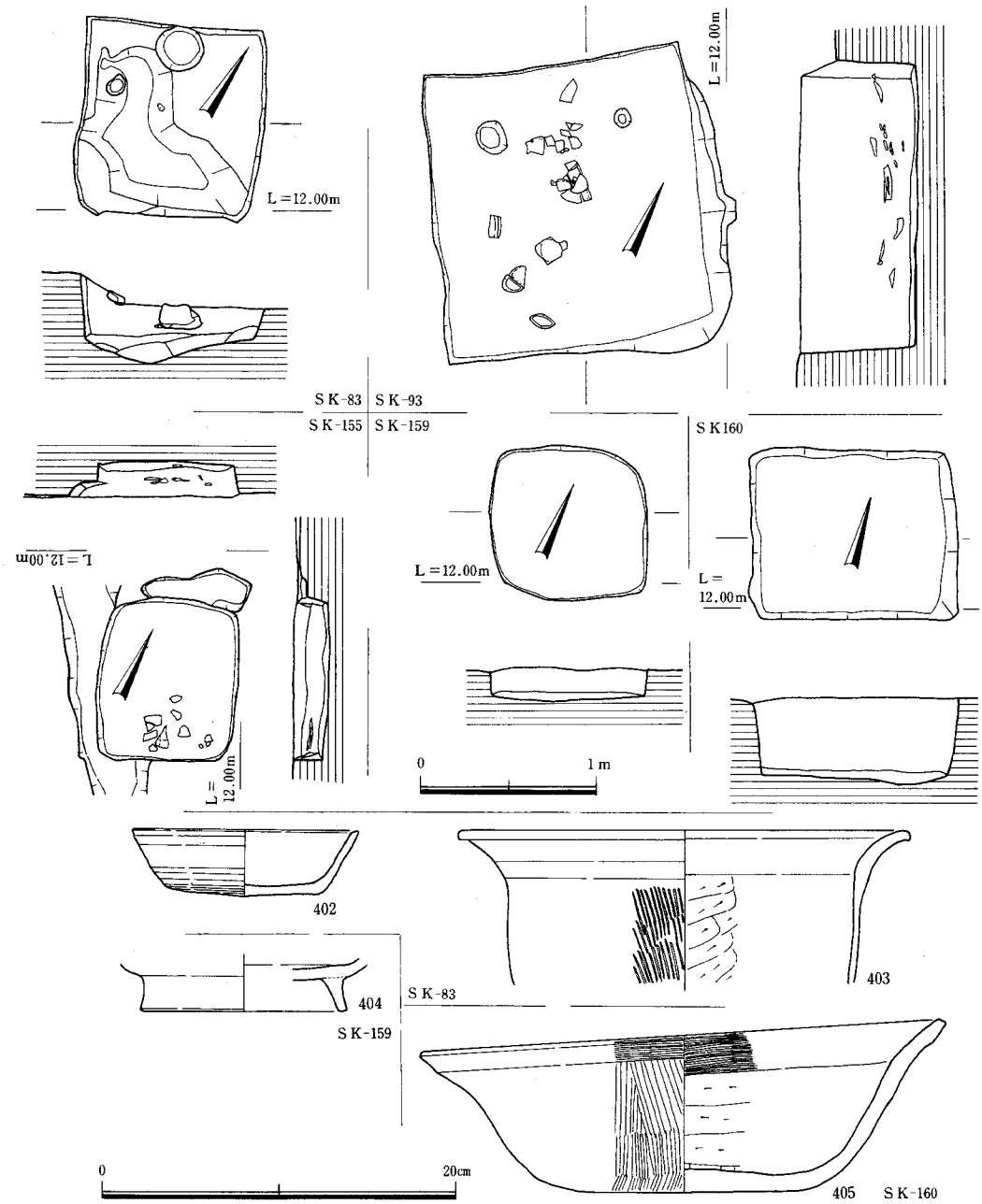


Fig. 48　方形土壙及び出土土器実測図

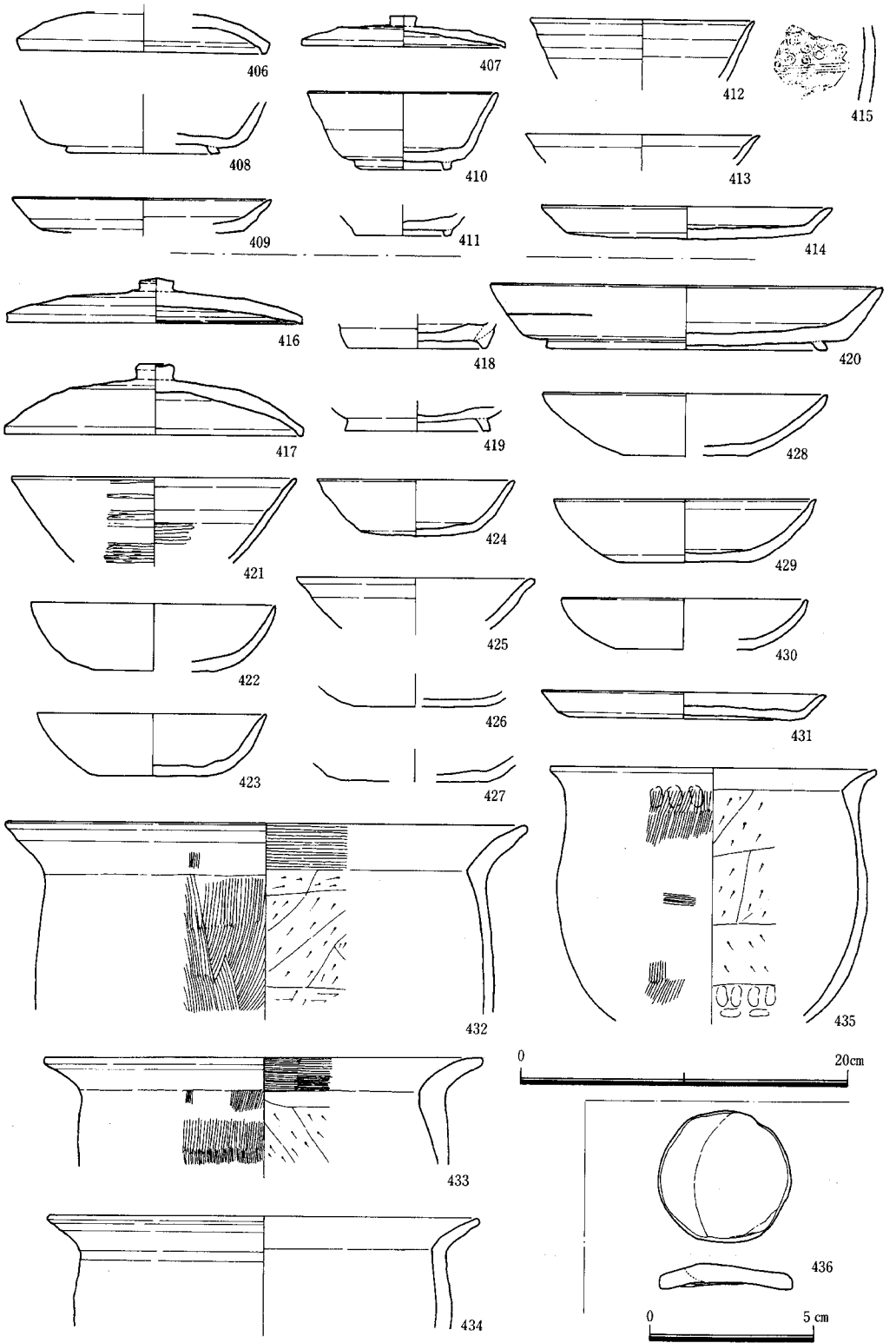


Fig. 49　第93号土壙出土遺物実測図

土師器（416～435）

蓋（416・417）　天井部は回転ヘラ切り後ナデ調整、417の体部は横ナデ調整後ヘラミガキが施されている。416は口径18cmで器高2.7cm、417は口径18.2cmで器高4.3cmである。

坏（418～430）　418～420は有高台坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部は横ナデ調整が施されている。419・420の高台は比較的高く外に開いている。420は口径が24cm・器高4cmで底径9.2cmである。422～430は無高台坏で、底径に比べ口径が大きく体部と底部の境が明瞭な427～430の型と体部と底部の境が不明瞭になるものがある。427～430の外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部は横ナデ調整が施されている。424の外底部はヘラ切りで、体部は横ナデ調整後ヘラミガキが施されている。422・423は口径17cm・14cm、器高4.1cm・3.7cmである。424は口径12cmで器高3.4cmである。428～430は口径17.4cm・16cm・15.2cm、器高は前者２点が3.8cm、後者が３cmである。

皿（431）　外底部はヘラ切り、体部はヘラ削り後ナデ調整が施されている。口径は17.4cmで器高1.6cmである。

甕（432～435）　体部外面は縦方向のハケ目調整、口縁部はナデ調整で、432・433の内面には横方向のハケ目調整が施されている。なお体部内面屈曲部下はヘラ削りが施されている。

土製円盤（436）

外底部ヘラ切りの無高台坏の底部を利用し、打ち欠いて円形に整形し、周縁部は研磨している。

以上の出土土器から本土壙は８世紀後半期のものといえよう。

(3)　第155号土壙（ＳＫ－155）（Fig. 48）

14区検出で、ＳＡ－133・ＳＤ－99を切っている。90×80cmの方形を呈し、床面は平らで、壁はほぼ直に立ち上がっている。遺存状態は20cmである。出土遺物としては、甕の胴部片があるのみである。

(4)　第159号土壙（Fig. 48）

15区検出で、ＳＫ－160の東側、東西に並んだ状態で位置している。ＳＫ－155と同規模の同型の土壙である。遺存状態は20cmである。

出土土器（404）

1.9cmと高い高台をもつ土師器坏？で、外底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。

(5)　第160号土壙（Fig. 48）

15区検出で、120×96cmの方形を呈する土壙である。床面は平らで、壁は直に立ち上がり、遺存状態は50cmである。黒色土・黄褐色土・茶褐色土・黒色粘質土順でほぼ水平に堆積しており人為的に埋められたと考えられる。遺物は最下層の黒色粘質土の上面に１個体底部を上にしてつぶれた状態で出土した。墓と考えられる。

出土土器（405）

盤状を呈する土師器鉢で、体部外面は縦方向、口縁部は横方向・底部は各方向のハケ目調整が施されている。体部内面は横方向・底は中心部に向かってのヘラ削りが施され、口縁部との境は明瞭である。胎土には石英・砂粒を含み堅緻で、黄褐色を呈し、焼成も良い。土鍋の祖形か。

出土土器から８世紀後半期のものか。

(6)　第11号土壙（ＳＫ－11）（Fig. 50）

３区検出で、ＳＢ－100の北側に位置し、調査対象地外へ延びているため完掘できなかった。2.4×（１＋α）ｍの隅丸方形の土壙で、遺存状態は36cmである。床面は凹凸があり、遺物は床面直上から出土した。

出土土器（437～442）

須恵器（437～439・441）

437・438は有高台坏で、外底部はヘラ切り、体部は横ナデ調整が施されている。437は口径14.1cm・器高４cmで底径10cm、438は口径14cm・器高4.6cmで底径９cmである。439も有高台坏か。439は壺である。

土師器（440～442）

坏で、442の外底部はヘラ切り、体部外面から口縁にかけては横ナデ調整、体部内面は横ナデ調整後ヘラミガキを施している。442は口径16.6cmで器高3.4cmである。

出土土器から本土壙は８世紀前半から中頃のものといえよう。

(7)　第12号土壙（ＳＫ－12）（Fig. 50）

８区検出で、ＳＤ－38・40に切られている。径２ｍ前後の円形の土壙で、断面は皿状をなし遺存状態は28cmである。暗茶色・黒色粘質土を覆土とし、床及び壁は固められている。遺物は床面直上で出土した。ＳＫ－81も同型の土壙である。

出土土器（443～445）

蓋で、２点が須恵器、445は土師器である。須恵器蓋は天井が高く、口縁端は退化して丸みをもっている。器面は横ナデ調整が施されている。443は口径15.2cm、器高3.8cm、444は口径12.3cmである。445の天井部はヘラ削り後ナデ調整、体部はヘラミガキが施されている。

他に須恵器無高台坏・有高台坏・甕などが出土している。出土土器から本土壙は８世紀後半期のものといえよう。

(8)　第17号土壙（ＳＫ－17）（Fig. 51）

８区検出で、ＳＢ－112の東側に位置している。120×75cmの隅丸長方形を呈する土壙で、床面はほぼ平らになっており、遺存状態は25cmである。暗茶褐色・黒色粘質土が水平に層をなしている。Ｓ－63°－Ｗに主軸をとる土壙墓と考えられる。

(9)　第20号土壙（ＳＫ－20）(Fig. 51)

８・14区検出で、ＳＤ－54・55に切られている。(2.7)×2.2mの隅丸方形を呈する土壙で、西側床面に120×90cmの方形を呈し、20cm前後の深さをもつ附設土壙がある。遺存状態は20cm前後で、暗茶褐色～黒褐色粘質土を覆土としている。遺物は床面直上から出土した。

出土土器（447～454）

須恵器（447・448）

有高台坏で、外底部はヘラ切り未調整、体部は横ナデ調整が施されている。447は口径14cm・器高４cmで底径9.4cm、448は口径14.2cm・器高3.6cmで底径9.6cmである。

土師器（446・449～454）

蓋（446）　口縁端は丸みをもちナデ調整が施されている。口径19.6cmである。

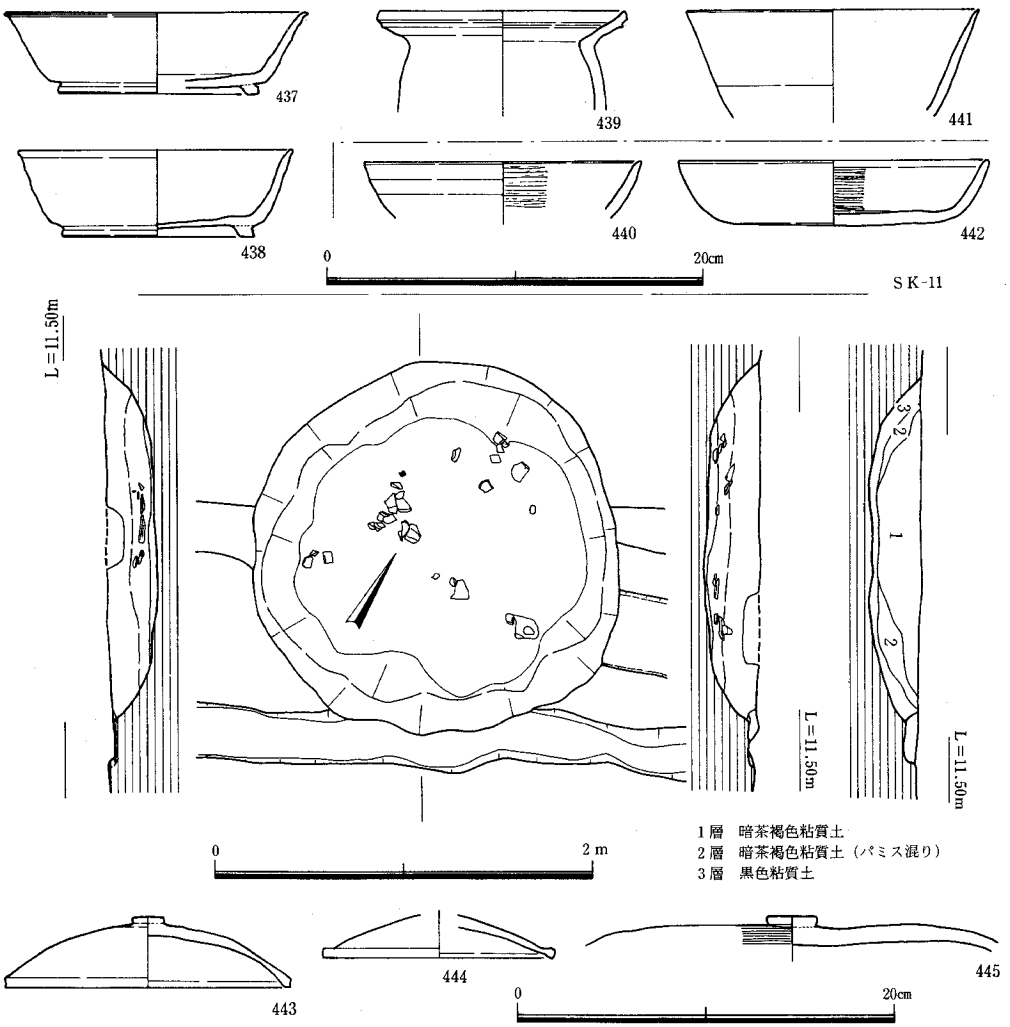


Fig. 50　第12号土壙及び第11・12号土壙出土土器実測図

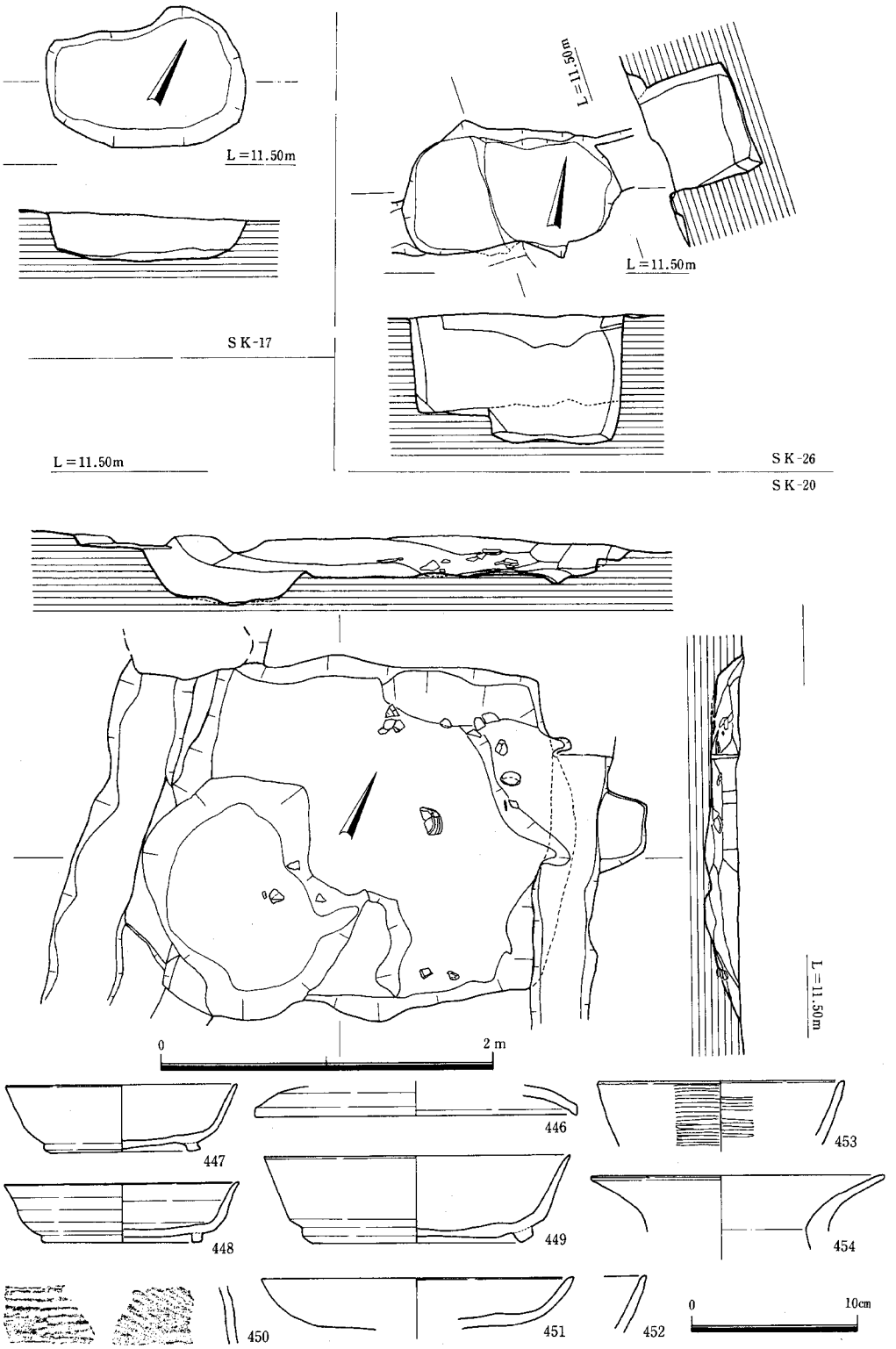


Fig. 51　第17・20・26号土壙及び第20号土壙出土土器実測図

坏（449・451～453）　449は有高台坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整を施しているが体部は磨耗している。口径18.6cm・器高5.3cmで底径14cmである。451は無高台坏で外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部は横ナデ調整が施されている。453は口縁部で横ナデ調整後ヘラミガキを施している。

甕（450・454）　450は胴部片で、外面には格子状叩きが施されている。製塩土器（玄海灘式）と考えられる。454は口縁部片である。

出土土器から本土壙は８世紀前半から中頃のものといえよう。

(10)　第26号土壙（ＳＫ－26）（Fig. 51）

８区検出で、ＳＤ－27・32に切られている。130×75cmの隅丸長方形を呈する土壙で、床面は平らになっており、壁は直に立ち上がっている。遺存状態は75cmである。茶褐色・黄褐色・黒褐色粘質土の水平な互層下に黒色土が堆積しており人為的に埋められたと考えられる。東西に主軸をもつ土壙墓と考えられる。

(11)　第84号土壙（ＳＫ－84）（Fig. 52）

14区検出で、ＳＢ－124に切られ、ＳＢ－242、ＳＤ－174・187・188・195を切っている。長径が3.7ｍ、短径が2.5ｍの不整形を呈する土壙で、遺存状態は35～60cmである。床面中央部はほぼ平らになっているが、壁と接する部分は幅25cm、深さ10～20cmの溝が半周している。検出面から床面にかけて流れ込みの状態で多量の遺物が出土した。

出土遺物（Fig. 53～55）

須恵器（Fig. 53、455～488）

蓋（455～467）　天井部と体部の境が明瞭で、天井部は回転ヘラ削り、体部外面から内面にかけては横ナデ調整が施されている。458・463などは天井部が低く、456・462・465は焼ひずみが大きい。455は口径17cmで器高2.6cm、456は口径16.9cmで器高3.1cm、459は口径15.6cmで器高2.1cm、464は口径14.2cmで器高2.4cm、465は口径13.7cmで器高2.5cmである。

坏（468～476・478・485・486）　468～476は有高台坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。470は口径15.8cm・器高4.9cmで底径11cm、471は口径14.7cm・器高４cmで底径9.9cm、472は口径13.2cm・器高3.5cmで底径8.9cm、473は口径12cm・器高3.4cmで底径8.8cmである。

皿（479・480・482・484）　外底部はヘラ切り後横ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整を施している。479は口径18.2cm・器高2.2cmで底径14.4cm、480は口径21.1cm・器高2.5cmで底径17cmである。

壺（477）　高い高台をもつ底部で、外底部にヘラ記号がある。外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。７世紀後半期のものか。

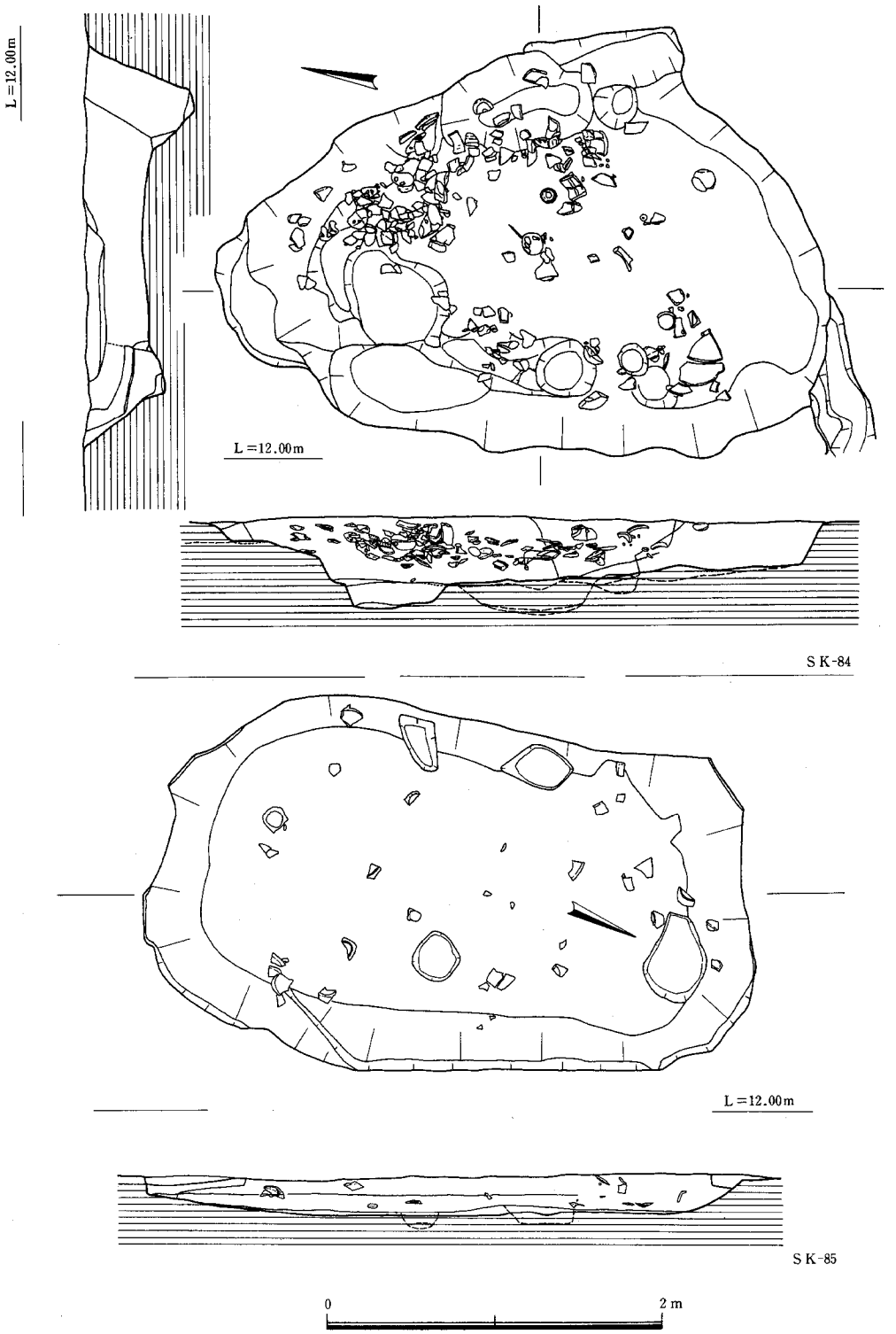


Fig. 52　第84・85号土壙実測図

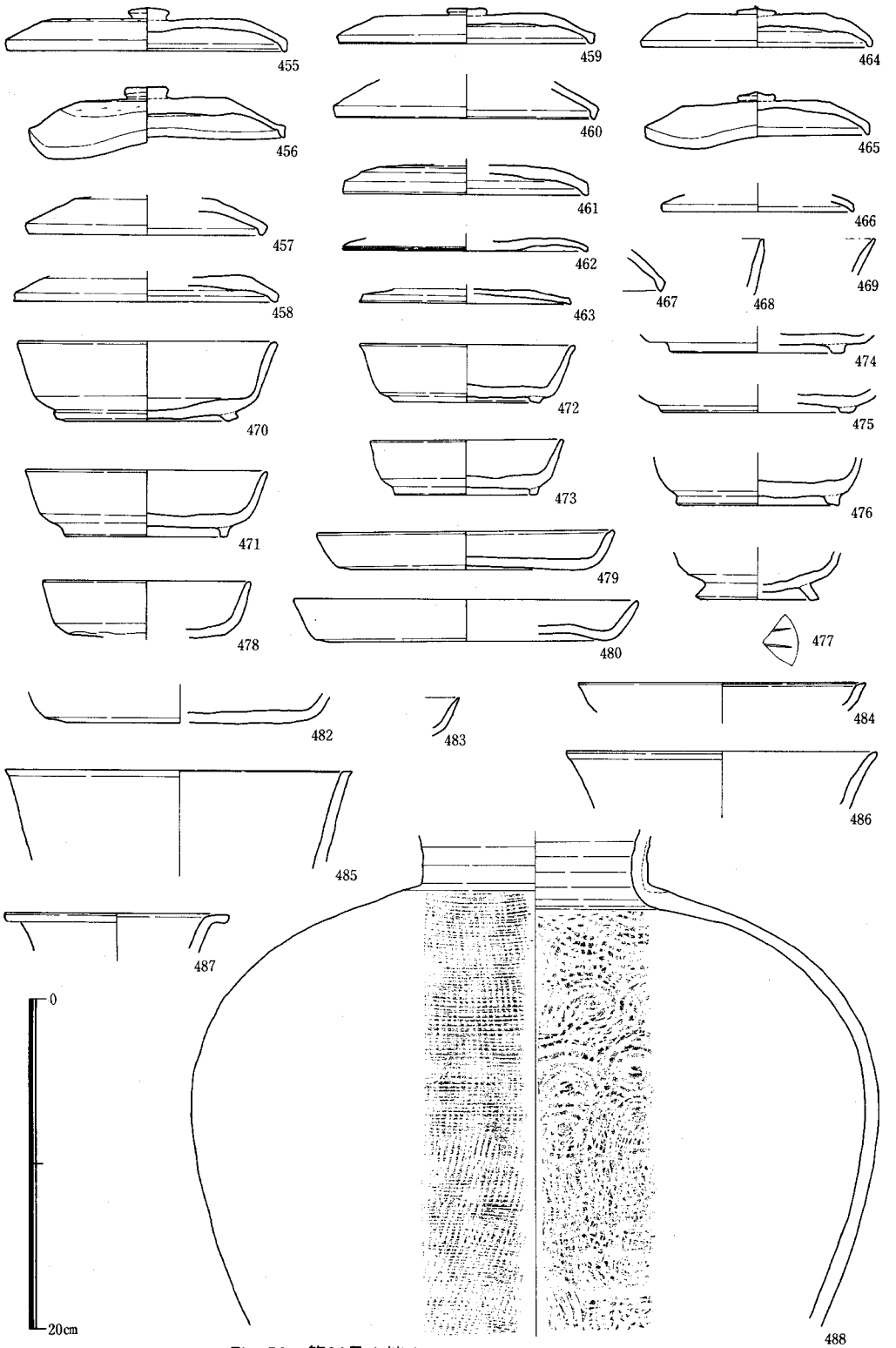


Fig. 53　第84号土壙出土土器実測図(1)（須恵器）

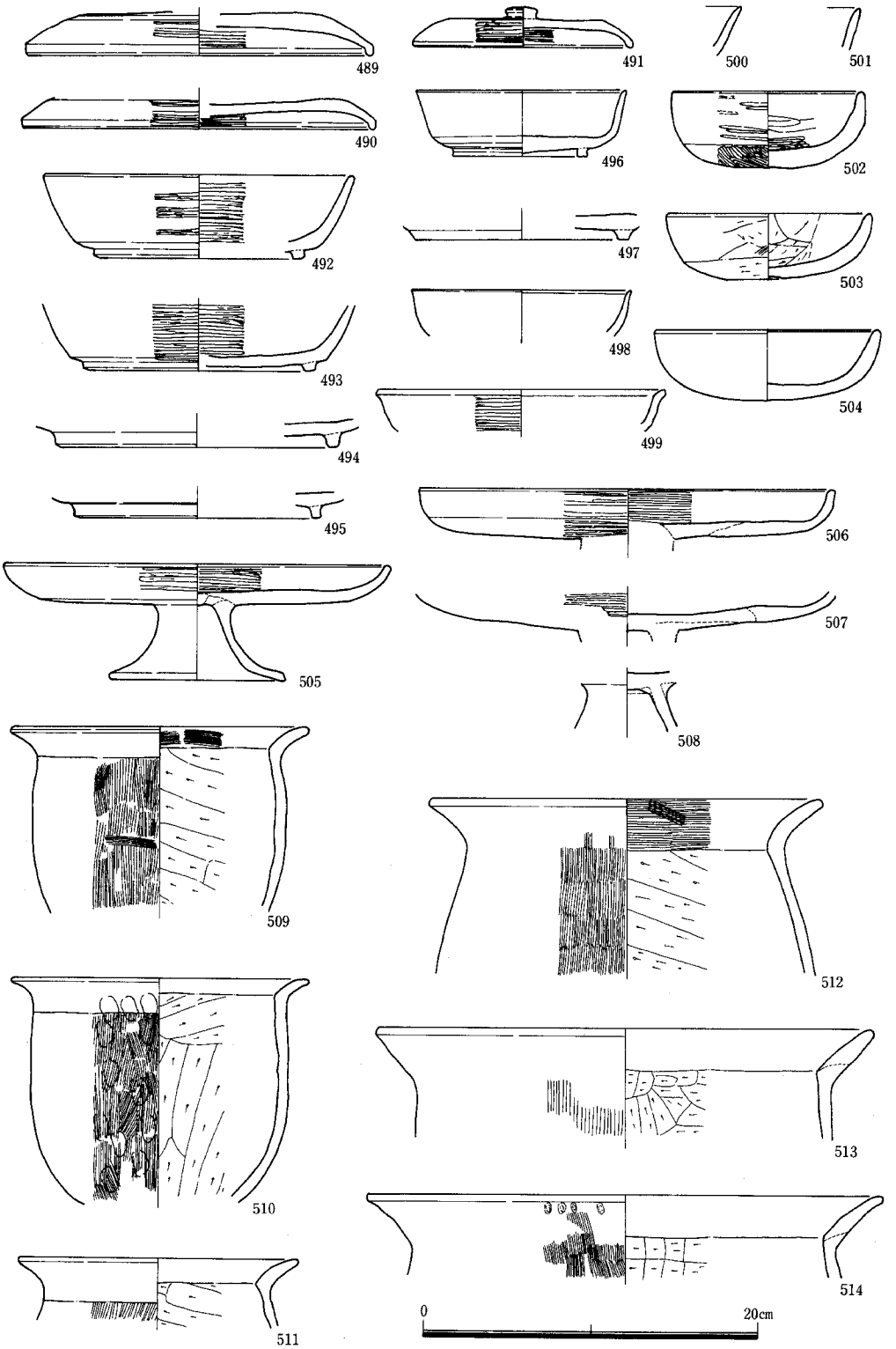


Fig. 54　第84号土壙出土土器実測図 (2)（土師器）

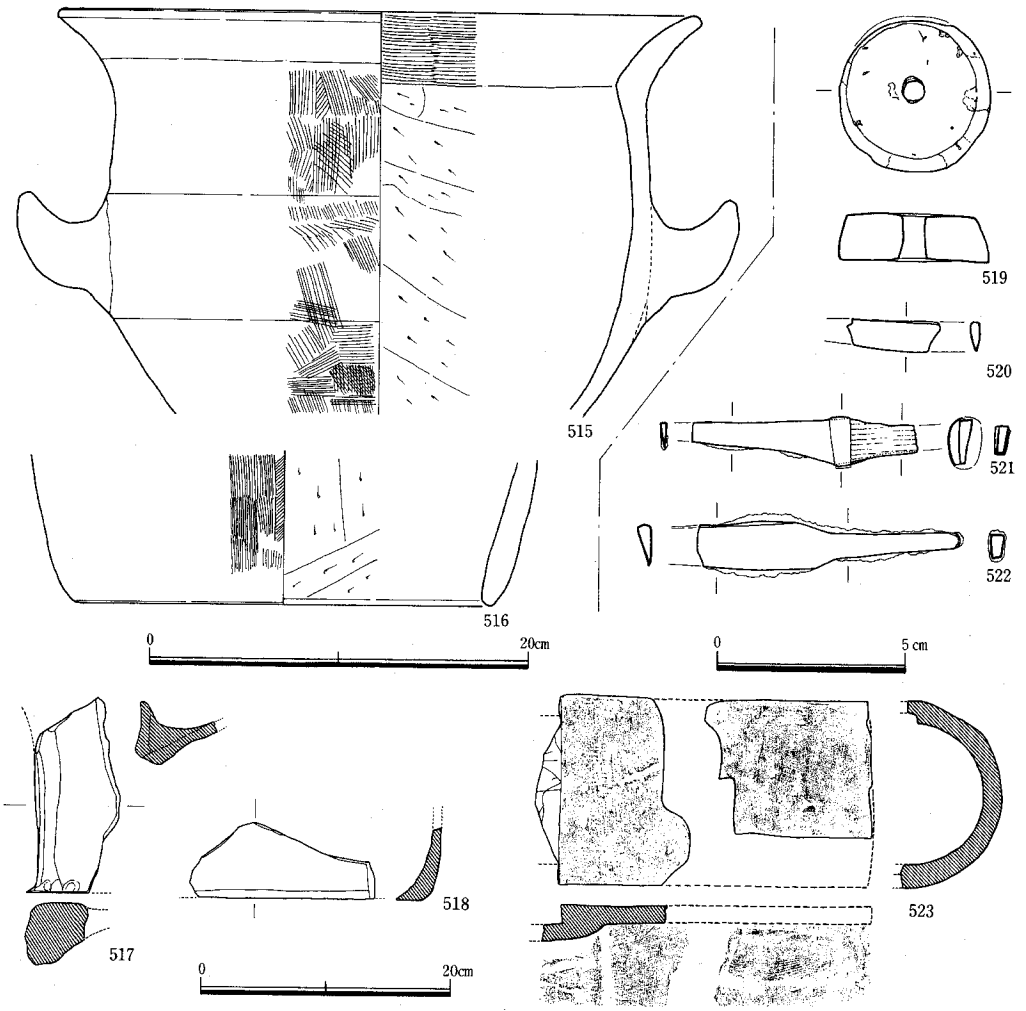


Fig. 55　第84号土壙出土遺物実測図

甕（487・488）　487は口縁部で横ナデ調整が施されている。488の頸部は横ナデ調整、体部外面は格子叩き、内面は青海波叩きが施されている。

土師器（Fig. 54・55、489～516）

蓋（489～491）　体部と天井部の境は比較的明瞭で、口縁端部は丸くなっている。天井部は回転ヘラ切り後ヘラミガキ、体部内外面は横ナデ調整後ヘラミガキ、口縁部は横ナデ調整が施されている。489・490は口径20.8cm・21.3cmで、491は口径13.2cmで器高2.4cmである。

坏（492～504）　492～496は有高台坏、502～504は無高台坏である。496の外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されており、器面は赤褐色から黄褐色を呈している須恵器である。口径は12.5cm・器高４cmで底径7.8cmである。492・493の外底部は回転ヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整後ヘラミガキを施している。492は口径18.8cm・器高５cm

で底径12.8cmである。502～504は木製椀状をなし、器外面は横ナデ調整、内面はヘラ削り後ナデ調整が施されている。502は口径11.5cmで器高4.7cm、503は口径12.4cmで器高3.9cm、504は口径13.5cmで器高4.2cmである。

高坏（505～508）　低い脚部をもつ高坏で、坏部内外面は横ナデ調整後ヘラミガキ、坏外底部は回転ヘラ削りが施されている。なお脚部は横ナデ調整が施されている。505は口径23.4cm、坏部高2.5cm、脚部高4.5cmで底径10.5cmである。506は口径25cmで坏部高3.1cmである。

甕（509～515）　509～514の口縁部は、509・512に横方向のハケ目調整が施されている他は、ナデ調整が施されている。体部外面は縦方向のハケ目調整、内面はヘラ削りが施され口縁部との境は明瞭である。515は把手付である。甑（コシキ）か。

甑（コシキ）（516）　底部で、体部外面は縦方向のハケ目調整、丸くなった底部は横ナデ調整、内面はヘラ削りが施されている。

その他の遺物（Fig. 54・517～523）

移動式竈片（517・518）、土製紡錘車（519）、鉄製刀子（520～522）、丸瓦（523）、平瓦などの遺物が出土している。

出土遺物から本土壙は８世紀前半期から後半期のものといえよう。

(12)　第85号土壙（ＳＫ－85）（Fig. 52）

14・15区検出で、ＳＢ－124の西側に位置し、ＳＤ－174・187・188・195を切っている。3.6×2.1mの楕円形を呈する土壙で、遺存状態は28cmである。黒褐色・茶褐色・黄褐色粘質土を覆土とし、遺物は床面まで流れ込み状態で出土した。

出土土器（Fig. 56）

新羅土器（544）

壺で、外底部はヘラ切り後丁寧なナデ調整、胴部外面下半部及び内面はヘラナデ調整が施されている。胴上半部は丁寧なナデ調整後コンパスを使った径５㎜の円紋が付され、円紋下には２条の沈線が巡っている。胎土は精良で、暗赤褐色を呈し、焼成も良い。外底部は暗赤褐色、器表面は青灰色を呈している。統一新羅後半期のものか。

須恵器（525～543・545）

蓋（525～528・542）　525～528は天井部と体部の境が明瞭で、口縁端部は527が逆三角形を呈するが他は丸みをもっている。526は焼ひずみがある。天井部は回転ヘラ削り、体部内外面は横ナデ調整が施されている。525～528の口径は20.6cm・19.9cm・17.7cm・13.6cmである。542は短頸壺の蓋で、天井部は平らになっている。天井部はナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。天井部径12.7cm・器高2.6cmで口径14.1cmである。

坏（532～541・543）　543が無高台坏、他は有高台坏である。外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。532は口径17cm・器高5.7cmで底径11.6cm。533は口径

17.8cm・器高5.6cmで底径11.5cm。534は口径13.8cm・器高5.1cmで底径9.8cm。530は口径14.4cm・器高3.4cmで底径９cm。531は口径13.2cm・器高４cmで底径7.8cm。535は口径13.8cm・器高3.6cmで底径10.9cm。536は口径14.6cm・器高3.7cmで底径10.9cm。539は口径14.8cm・器高4.4cmで底径10.4cm。540は口径13.6cm・器高3.7cmで底径9.7cm。541は口径13.9cm・器高3.6cmで底径9.8cm。543は口径13.8cmで器高3.5cm。

甕（545）　口縁部は横ナデ調整、体部外面は叩き後ナデ調整、内面は青海波叩き後横ナデ調整が施されている。

土師器（546・547）

黒色土器（546）　坏で、底部は丸みをもっている。外底部は削り痕跡があり、体部外面は横

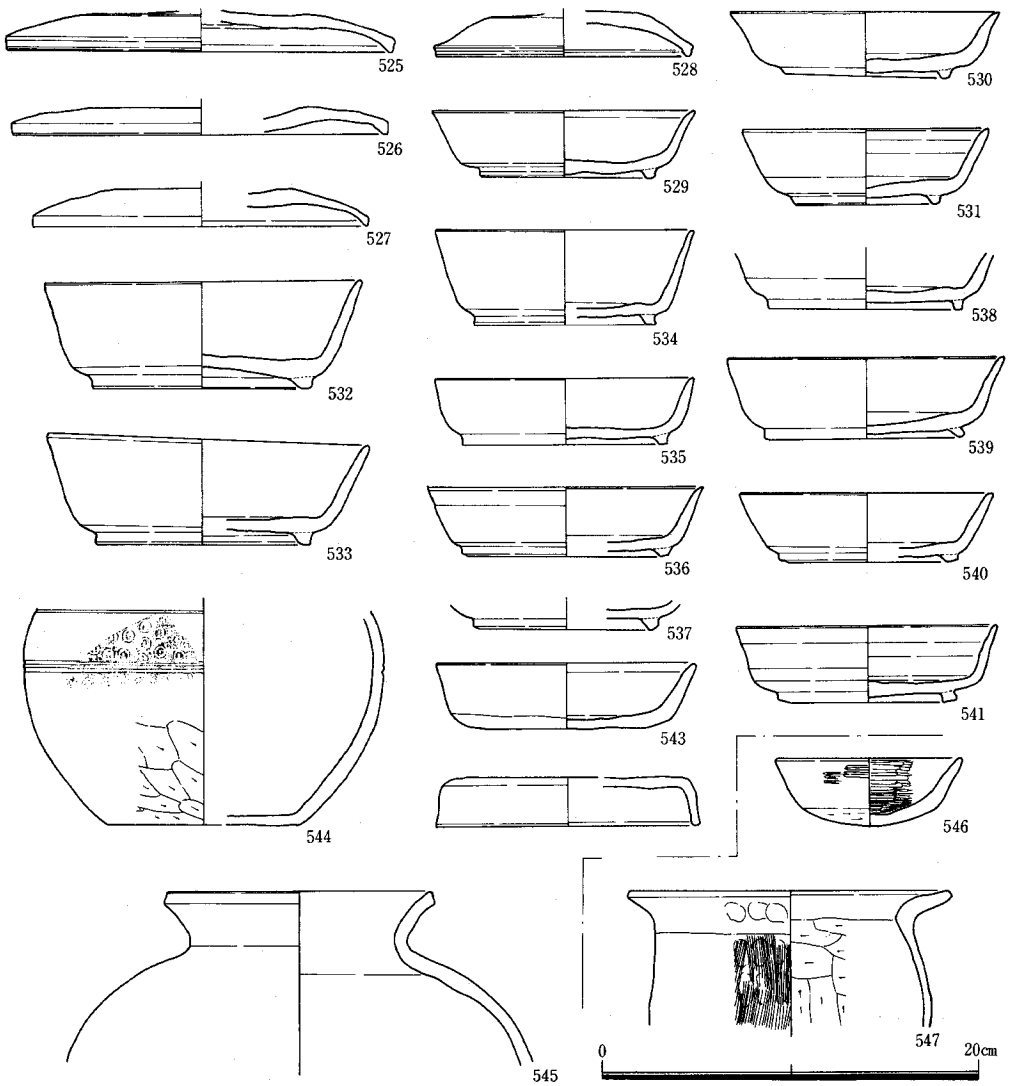


Fig. 56　第85号土壙出土土器実測図

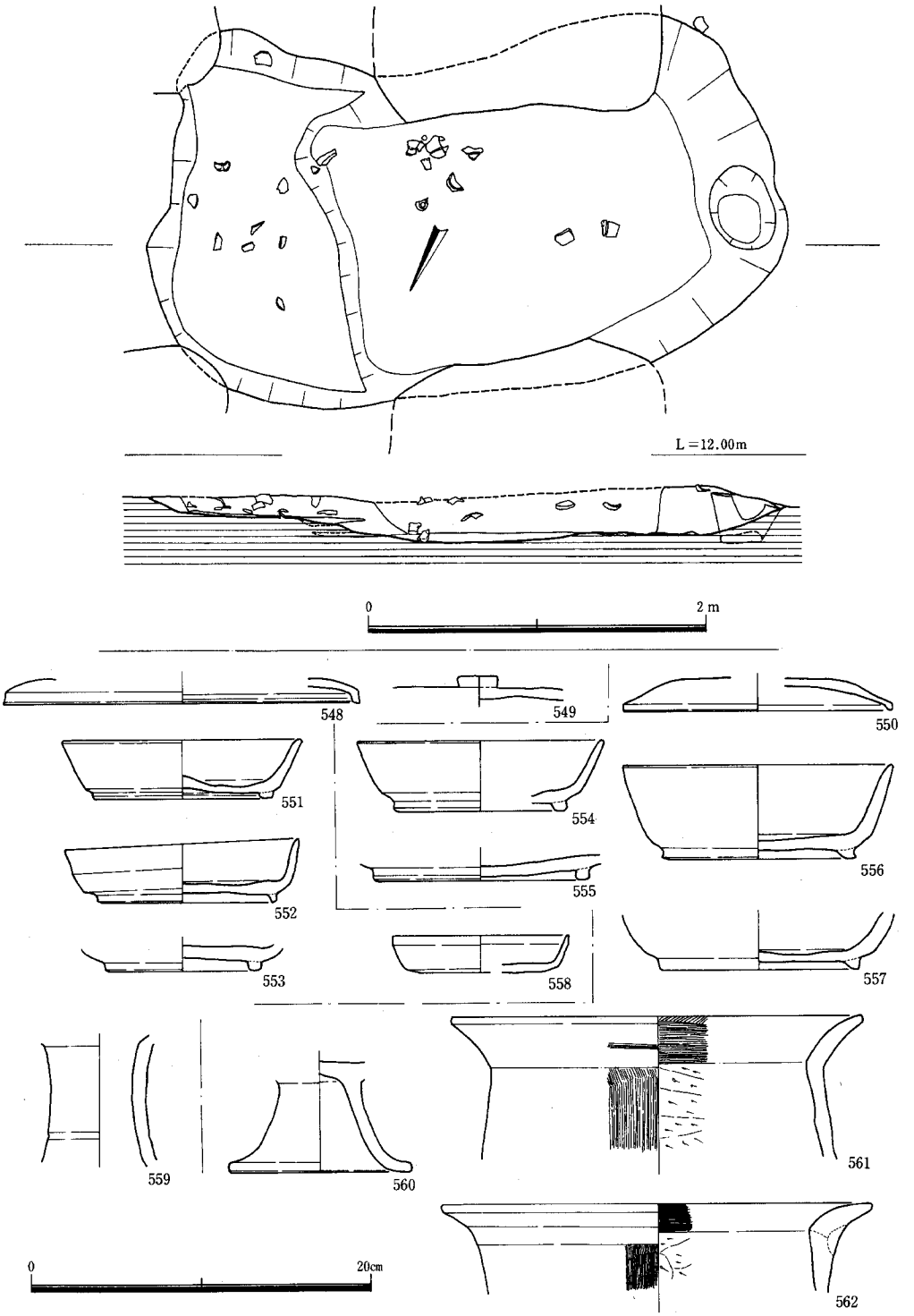


Fig. 57　第87号土壙及び出土土器実測図

ナデ調整後ヘラミガキを施しているが風化剝落している。口縁部から内面にかけてはヘラミガキが施され、黒く発色している。口径10cmで器高3.1cmである。

甕（547）　体部外面は縦方向のハケ目調整・口縁部は横ナデ調整・内面屈曲部下はヘラ削りが施こされている。

出土土器から本土壙は、８世紀前半期から中頃のものといえよう。

⒀　第87号土壙（ＳＫ－87）（Fig. 57）

14区検出で、ＳＢ－102に切られており、南北の壁を現代建物基礎により削られている。3.7×２ｍの楕円形の土壙で、床面は２段掘りになっている。遺存状態は25cm前後で、灰褐色・暗灰褐色・黒褐色粘質土を覆土とし、遺物は検出面から床面まで流れ込み状態で出土した。

出土土器（548～562）

須恵器（548・549・551～553・558・559）

蓋（548・549）　548の口縁端部はコの字状を呈している。549の天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整が施されている。

坏（551～553・558）　558が無高台坏、他は有高台坏である。551～553の外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。551は口径14.3cm・器高3.5cmで底径10.5cm、552は口径13.8cm・器高3.5cmで底径11cmである。558の外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。口径10.5cmで器高2.2cmである。

高坏（559）　軸部片である。

土師器（550・554～557・560～562）

蓋（550）　口縁端は丸みをもちナデ調整、天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。口径は16cmである。

坏（554～557）　有高台坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。556は口径16cm・器高5.6cmで底径11.5cmである。

高坏（560）　脚部で、脚部高5.8cmで底径11cmである。

甕（561・562）　体部外面は縦方向・口縁部内面は横方向のハケ目調整・体部内面はヘラ削りが施されている。

出土土器から本土壙は８世紀前半期のものといえよう。

⒁　第90号土壙（ＳＫ－90）

15区検出で、ＳＢ－114・115の南側に位置している。2.9×2.8ｍの不整方形を呈する土壙で、床面は凹凸があり、遺存状態は35cm前後である。炭化物の多い黒褐色土・パミス混り黒褐色土・黄褐色砂・黒褐色土混り黄褐色砂を覆土とし、遺物は流れ込みの状態で出土した。

出土土器（Fig. 58）

須恵器（563～597）

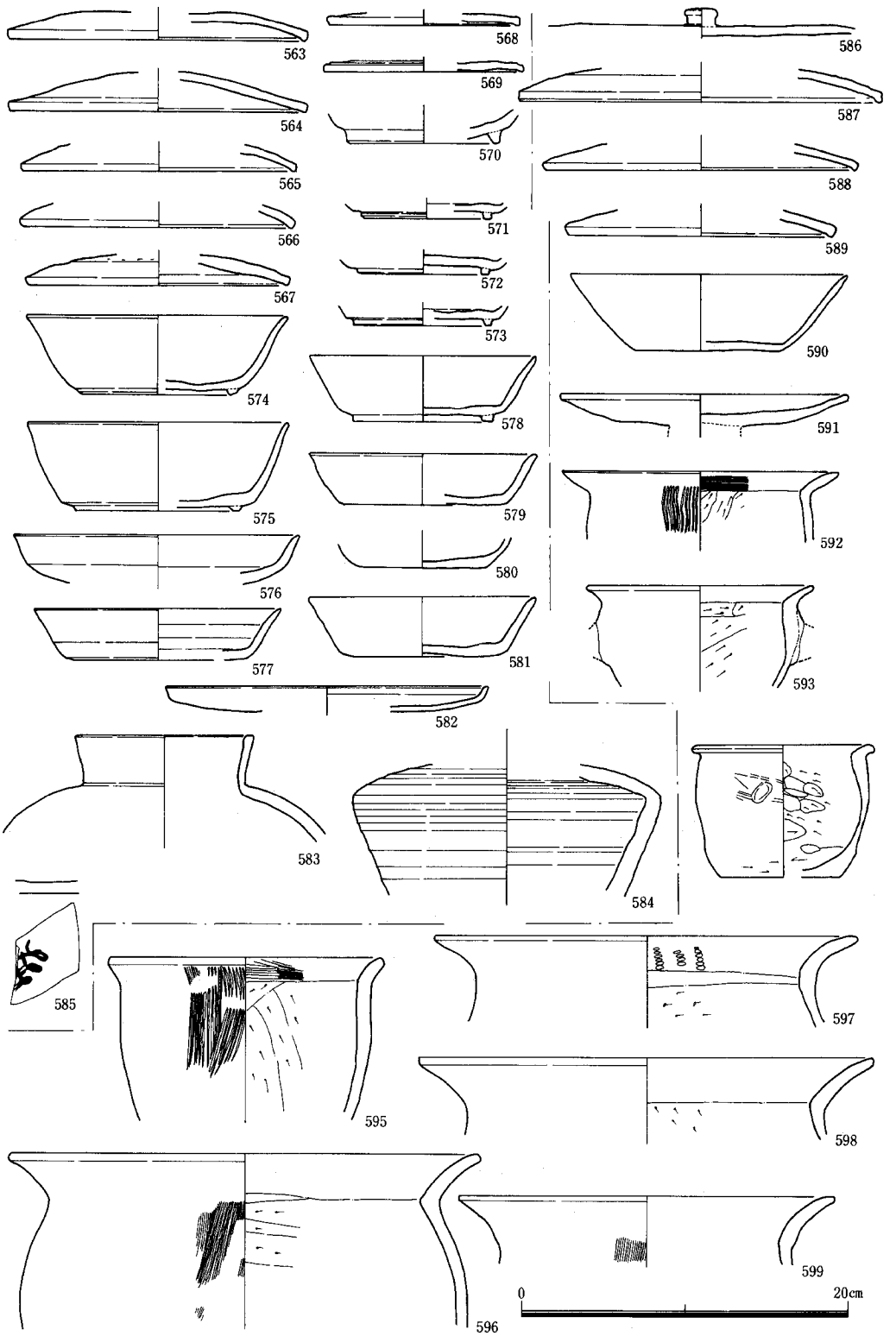


Fig. 58　第90号土壙出土土器実測図

墨書土器（585）　須恵器外底部に墨書している。記号か。

蓋（563～569）　口縁端部の突起はほとんどなく、天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整、体部は横ナデ調整が施されている。563・564の口径は18.2cm、18.1cmである。

坏（570～581）　570～575・578は有高台坏で、他は無高台坏である。外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部は横ナデ調整が施されている。無高台坏の外底部と体部の境は比較的明瞭である。574は口径16cm・器高4.9cmで底径9.8cm、575は口径16cm・器高5.5cmで底径10.1cm、578は口径13.9cm・器高4.1cmで底径8.6cmである。579は口径13.9cm・器高3.2cmで底径10.2cm、581は口径14cm・器高3.7cmで底径10.2cmである。

高坏(582)　坏部の浅い高坏で、口縁端部はコの字状を呈している。口径19.9cmで坏部高1.5cmである。蓋か。

壺（583・584）　583は短頸壺？の口縁部で、584は長頸壺の胴部である。

土師器（586～599）

蓋（586～589）　586の天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整を施している。587～589の口縁端部は丸みをもっている。

坏（590）　外底部と体部の境は明瞭で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。口径18cm・器高4.8cmで底径10cmである。

高坏（591）　体部内外面は横ナデ調整後ヘラミガキを施している。口径17.7cm。蓋のつまみ剝落か。

甕（592～599）　593・594は小形で、593は把手付である。594は平底で、口縁部はナデ調整、体部外面はハケ目調整後ヘラナデ調整、外底部から外面直上と体部内面はヘラ削りが施されている。口径11.3cm・器高8.2cmで底径3.6cmである。593は口径14cmで器高6.3cm＋αである。593・594は儀器か。592・595の口縁部内面には横方向のハケ目調整が施されているが、他の口縁部はナデ調整が施されている。体部外面は縦方向のハケ目調整、体部内面はヘラ削りが施されている。

以上のほか、移動式竈、丸瓦・平瓦などの遺物が出土している。出土土器から本土壙は８世紀前半期から後半期のものといえよう。

⒂　第92号土壙（ＳＫ－92）

15区検出で、ＳＫ－160の西側に位置している。2.2×1.5ｍの不整形の土壙で、遺物は北側からの流れ込みの状態で出土した。

出土土器（Fig. 59、600～607）　**土師器**

坏(600～604)　602は高い高台をもつ坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整を施している。600・603・604は無高台坏である。603は体部と外底部の境が明瞭で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部は横ナデ調整を施している。604は丸い底部をもち、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部外

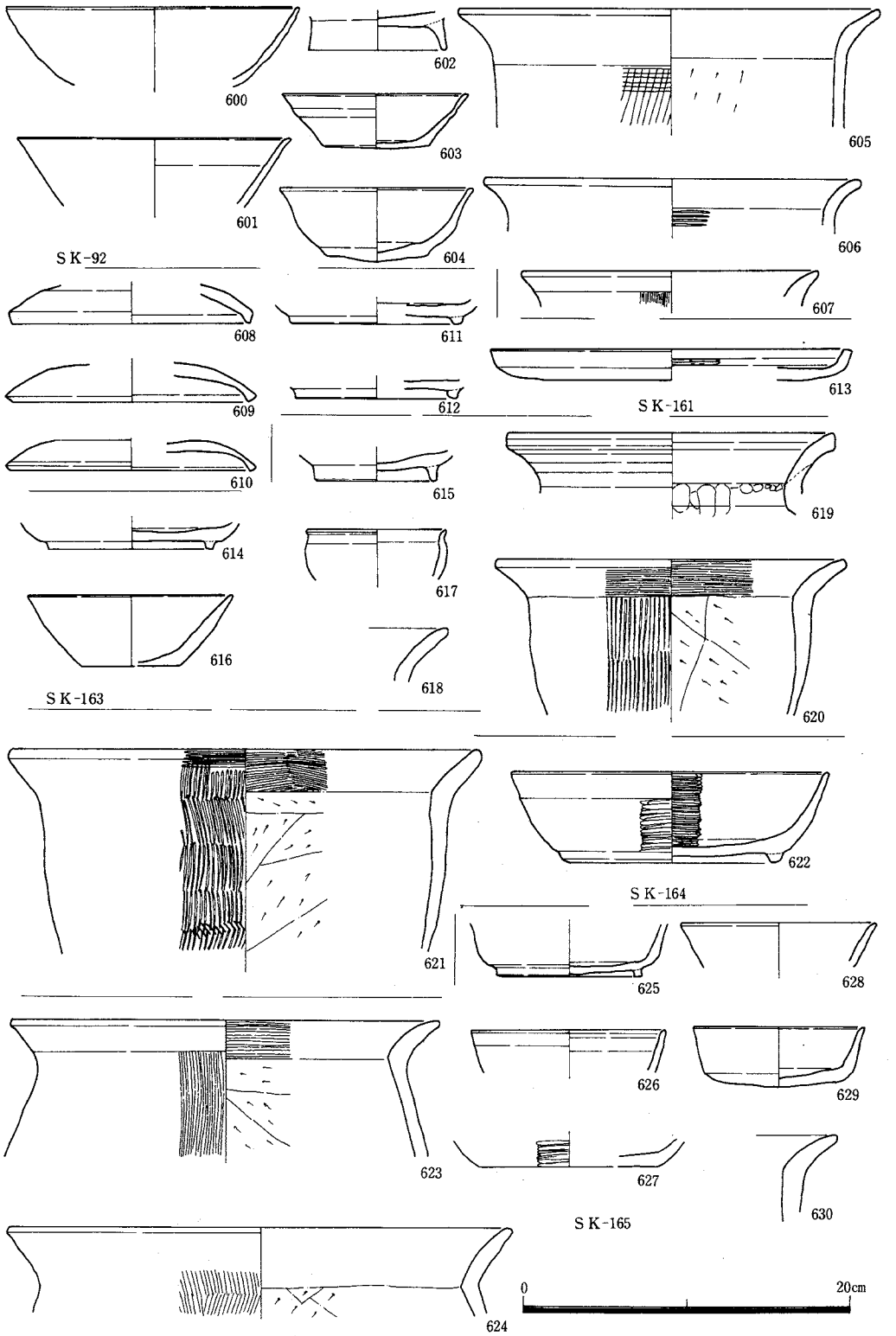


Fig. 59　各土壙出土土器実測図(1)

面は横ナデ調整・内面は横ナデ調整後ヘラミガキを施している。603は口径11.4cm・器高3.3cmで底径3.6cm、604は口径11.8cmで器高4.5cmである。

甕（605～607）　口縁部はナデ調整、体部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りが施されている。

出土土器から本土壙は、８世紀後半期から９世紀前半期のものといえよう。

⑯　第161号土壙（ＳＫ－161）

20区検出で、ＳＢ－271・ＳＤ－216に切られている。また本土壙の北側はＮ－14.5°－Ｅを主軸とするＳＫ－162（土壙墓か）に切られている。本土壙は、2.6×1.3mの隅丸長方形を呈する土壙で、遺存状態は20cm前後である。

出土土器（Fig. 59、608～613）

須恵器（608）

蓋で、口縁端部は断面三角形を呈し、体部内外面は横ナデ調整が施されている。

土師器（609～613）

蓋（609・610）　口縁端部の突起がなく、体部内外面は横ナデ調整が施されているが摩耗している。610は口径14.7cmである。

坏（611・612）　有高台坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。

高坏（613）　口縁端部はコの字状をなす浅い坏部で、口縁部は横ナデ調整・体部外面はナデ調整、体部内面は横ナデ調整後ヘラミガキが施されている。

出土土器から本土壙は８世紀後半期のものといえよう。

⑰　第163号土壙（ＳＫ－163）

20区検出で、ＳＫ－164・ＳＤ－231を切っている。1.7×1.4mの楕円形を呈する土壙で、遺存状態は70cmである。

出土土器（Fig. 59、614～620）

須恵器（614・616・619）

坏（614・616）　614は有高台坏で、616は無高台坏である。616は体部と外底部の境が明瞭で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整を施している。口径12.5cm・器高4.4cm

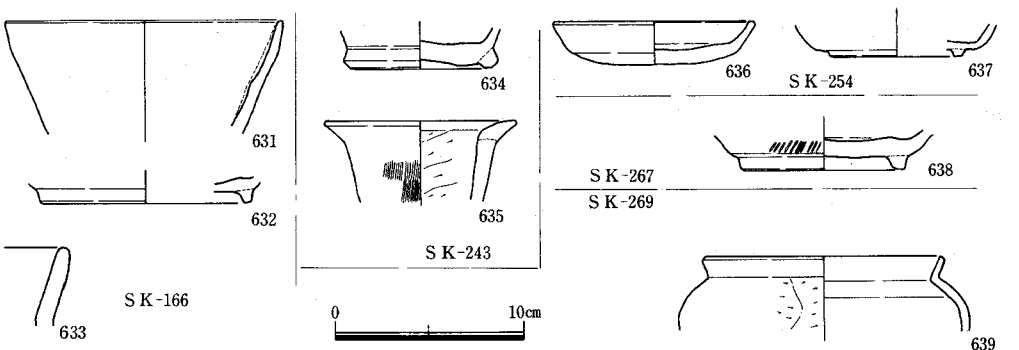


Fig. 60　各土壙出土土器実測図(2)

で底径６cmである。

甕（619）　口縁部片で、横ナデ調整が施されている。

土師器（615・617・618・620）

坏（615）　高い高台をもつ坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。

鉢（617）　口径5.6cmの小形で、口縁部は丁寧なナデ調整、体部外面はナデ調整、体部内面は横ナデ調整が施されている。

甕（618・620）　620の口唇部はナデ調整、口縁部内外面は横方向・体部外面は縦方向のハケ目調整、内面屈曲部下はヘラ削りが施されている。

出土土器から本土壙は９世紀前半期のものといえよう。

⒅　第164号土壙（ＳＫ－164）

20区検出で、ＳＫ－163・ＳＤ－231・233に切られている。径1.7ｍ前後の不整円形を呈する土壙で、床面は二段掘りになっている。遺存状態は50cm前後である。遺物は床面直上から出土した。

出土土器（Fig. 59、621・622）　**土師器**

坏（622）　有高台坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整後ヘラミガキが施されている。口径19.4cm・器高5.6cmで底径13.4cmである。

甕（621）　口縁部は横方向・体部外面は縦方向のハケ目調整、内面はヘラ削りが施されている。

出土土器から本土壙は８世紀後半期のものといえよう。

⒆　第165号土壙（ＳＫ－165）

21区検出で、ＳＤ－231に切られている。5.1×2.5ｍの不整形を呈する土壙である。遺存状態は20cm前後で、遺物は検出面から床面まで出土した。

出土土器（Fig. 59、623～630）

須恵器（625・628）

坏で、625の外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。

土師器（623～630）

坏（626・627・629）　無高台坏で、627の外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整後ヘラミガキが施されている。629の外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。口径10.5cmで器高5.7cmである。626も629と同じ型と考えられる。

甕（623・624・630）　体部外面は縦方向、623・630の口縁部内面は横方向のハケ目調整が施されている。内面屈曲部下はヘラ削りが施されている。

出土土器から本土壙は８世紀後半期のものといえよう。

⑳　第166号土壙（ＳＫ－166）（Fig. 60）

20・21区検出で、ＳＫ－165を切り、ＳＤ－231・233に切られている2.1×1.3mの隅丸方形の土壙で、遺存状態は30cm前後である。

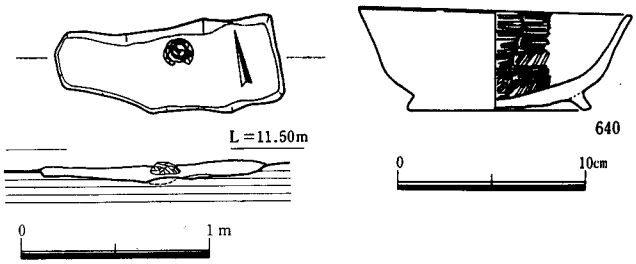


Fig. 61　第167号土壙墓及び出土土器実測図

出土遺物としては、坏(631・632)・甕（632）などがあるが、ＳＫ－165に伴う土器と考えられる。

㉑　第243号土壙（ＳＫ－243）（Fig. 60）

８区検出で、ＳＢ－111の北側に位置し、北側をＳＫ－18に切られている。90×60cmの隅丸長方形の土壙で、遺存状態は25cm前後である。茶褐色・褐灰色粘質土を覆土とし、少量の遺物が床面直上から出土した。土壙墓か。

出土遺物としては、坏底部（634）や甕があり、出土土器から８世紀前半期のものか。

㉒　第254号土壙（ＳＫ－254）

15・16区検出で、ＳＤ－256を切り、ＳＤ－８に切られている。3.5×2.1mの隅丸方形の土壙で、遺存状態は27cm前後である。

出土土器（Fig. 60、636・637）　**須恵器**

坏で、636は無高台坏・647は有高台坏である。外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。636は口径10.6cmで器高2.3cmである。

出土土器から本土壙は、８世紀後半期のものといえよう。

㉓　第167号土壙墓（ＳＫ－167）（Fig. 61）

15区検出で、ＳＢ－124とＳＤ－86の間に位置している。120×45cmの長方形を呈し、床面は平らで、遺存状態は８cm前後である。黒褐色粘質土を覆土とし、中央部北側に１点の坏が伏られた状態で出土した。

出土土器（640）　**黒色土器**

有高台坏で、外底部はヘラ切り、体部外面は横ナデ調整、体部内面は横ナデ調整後ヘラミガキが施されている。口径13.8cm・器高5.8cmで底径7.4cmである。

出土土器から本土壙墓は８世紀後半期のものといえよう。

６．溝状遺構と出土遺物

本調査区では175条の溝状遺構（以下溝とする）を検出したが、畑状遺構に関連するものが多く、ここでは畑状遺構に関連しない溝についてみていくことにする。

(1)　大溝（ＳＤ－１）北の溝群（Fig. 3・62）

ＳＤ－１に沿った形で、第266・231～234号溝の５溝を検出した。切り合い関係から、ＳＤ－232が最も新しく、ＳＤ－86・96・209も切っている。最も古い溝はＳＤ－234で、各溝に切られ、さらに大溝にも切られている。各溝はＵ字溝で、古い順にならべると、ＳＤ－234・231・233・232の順になり大溝に沿った道路の側溝と考えられる。

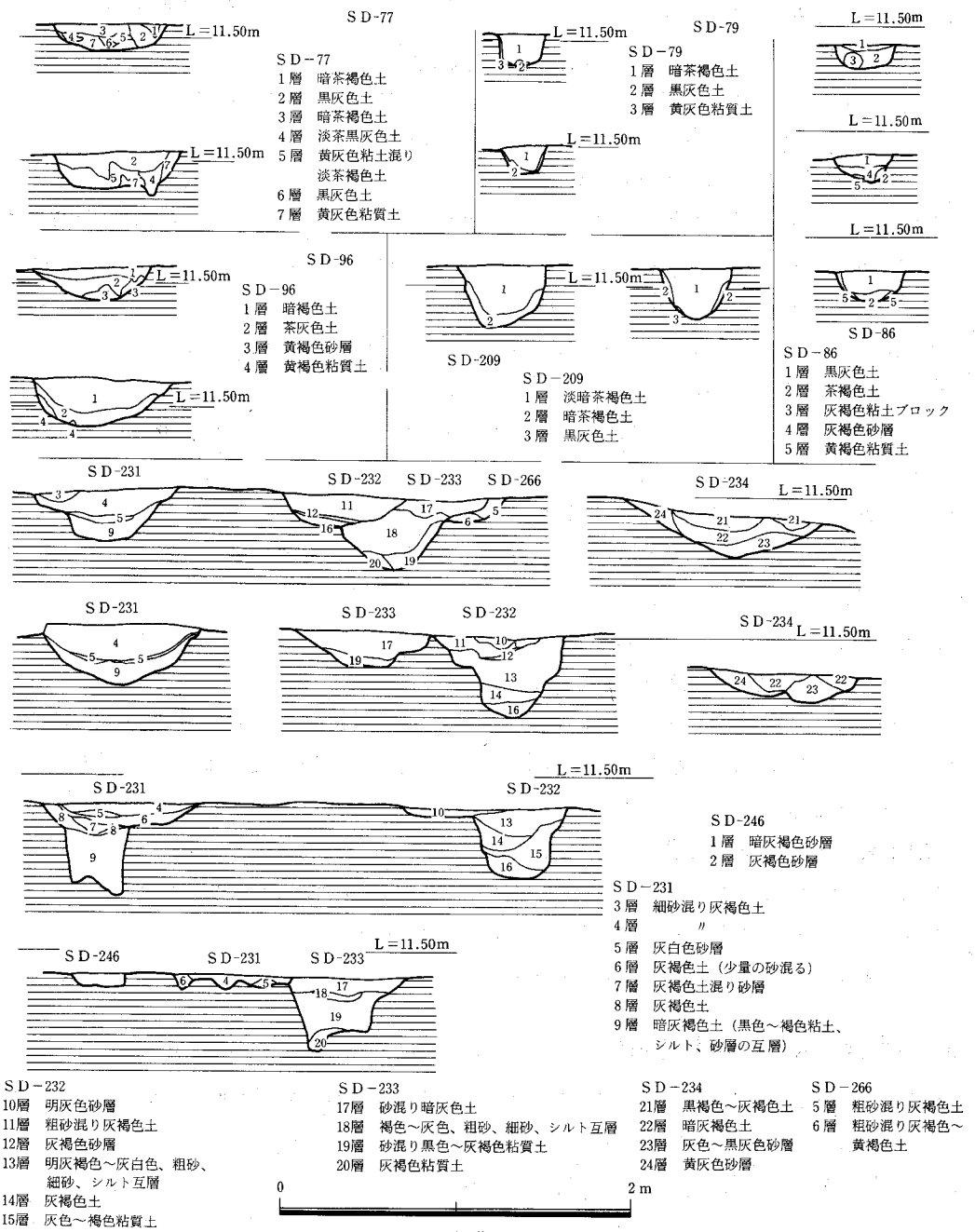


Fig. 62　各溝状遺構断面図

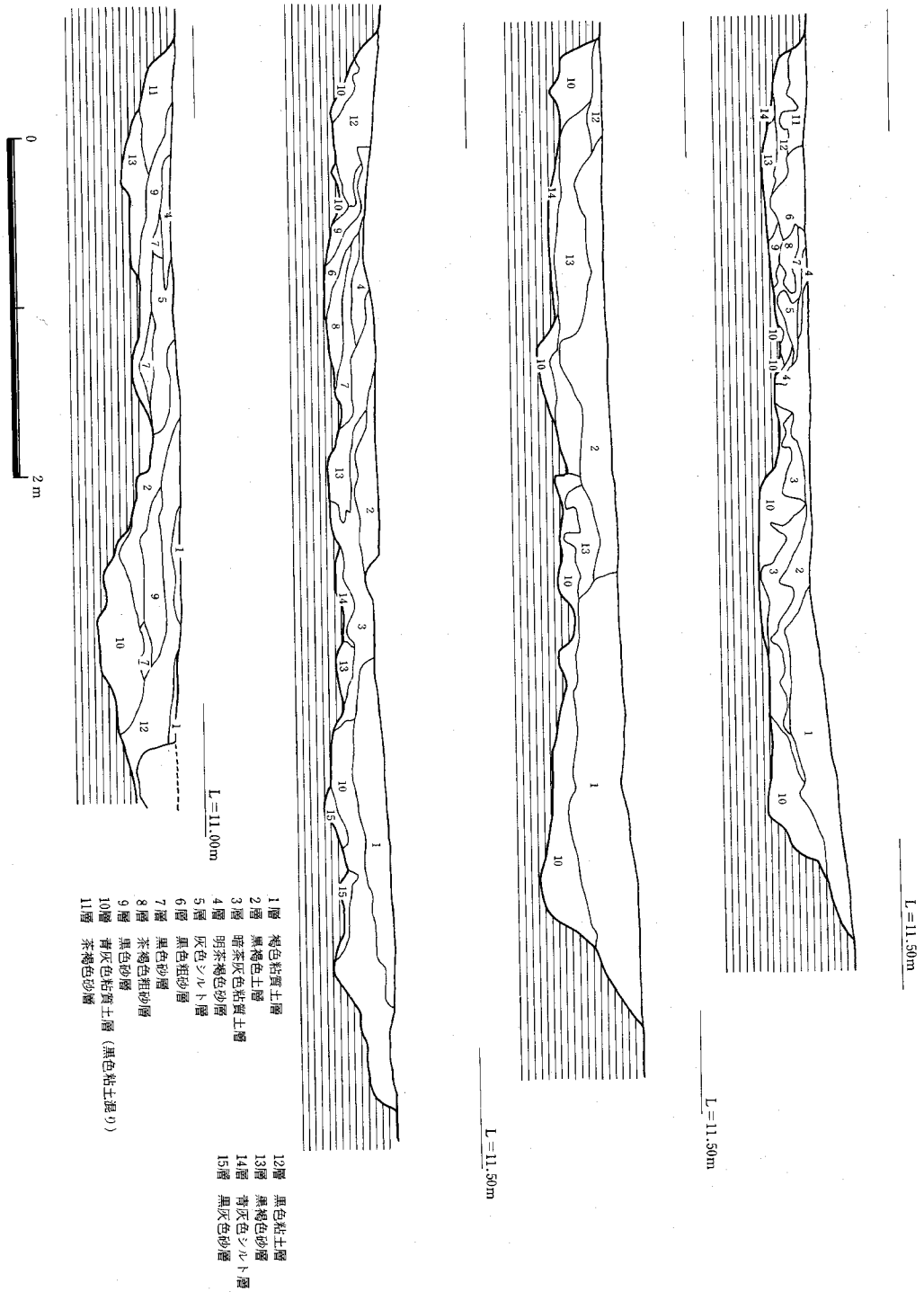


Fig. 63　第292～294号溝状遺構断面図

出土土器（Fig. 64）

須恵器（642・644・647）　　坏

642はＳＤ－232、他はＳＤ－234から出土したもので、いずれも有高台坏である。外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。644は口径16.2cm・器高4.9cmで底径9.5cmである。

土師器（643・645・646・648）　　坏

643はＳＤ－232、他はＳＤ－234から出土したもので、いずれも有高台坏と考えられる。外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。

各溝の底面出土の土器をみていくと、ＳＤ－234出土のものが８世紀前半期、ＳＤ－232出土のものが９世紀前半期まで下るものがあり、大溝（ＳＤ－１）の存続時期と同時期となる。

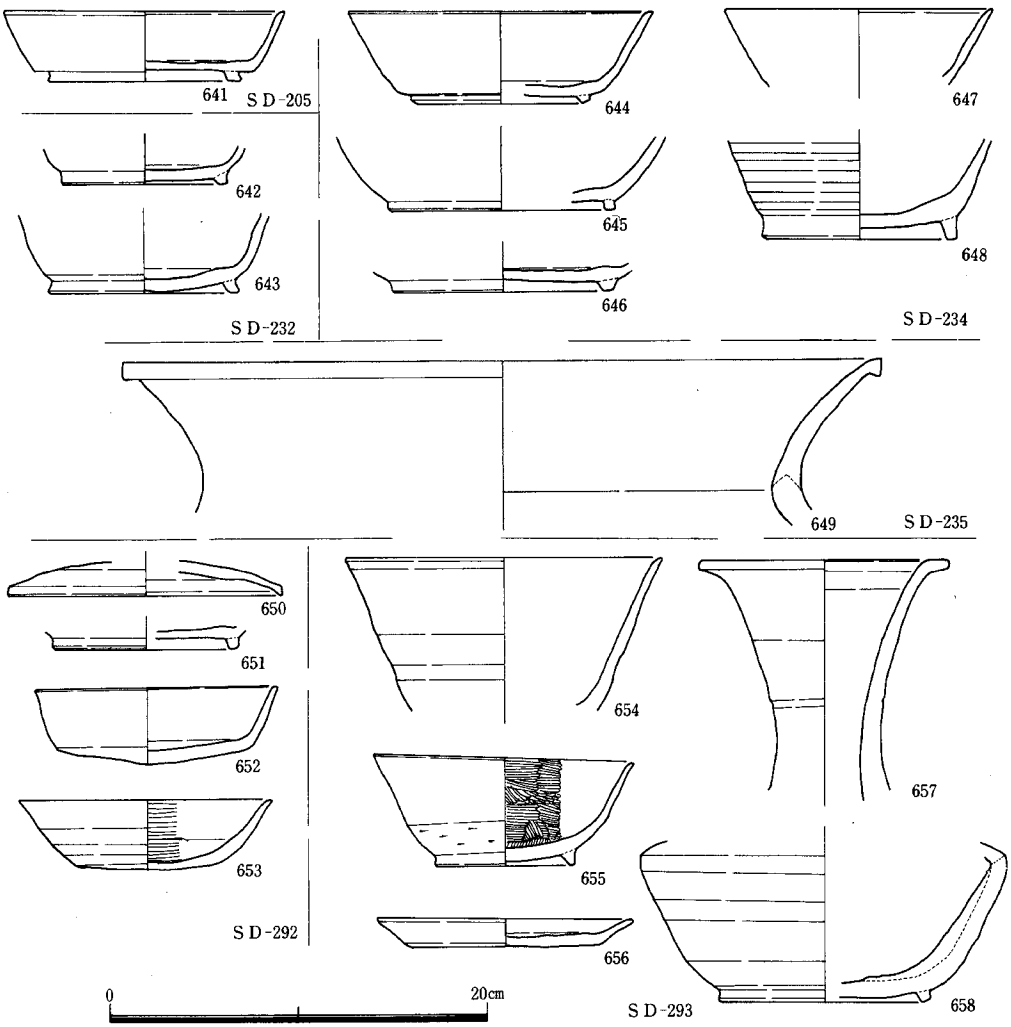


Fig. 64　各溝状遺構出土土器実測図

(2)　第292～294号溝（ＳＤ－292～294）(Fig. 3・63)

17・23区検出で、古代大溝（ＳＤ－１）を切り、中世大溝（ＳＤ－291）に切られている。３溝に分けたが、２ｍ前後の溝の流路が各時期毎に西に移動したものと考えられる。水利遺構か。

出土土器（Fig. 64）

須恵器（651・654・657・658）

坏（651・654）　651は有高台坏で外底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。654は深い坏部をもつ坏？で、体部内外面は横ナデ調整が施されている。

壺（657・658）　長頸壺で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部から口縁部にかけての内外面は横ナデ調整が施されている。

土師器（650・652・653・655・656）

蓋（650）　口縁端は丸みをもち、天井部は回転ヘラ削り、体部内外面は横ナデ調整が施されている。

坏（652・653・655）　655は有高台坏で、他は無高台坏である。655は黒色土器で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部外面下部はヘラ削り、上部は丁寧な横ナデ調整、内面は横ナデ調整後ヘラミガキが施され、黒く発色している。口径14.8cm・器高5.6cmで底径7.4cmである。652の外底部はヘラ切り未調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。口径12.9cm・器高４cmで底径10.3cmである。653の外底部はヘラ切り未調整、体部外面下部はヘラ削り、上部は横ナデ調整、内面は横ナデ調整後ヘラミガキが施されている。口径13.3cm・器高3.7cmで底径6.6cmである。

皿(656)　外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。口径13.5cm・器高1.5cmで底径10cmである。

本溝群はＳＤ－１を切っているため、多くの８世紀の土器を含んでいるが、655の土器及び未実測であるが655と同時期の土器が溝底から出土しており、９世紀後半期から10世紀初頭期のものといえよう。

(3)　他の溝（Fig. 3・62）

第77号溝（ＳＤ－77）　３・９区検出で、ＳＢ－103～106、ＳＤ－79に切られている幅60cm前後のＵ字溝である。切り合い関係からＳＤ－96に対応する集落区画の溝か。

第79号溝（ＳＤ－79）　９・15区検出で、ＳＤ－77・ＳＢ－106を切っている幅25cm前後のＵ字溝で、集落区画の溝と考えられる。

第86号溝（ＳＤ－86）　４・10・15・16・21区検出で、ＳＤ－209を切り、ＳＢ－241、ＳＤ－231～233に切られている。幅35cm前後のＵ字溝で、ＳＤ－１から導水したと考えられる。集落区画か。

第96号溝（ＳＤ－96）　14・20・26区検出で、ＳＢ－123を切り、ＳＢ－120、ＳＫ－237、Ｓ

Ｄ－171・231～233・266に切られている。幅80cm前後のＵ字溝で、ＳＤ－234から分水した集落区画溝か。

第297号溝（ＳＤ－297）　10・16・22区検出で、ＳＤ－１に切られている。幅50cm前後のＵ字溝で、遺物としては土師器の細片のみが出土したが時期は限定できない。

第209号溝（ＳＤ－209）　19～21区検出で、ＳＤ－96・216・231を切り、ＳＤ－221・271・275・232・233に切られている。幅50cm前後のＵ字溝で、ＳＤ－１に流れ込んでいる。集落区画溝か。

７．畑状遺構と出土遺物

本調査区は、試掘調査によって生産址として水田址の存在が予想された。しかし第３章で述べたように、水田址の可能性は高いものの水田址であるという確証は得られなかった。

本調査区の東側では、底が皿状またはＵ字状になる浅い平行する溝群が検出された。しかも、これらの浅い溝群は柵列や比較的深いＵ字溝で囲まれている。柵列や溝によって区画された浅い溝群は、畑の畝間の溝と考えられることから、これを畑状遺構（以下畑とする）とした。

(1)　第300号畑（ＳＸ－300）(Fig. 3)

７・８区検出で、ＳＢ－111・112の東側に位置し、ＳＣ－14・ＳＫ－26を切り、ＳＫ－12・ＳＤ－28に切られている。幅30cm前後の溝の中に、1.2m前後の間隔で径20cm前後の丸杭を並べた第24・41号柵列（ＳＡ－24・41）に南北を区画された第25・29～40号溝の13条の平行する東西溝群からなっている。広さは200㎡＋αである。

(2)　第301号畑（ＳＸ－301）(Fig. 3)

７・８・13・14区検出で、ＳＸ－300の南にＳＡ－41を介在して位置している。ＳＢ－113やＳＣ－13・15を切り、ＳＢ－112・224やＳＫ－16・20に切られている。北側をＳＡ－41に、西側を幅35cm前後のＵ字溝である第51号溝（ＳＤ－51）に区画された第53～65・67・68号溝の15

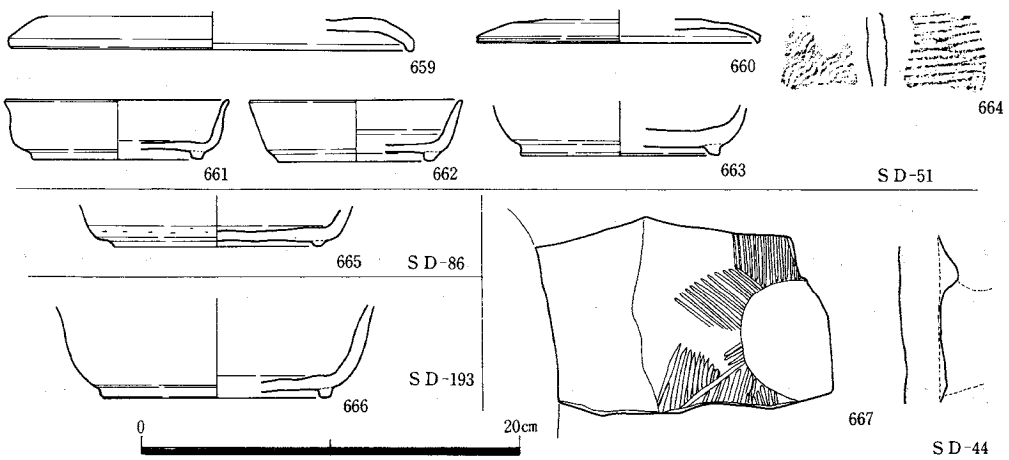


Fig. 65　畑状遺構出土土器実測図

条の平行する南北溝群からなっている。広さは270㎡＋αである。

出土土器（Fig. 65）

須恵器（660～663）

蓋（660）　天井部はヘラ削り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。

坏（661～663）　有高台坏で、外底部はヘラ切り後ナデ調整、体部内外面は横ナデ調整が施されている。661・662は口径11.8cm・11.3cm、器高3.2cm・3.3cm、底径９cm・8.2cmである。

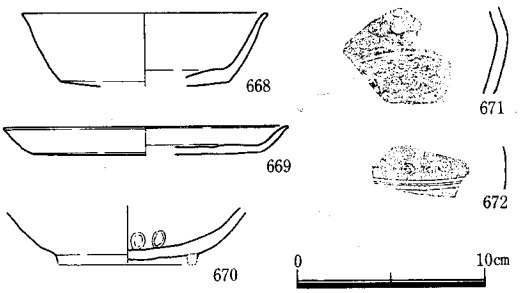


Fig. 66　表採及び中世遺構出土古代遺物実測図

土師器（659・664）　659は蓋で、664は玄海灘式製塩土器である。

(3)　第302号畑（ＳＸ－302）（Fig. 3）

14区検出で、ＳＢ－118の東側に位置し、ＳＫ－155に切られている。北側を第133号柵列（ＳＡ－133）に、西側をＳＤ－96に区画された第97～99・130・131号溝の５条の平行する南北溝とこれに直交する第134～136号溝の３条の平行する東西溝群からなっている。広さは220㎡前後である。

(4)　第303号畑（ＳＸ－303）（Fig. 3）

20区検出で、ＳＢ－270・271を切り、ＳＸ－305に切られている。西側をＳＤ－96に、南側をＳＤ－209に区画された第194・215・216・218・220号溝の６条の平行する南北溝群からなっている。広さは150㎡前後である。

(5)　第304号畑（ＳＸ－304）（Fig. 3）

20・21区検出で、ＳＤ－96・209を切り、ＳＢ－125・ＳＥ－88・ＳＸ－305に切られている。東側を第171号溝（ＳＤ－171）に区画された第172・175・190・191・221・222号溝の６条の平行する南北溝群からなっている。広さは190㎡前後である。

(6)　第305号畑（ＳＸ－305）（Fig. 3）

14・15・20・21区検出で、切り合い関係のある古代と考えられる遺構はすべて切っている。20条の平行する東西溝群からなっているが、溝の遺存状態は５cm前後と悪く、断続的に残っている。広さは500㎡前後である。

８．その他の遺物（Fig. 66）

新羅土器（671・672）　壺の胴部片で、外面は横ナデ調整後、コンパスを使用した円紋が施されている。前者は円紋間に、後者は円紋下に２条の沈線が巡っている。

土師器（668～670）670は有高台坏、668は無高台坏、669は皿である。668は口径13cm・器高3.8cmで底径９cm、669は口径15.2cm・器高1.5cmで底径12.1cmである。

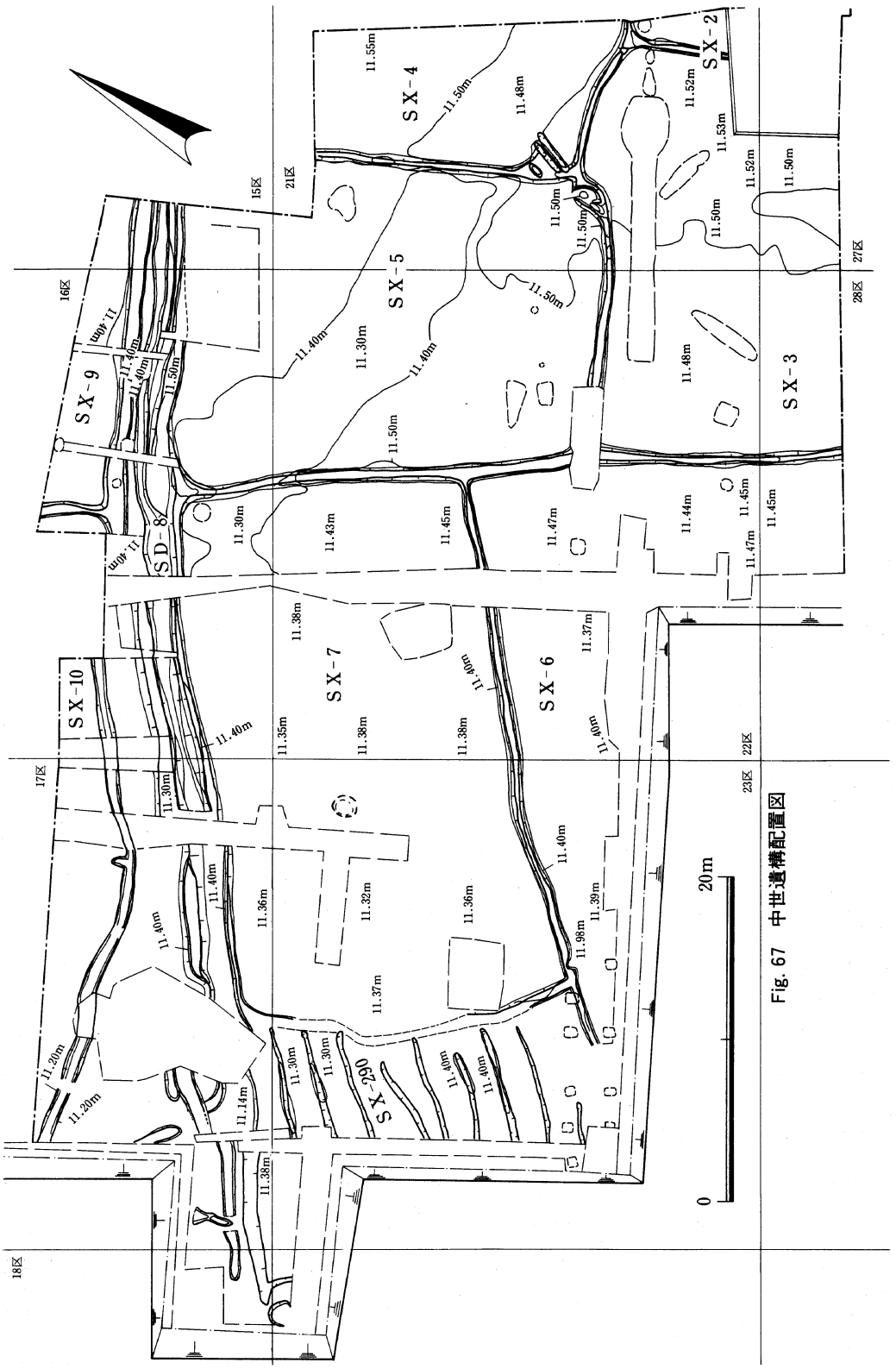


Fig. 67　中世遺構配置図

第５章　調査の記録－中世

１．水田及び水路（Fig. 67）

中世面は、第３章で述べたように、標高11.55ｍ前後の本調査区西側の10～12区・15～18区・21～24区・27～29区で確認した。しかし他区では同一標高で古代面が検出された。中世面の調査は、16・17・21～13区を中心に行なった。

調査の結果、大溝１条（ＳＤ－291)、水路１条（ＳＤ－１）と畦畔によって区画された９枚の水田一面を検出した。

大溝（ＳＤ－291)

11・12・17・18区検出で、ＳＤ－292～294・ＳＤ－１を切っている。西岸は確認できなかったが、幅15ｍ前後で北流する大溝で２ｍの深さをもっている。

出土遺物は、少量で古代の遺物が大半をしめているが、ＳＤ－１を切っているためと考えられる。最も新しい遺物としては北宗銭「元豊通宝」があるのみであるが、ＳＤ－８との関係から12世紀から13世紀の大溝と考えられる。

水路（ＳＤ－８）

14～18区検出で、現在の井相田地区の土地区画に沿っている。幅2.5ｍ前後で溝中央部に幅50cm前後、深さ20～30cmの二段掘り込みがあり、遺存状態としては45cm前後である。この溝は堰などの付設遺構はなかったが、西流する水田用水路でＳＤ－291へ流れ込むものである。

畦畔

黒褐色粘質土の上に、砂混り黒褐色粘質土・青灰色シルト・黒褐色砂を幅40～80cmで15cm＋α盛り上げている。畦畔もＳＤ－８に平行または直交した状態で造られている。なおＳＸ－５とＳＤ－８との間の畦畔の水田側に約60cmの間隔で径３cm前後の丸杭を用いた杭列があり、部分的に土止め用の柵が付設されている。

水田面

黒褐色粘質土を床土として、その上に10cm前後の砂混り黒褐色粘質土がある。さらに上には粗砂・細砂が畦畔もおおう状態で堆積している。砂混り黒褐色粘質土上面には粗砂・細砂が入った足跡などが多数みられ、砂混り黒褐色土の上部に、少量の酸化鉄の沈澱がみられた。以上から砂混り黒褐色粘質土が水田耕土と考えられる。

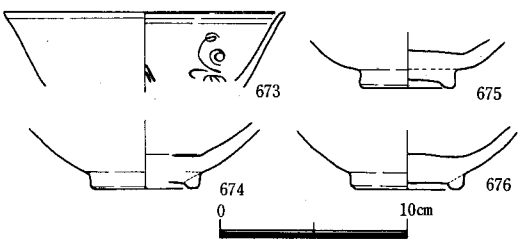


Fig. 68　中世出土土器実測図

水田区画

現代の水田の区割りに近い９区画の水田を検出した。一区画の広さが分るのは、ＳＸ－５とＳＸ－７で、前者が約440㎡、後者が600㎡である。ＳＸ－290では、水田耕土に５㎝前後の砂が堆積した後、平行する浅い溝群が検出された。これらの浅い溝群は、畝の残存状態と考えられ，畑として使用したものか。市内では那珂君休遺跡で類例がみられる。

水口

ＳＸ－３とＳＸ－４の間、ＳＸ－３とＳＸ－４の間の各１ヵ所畦畔が切られており水田から水田へ水を移す水口と考えられる。水口の形状及び水口両側の観察からＳＸ－３を介在してＳＸ－４からＳＸ－５へ水を流したと考えられる。またＳＸ－５とＳＸ－７の間も北側で一部畦畔が凹んでいる所があり水口と考えられる。

出土遺物（Fig. 68）　　**青磁**

いずれも龍泉窯系青磁で、内外面とも淡緑色釉を施している。他に白磁片・土師器皿片などが出土している。

２．まとめ

本調査区の南西部から西部にかけて、水田址が分布し、大溝１条・水路１条と９区画の水田を検出した。水路（ＳＤ－８）は14区でも残存状態で検出されたこと、第２次調査における中世水田の検出状況をみると、中世においては、本地域は水田として土地利用されていたと想定できる。

中世の水田は、本調査区の遺存状態及び第２次調査の成果から、本調査区東側が水田面が高く、西側・北側へ段をもって下がる水田が形成されていたと考えられる。

ＳＤ－８への分水は、調査対象地南東部で行なわれ、ＳＸ－９・10など北側の水田へ配水したと考えられる。ＳＤ－８は大溝（ＳＤ－291）へ合流している。

水田区画は、440㎡・600㎡と現在の水田の広さに近い規模をもち、区画の区割りは現代の水田区割とほぼ同じである。

水田の時期としては、出土磁器から12世紀後半から13世紀と考えられる。本地域の水田化及び現在の水田の区割りが本地域では、いつ行なわれたかを考える上で貴重な材料を提供したといえよう。

第６章　調査の記録－古代以前の出土遺物

本遺跡では、古代の各遺構から、先土器時代から古墳時代の遺物が少量出土した。(Fig. 69)

先土器時代と縄文時代の遺物としては、古銅輝石安山岩製の三稜尖頭器（677)、黒曜石製の台形石器（678)、黒曜石製の磨製石鏃（679）・打製石鏃（680）がある。

弥生時代の遺物としては、凝灰岩ホルンフエルス製石包丁（681）と弥生時代後期の壺の口縁部（682）がある。

古墳時代の遺物としては、蓋（683)、坏（684・685）と壺（686～688）がある。683の天井部、685・686の外底部にヘラ記号が付されている。

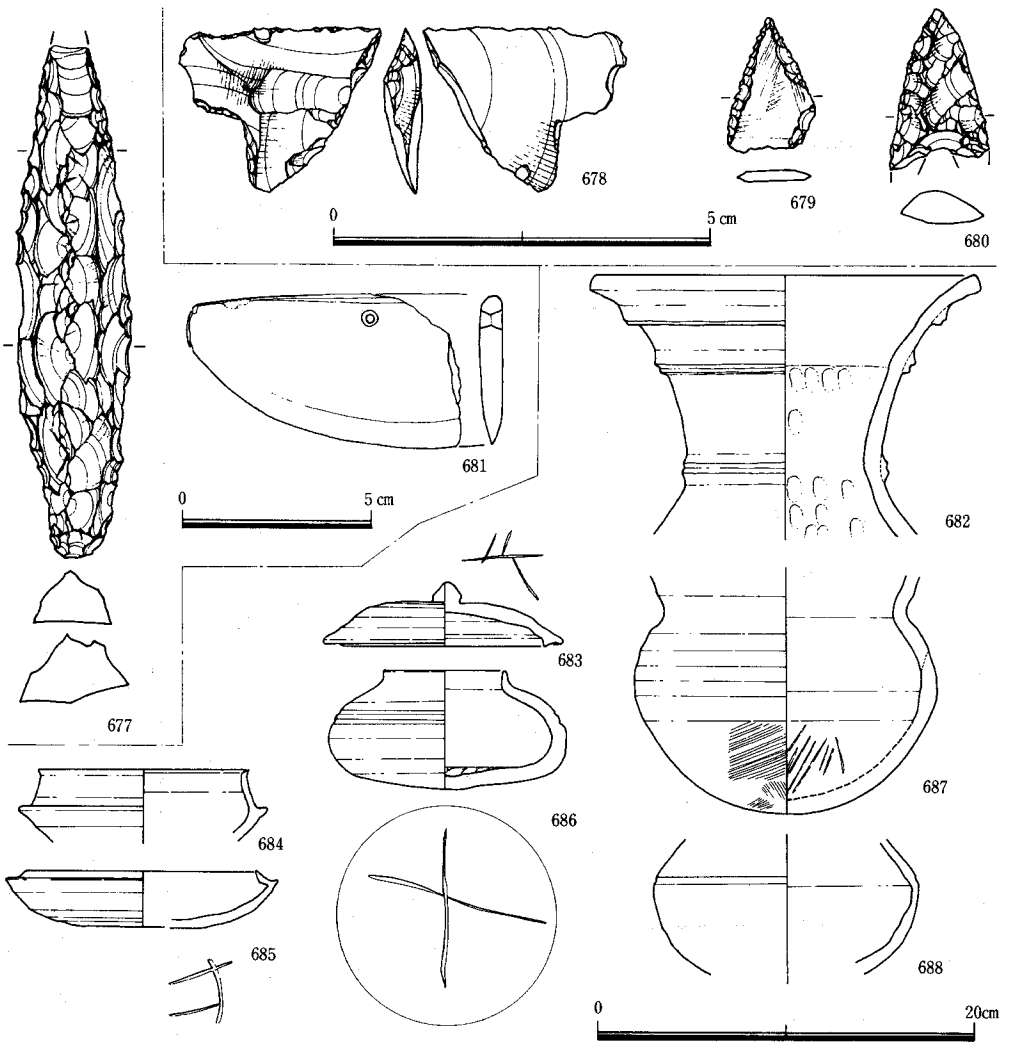
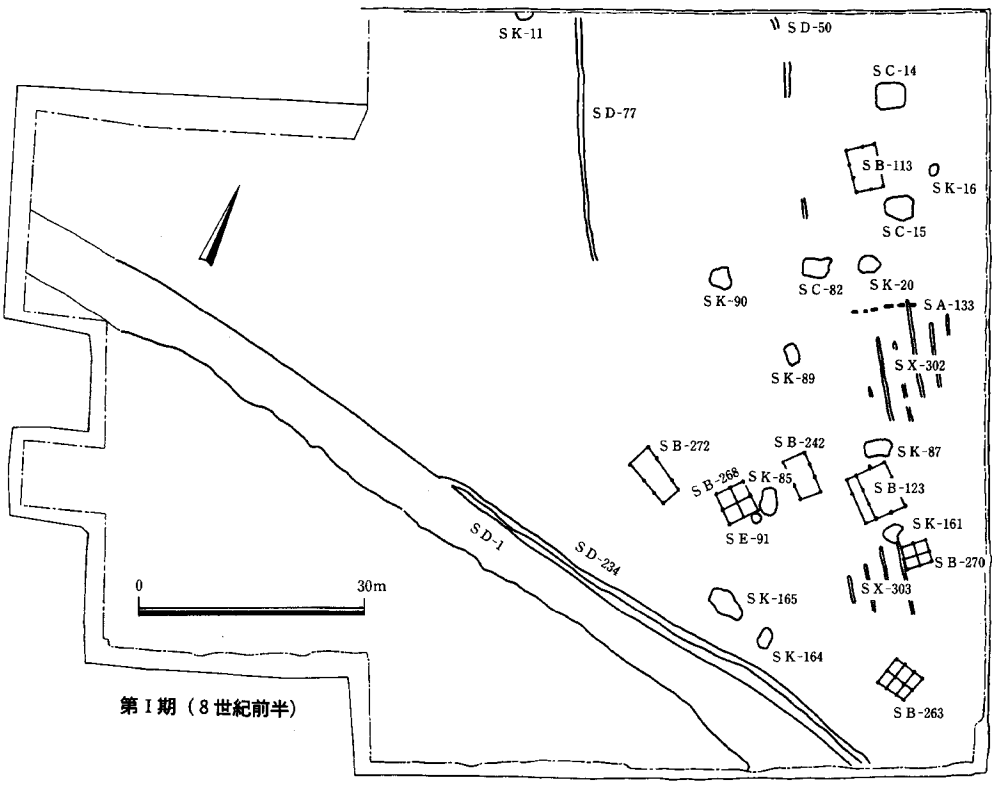


Fig. 69　その他各時期出土遺物実測図



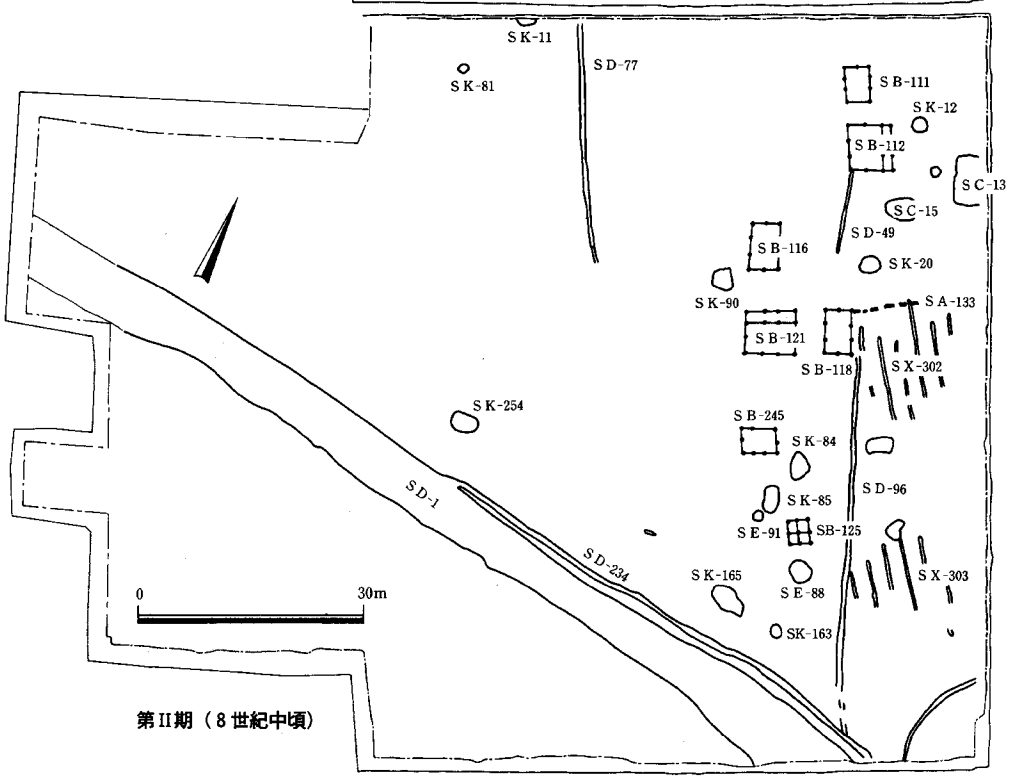


Fig. 70　古代第Ⅰ期・Ⅱ期の遺構

第7章　結　　章

1．古代の集落について

本調査では、第4章で述べたように、42棟の建物・4基の竪穴住居址・3基＋αの井戸・1基＋αの土壙墓・46基の土壙(井戸・土壙墓の可能性あるものを含む)・1条の大溝・集落を区画すると考えられる溝や柵列・浅い溝群からなる畑6枚・建物の柱穴多数の古代の遺構を検出した。また、大溝の南側では大溝に沿った畦畔状の高まりがあり、黄褐色・青灰色粘質土の上に暗褐色から黒褐色粘質土が堆積しており、少量の酸化鉄の沈澱もみられたが、砂に覆われてなく、南北方向の畦畔が確認できなかったので水田と断定できないものの可能性は高いといえよう。

遺構の分布状態についてみていくことにする。まず西流する大溝があり、大半の遺構は大溝の北側に位置し、東側半分に集中している。建物・土壙等の遺構は、2・8・14・20区の西側及び9・15区に集中している。畑は建物・土壙等の東側に位置している。

遺構の中で、建物についてみていくことにする。建物の規模は、2×5間が最も大きく1棟あり、2×4間が1棟、2×2間が1棟、2×3間の総柱1棟、2×2間の総柱及び総柱と推定できるもの9棟と2×3間の建物があり、2×3間の建物が多い。柱間の長さは、同一建物の同じ桁行でも35cm前後の差をもつものがあり一定していない。150～180cmの柱間の長さをもつものが多いといえる。廂をもつものは、2×5間の桁行二面にもつもの1棟、2×3間の桁行片面にもつもの4棟、梁行に片面廂をもつと考えられるもの2棟がある。

分布状態でみると、ＳＢ－100～106・109・110・128の10棟が9・10区に集中しており、これをＡ群とする。2・8区には、ＳＢ－107・108・111～113・126・127・244の8棟が集中しており、これをＢ群とする。8・9・14区の境にはＳＢ－114～116の3棟があり、これをＣ群とする。14区にはＳＢ－117～121の5棟があり、これをＤ群とする。15区にはＳＢ－129・241の2棟があり、これをＥ群とする。14・15・20・21区の境にはＳＢ－122・124・125・242・245・261・268・269・272の9棟があり、これをＦ群とする。14・20区にはＳＢ－123・270・271・273・263の5棟があり、これをＧ群とする。以上7群の集中がみられる。

建物の主軸方位についてみると、ＳＢ－117・121・122・261の4棟を除く建物が北から西にふれている南北棟である。4棟の東西棟も90°ふると、Ｎ－50°－Ｗ前後と大きく西に角度をふるＳＢ－113・123など7棟、Ｎ－29°－Ｗ前後のＳＢ－124など10棟、Ｎ－25°－Ｗ前後のＳＢ－129など7棟、Ｎ－10°～21°－Ｗの主軸方位をもつ18棟の4群に分けられる。

建物の中には建替えが行なわれているものがあり、建物と建物の切り合い関係がみられるものもある。Ｂ群のＳＢ－112・113・244はＳＢ－112・244が建替えがあり、切り合い関係でみる

とＳＢ－113が古く、ＳＢ－244が最も新しいといえる。

建物の時期は、建物柱穴のみの遺物で決定できず、切り合い関係に頼らざるを得ない。ＳＢ－123はＳＫ－83を、ＳＢ－124はＳＫ－84を、ＳＫ－84はＳＢ－242を切っている。建物を建物の切り合い関係、出土土器から時期推定できる土壙と建物の切り合い関係及び建物によっては建替えによる主軸方位の変化をもつものがあり、新旧関係の主軸と同一方向をとる建物を同一時期として考えるとＶ期に区分できる。(Fig. 70～72)

建物群で構成される集落の時期は、大溝掘削（自然流路改修か）時期が出土土器から７世紀末から８世紀前半期で、埋没し機能をなくすのが９世紀前半期と考えられ、大溝の時期と一致するものと考えられる。単発的な資料であるが、ＳＫ－167・ＳＤ－292～294から、9世紀末から10世紀初頭の土器が小量出土しているが、他の土壙等では出土していないので、本集落は９世紀前半までの集落で、それ以降については周辺の調査を待ちたい。９世紀後半から10世紀初頭をⅥ期としておく。Ⅰ期は８世紀前半・Ⅱ期は８世紀中頃・Ⅲ期は８世紀中頃から後半・Ⅳ期は８世紀後半・Ⅴ期は９世紀前半に比定しておく。

Ⅰ期の集落は、Ｎ－37.6°～80.4°－Ｗの主軸方位をもち、切り合い関係で最も古い建物と竪穴住居址・土壙からなっている。Ｂ群の建物（ＳＢ－113）１棟と竪穴住居址３基からなるグルー

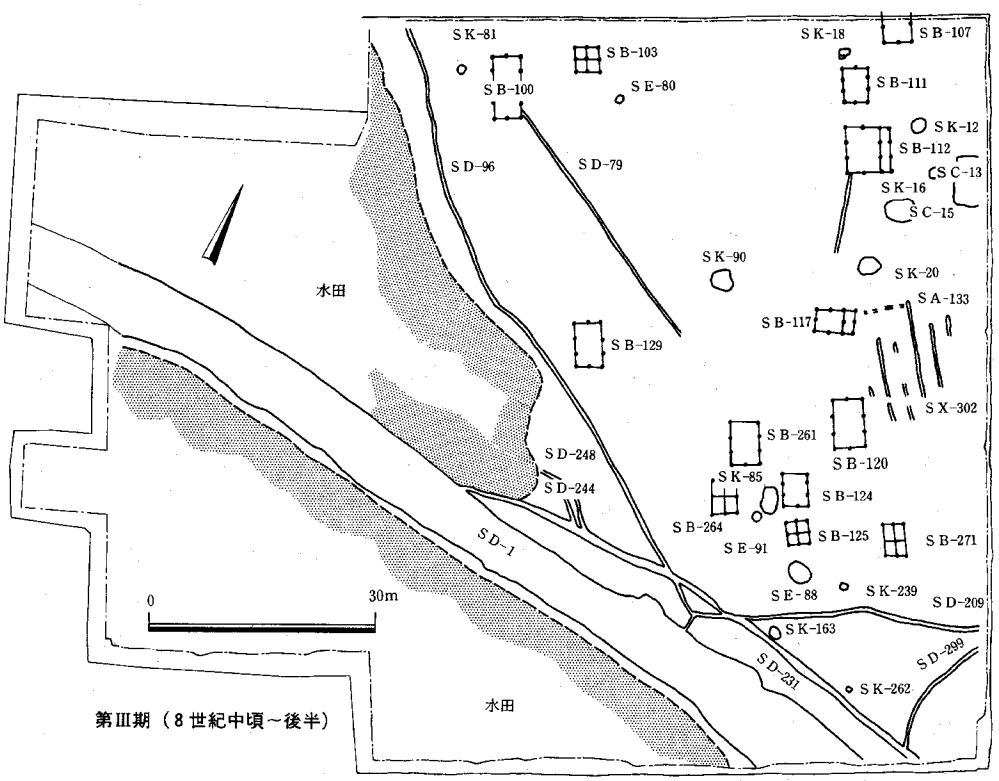


Fig. 71　古代第Ⅲ期の遺構

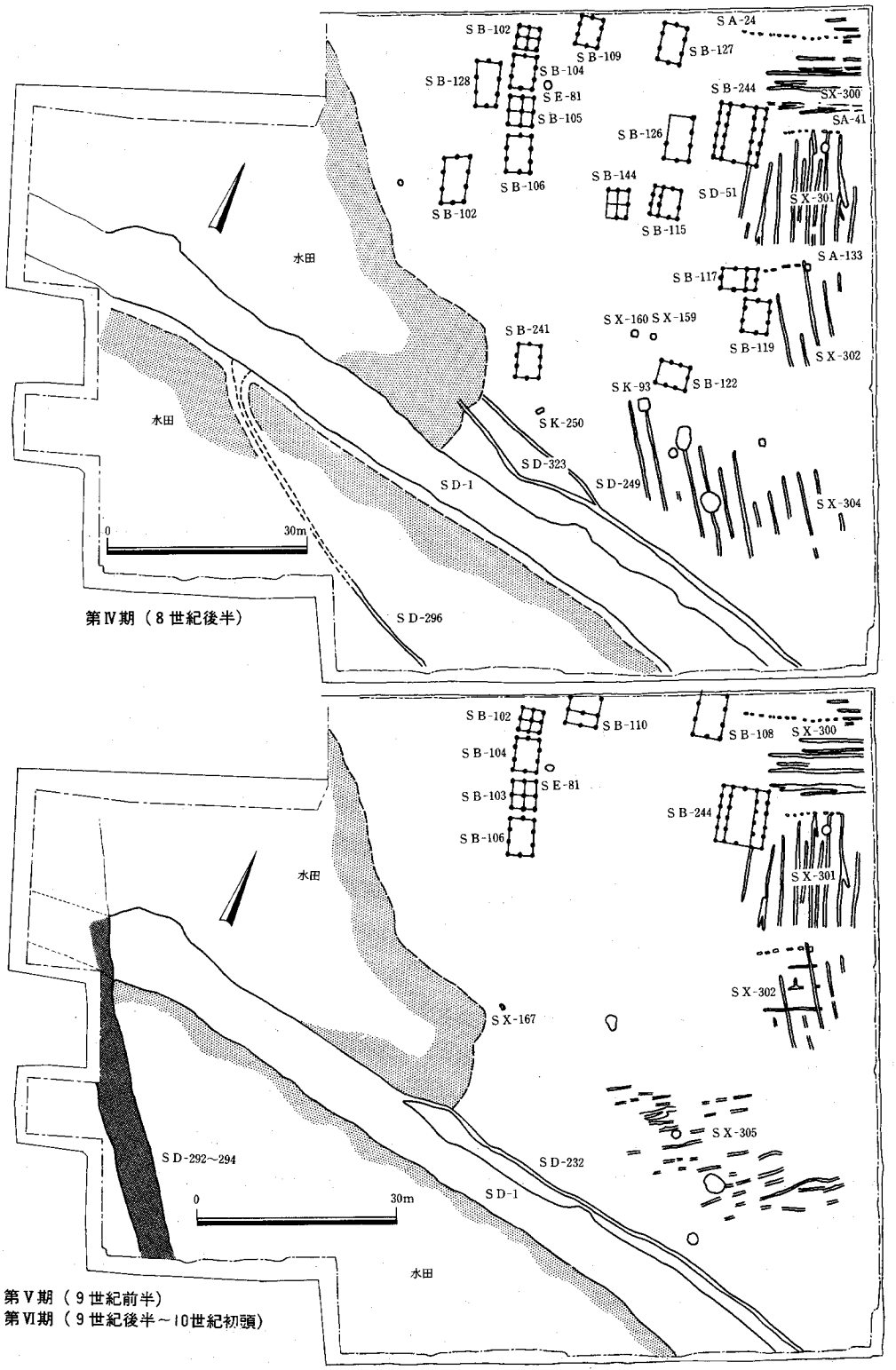


Fig. 72 古代第Ⅳ期Ⅴ期の遺構

プとF・G群の6棟の建物からなるグループに分けられる。F・G群の6棟は、SD－1との間に半円状の空間をもって分布しており、2×3間の桁行片面廂建物が主屋と考えられる。

Ⅱ期の集落は、N－23.4°～28.6°－Wの主軸方位をもつ建物で構成されている。B群の建物2棟と竪穴住居址1基からなるグループ、C・D群の建物3棟からなるグループ、E・F群の建物3棟からなるグループに分けられる。3グループともほぼ同規模の構成になっている。桁行片面廂の主屋1棟と2×3間の建物及び建物相当施設2棟である。B群のSB－111はSC－14が、C群のSB－116はSC－82の建物化されたもの、D群の2棟はⅠ期G群建物の建替えと考えられる。E・F群の2棟はⅠ期の1×3間の建物の建替えか。SX－302は、SB－118に切られていることから、Ⅰ期の終り頃から営まれたか。

Ⅲ期の集落は、N－25.4°～33.1°－Wの主軸方位をもっている。A群の2棟のグループ、B群の3棟と竪穴住居址1基のグループ、D～G群のグループに分けられる。Ⅱ期からⅣ期の過渡期の集落か。

Ⅳ期の集落は、N－10.4°～25.5°－Wの主軸方位をもっている。A～C群の12棟が大グループを形成し、D群が2棟、E・F群が各1棟づつで構成されている。SB－244を主屋とし、3棟の倉庫・7棟の2×3間の建物・桁行片面廂建物1棟からなっている。SB－102・104～106の配置及びこのグループは、広い中庭的空間をもっている。SD－1をはじめ最も遺物が多い時期であり、本集落が高揚した時期といえよう。SX－300～304は、SX－302を除いて、この時期から営まれたと考えられ、水田造営もⅢ期からⅣ期にかけて行なわれたと考えられる。

Ⅴ期の集落は、Ⅳ期の集落の建替えで、A・B群にのみ所在している。

2．おわりに

本調査の成果としては、古代集落の広域検出によって、古代集落のあり方を知る上で貴重な資料を提供したといえる。建物についてみていくと、建物群は、南から北へ移動しながら、集落が拡大していっている。

出土遺物としては、8世紀後半代のものが主体をしめており、本集落が同時期を中心とした時期のものであることが分った。また人面墨書土器・墨書土器の出土によって、本地域が、那珂郡仲嶋郷に属すると考えられるとともに郡境に位置している可能性が高くなったといえよう。

中世水田については、広さ区割りとも現代水田とほぼ同じであり、水路（SD－1）は条里に乗っていると考えられる。本地域における水田の区割の確定時期を知りえる手がかりを得たといえよう。

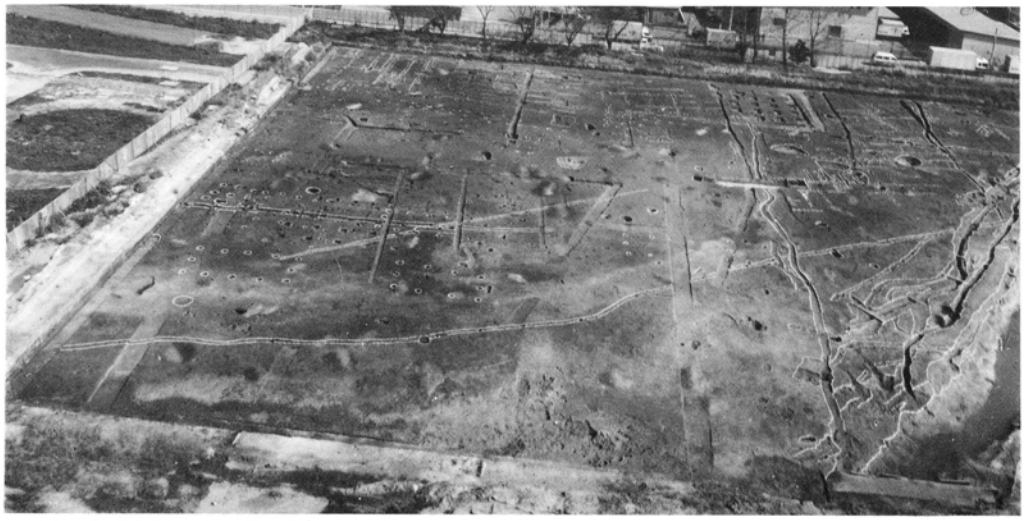
本調査は、頭初の目的はほぼ達成しえたと思う。しかし私自身の怠慢もあり、出土遺物全体について目を通せず、整理・報告に充分なる時間を使えなかったのが残念である。

※　ヒノキ製の木製皿（198）について、奈良国立文化財研究所に年輪年代測定を行なっていただいた結果、759年より古くならないという年代測定値が得られたことを報告しておく。年輪年代測定については、第2次調査報告に収録予定である。

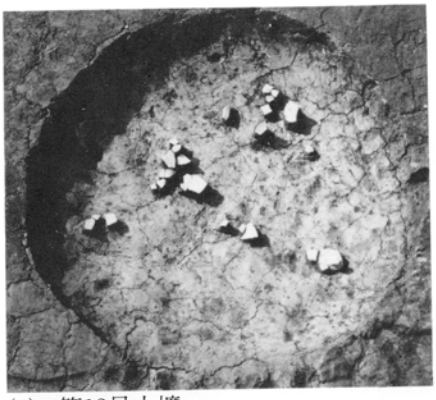
図　版

PLATES

(1)　調査区全景（北から）



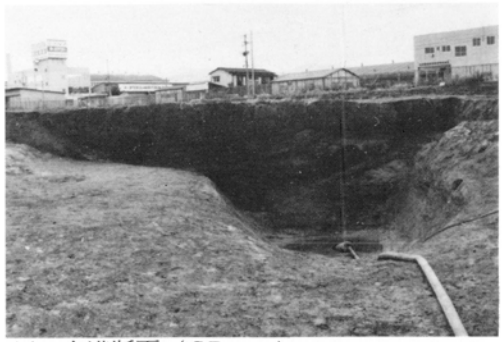
(2)　調査区全景（西から）



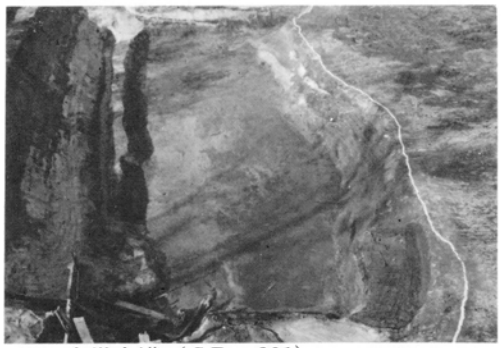
(1)　第12号土壙

(2)　第14号土壙

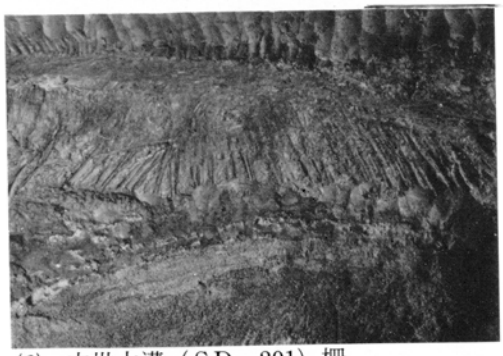
(3)　大溝（SD－1）



(4)　大溝断面（SD－1）



(5)　中世大溝（SD－291）

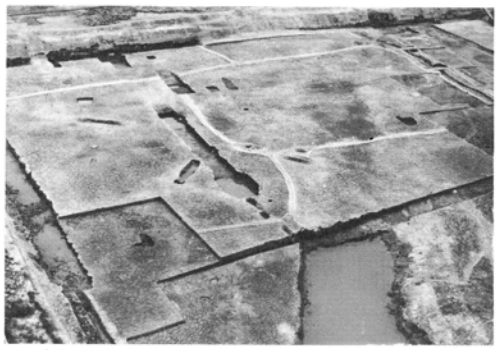


(6)　中世大溝（SD－291）柵

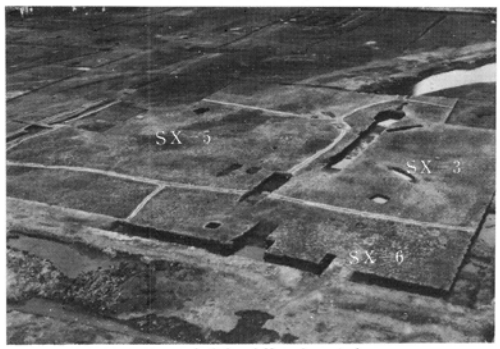
(7)　第292～294号溝（SD－292～294）

(8)　大溝北の柵列

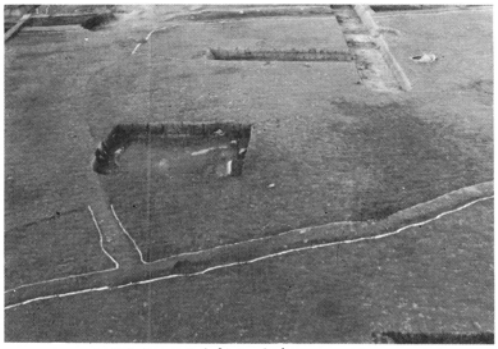
(1)　中世水田全景（北東から）



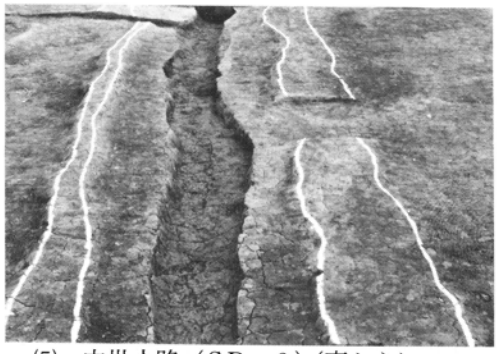
(2)　中世水田全景（南東から）



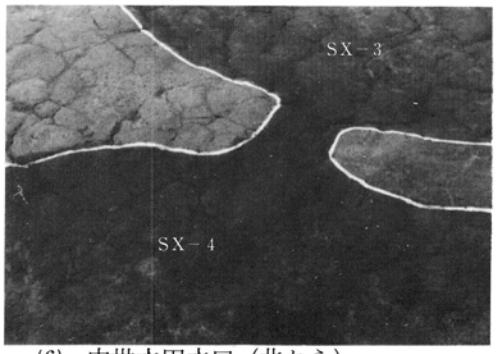
(3)　中世水田全景（北西から）



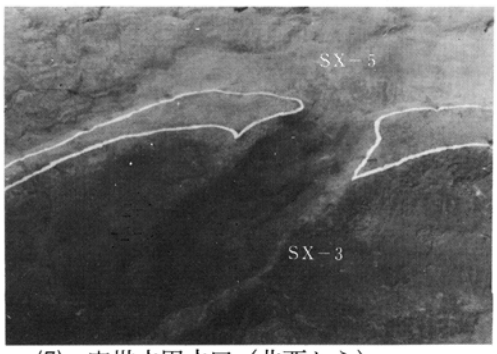
(4)　中世水田（南から）



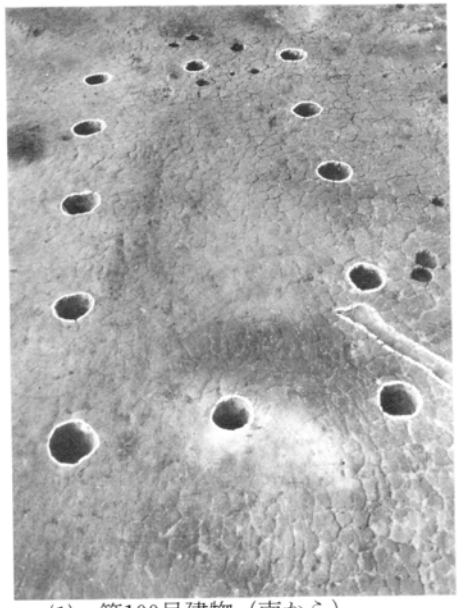
(5)　中世水路（SD－8）（東から）



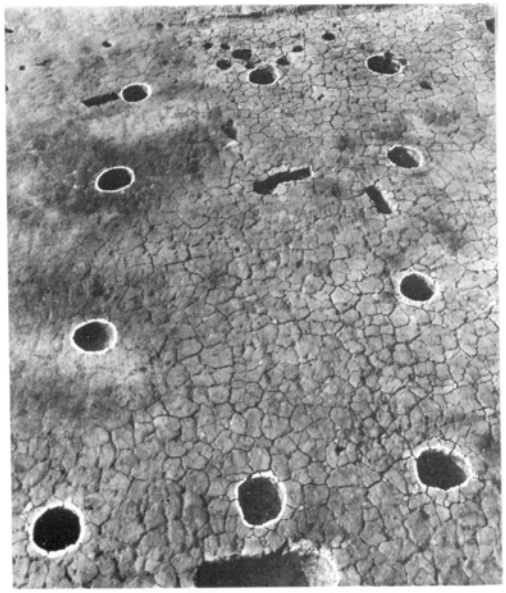
(6)　中世水田水口（北から）



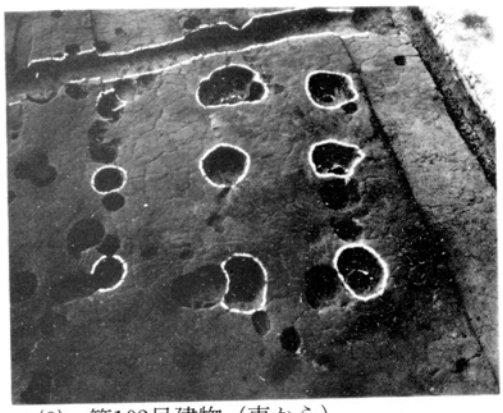
(7)　中世水田水口（北西から）



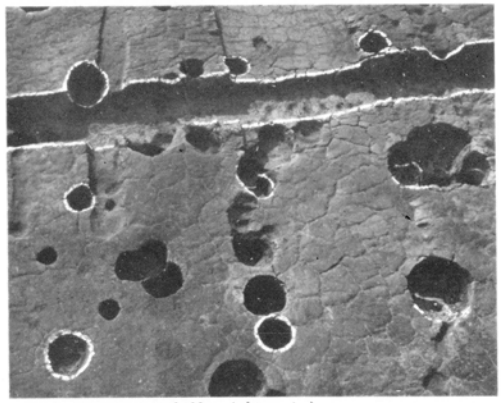
(1)　第100号建物（南から）



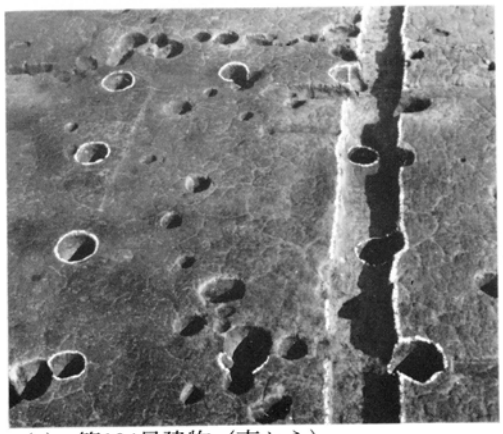
(2)　第101号建物（南から）



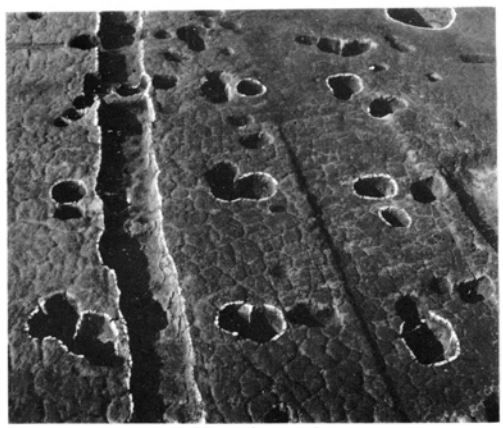
(3)　第102号建物（東から）



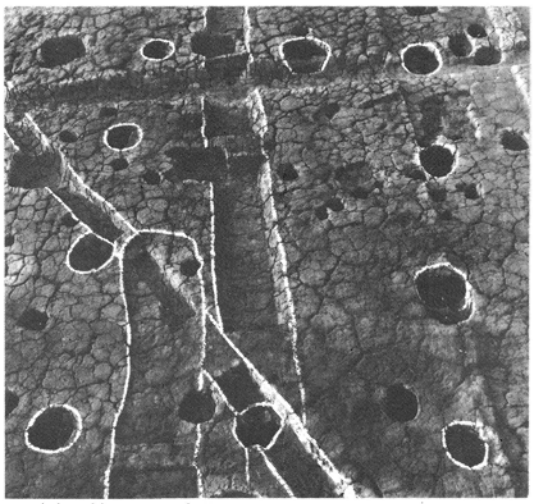
(4)　第103号建物（東から）



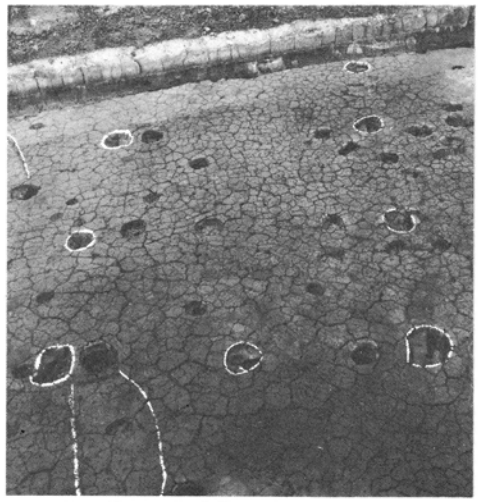
(5)　第104号建物（南から）



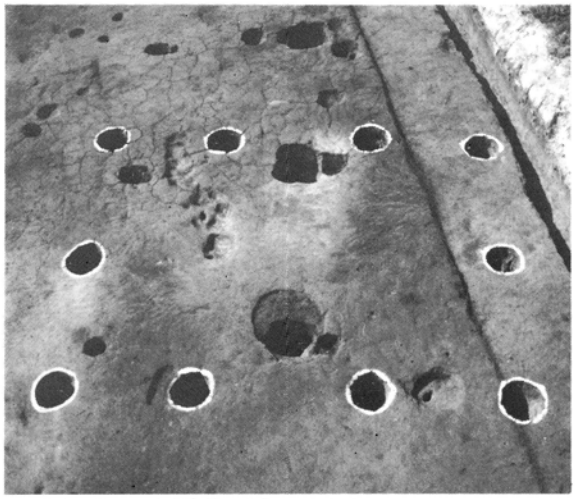
(6)　第105号建物（南から）



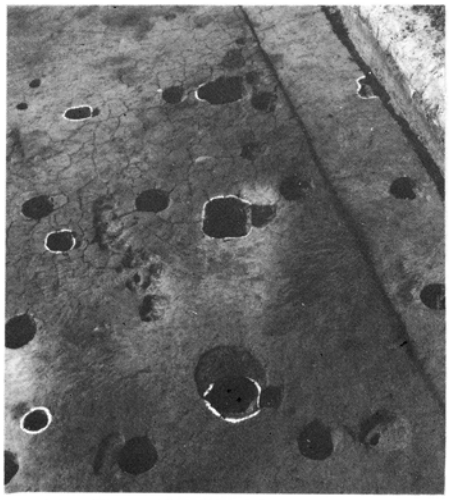
(1)　第106号建物（南から）



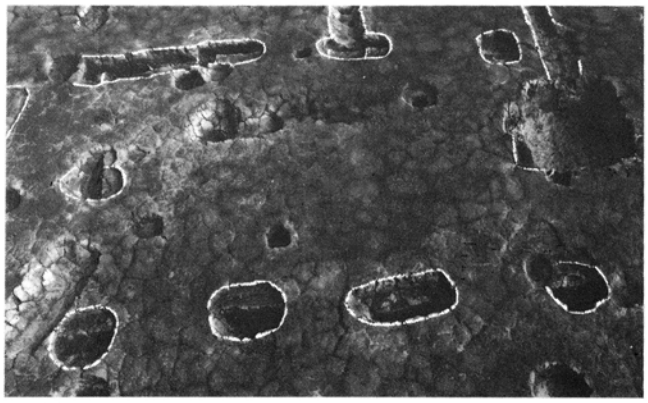
(2)　第108号建物（南から）



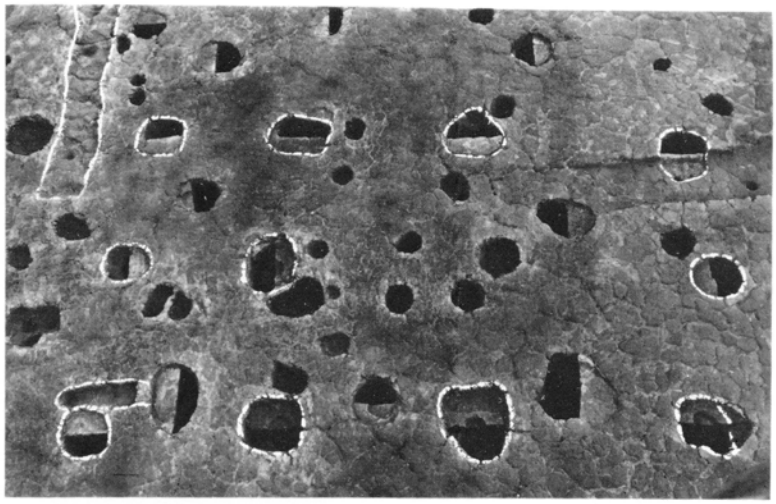
(3)　第109号建物（東から）



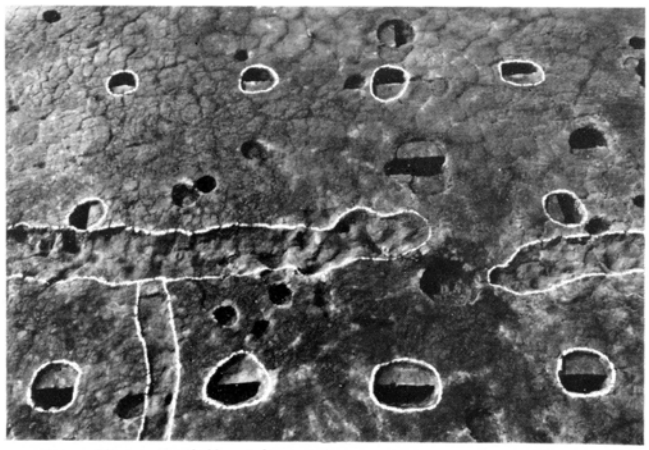
(4)　第110号建物（東から）



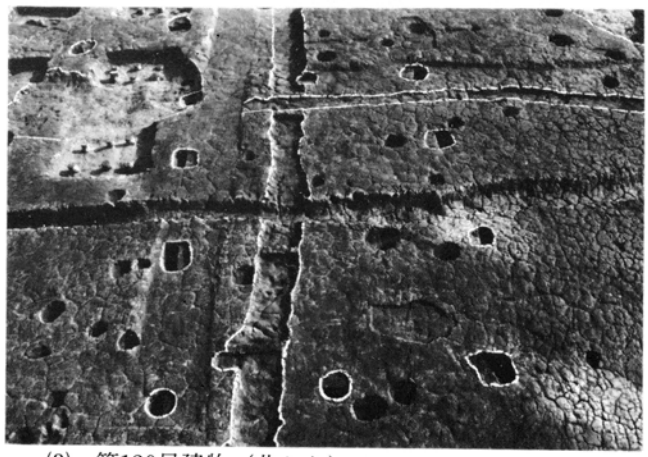
(5)　第111号建物（西から）



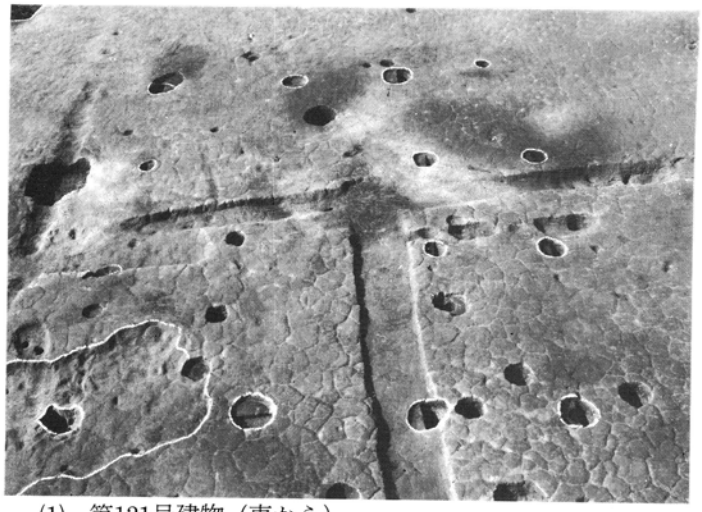
(1) 第117号建物（北から）



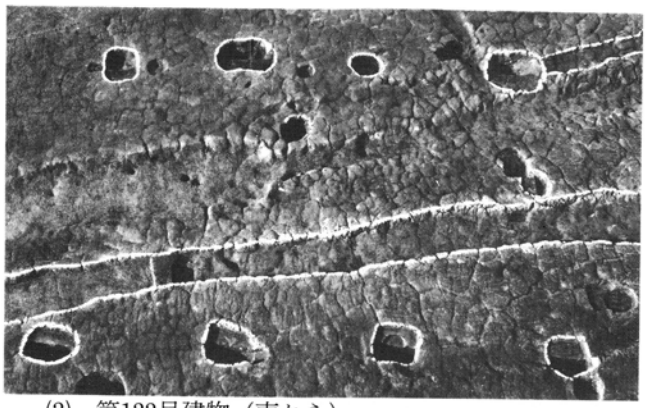
(2) 第119号建物（東から）



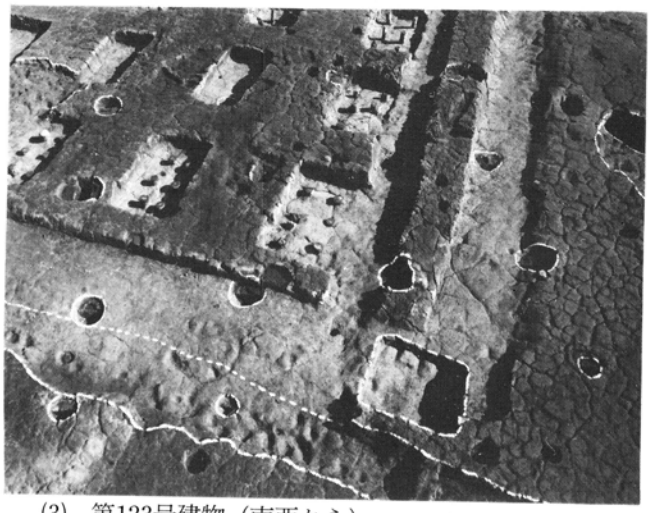
(3) 第120号建物（北から）



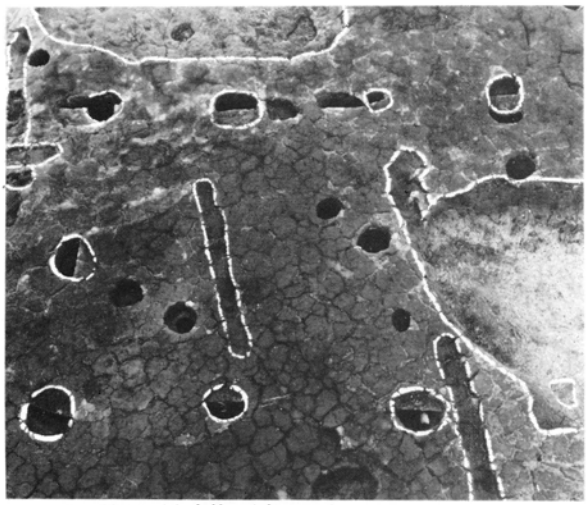
(1) 第121号建物（東から）



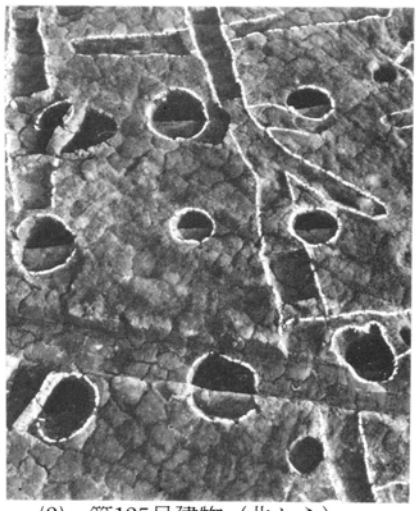
(2) 第122号建物（南から）



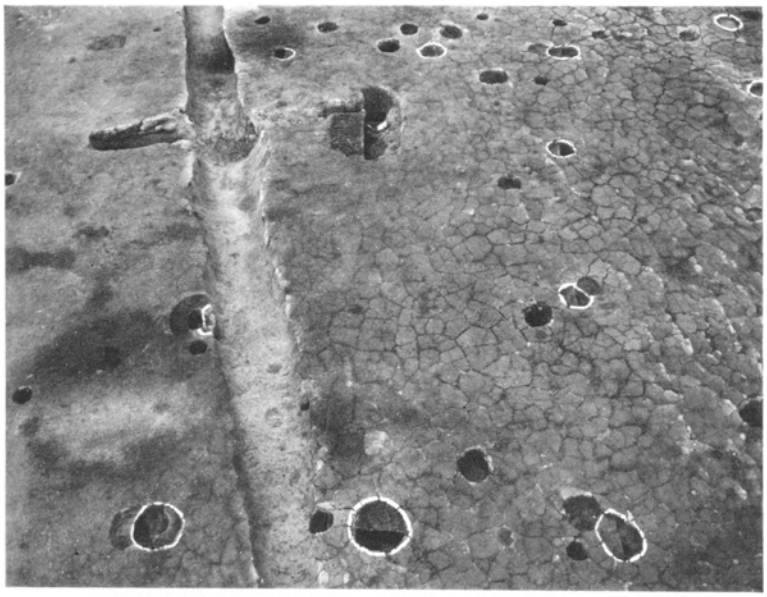
(3) 第123号建物（南西から）



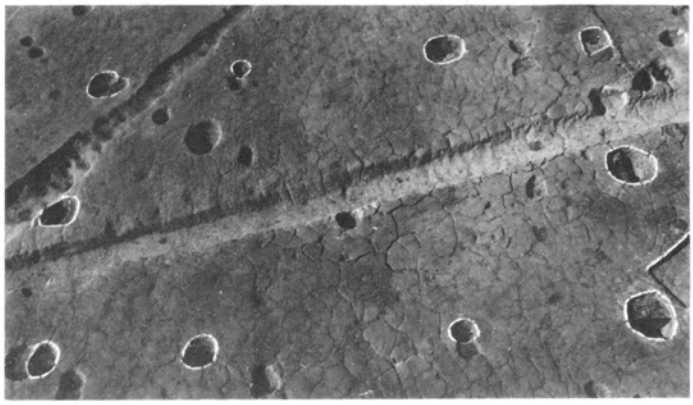
(1)　第124号建物（東から）



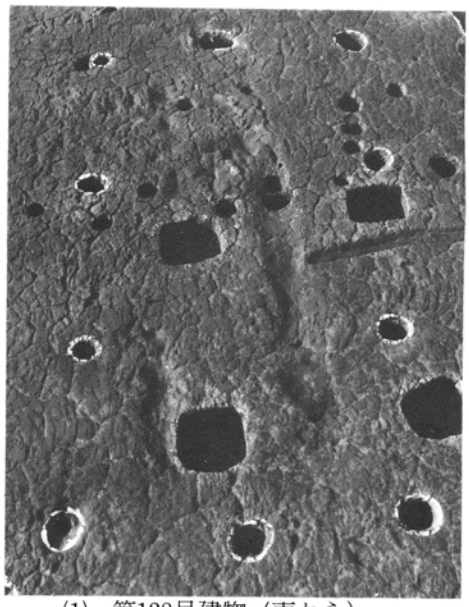
(2)　第125号建物（北から）



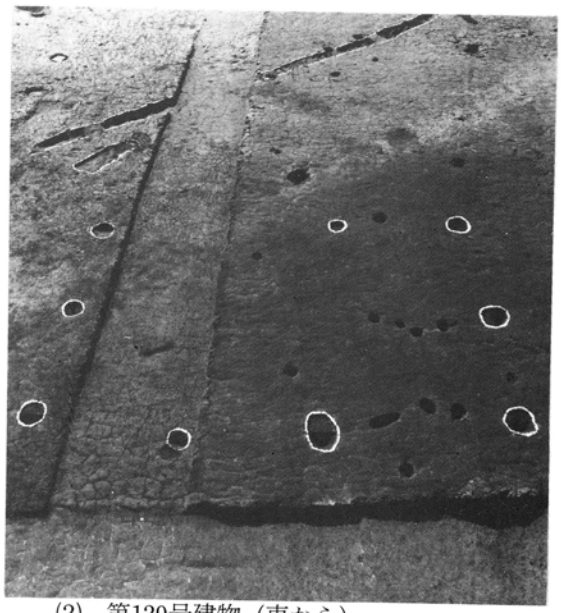
(3)
第126号建物
（南から）



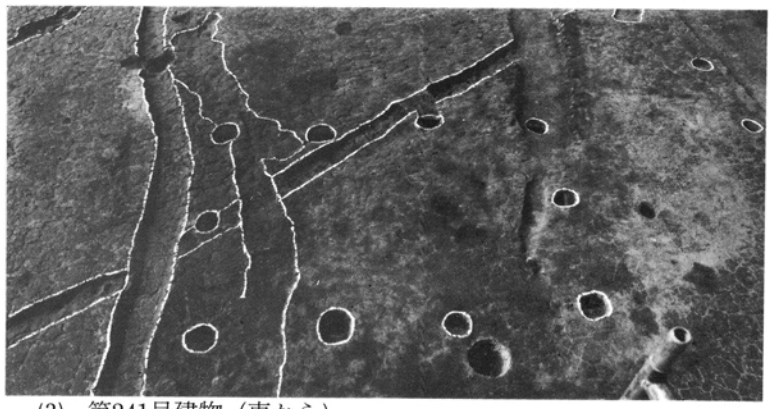
(4)
第127号建物
（東から）



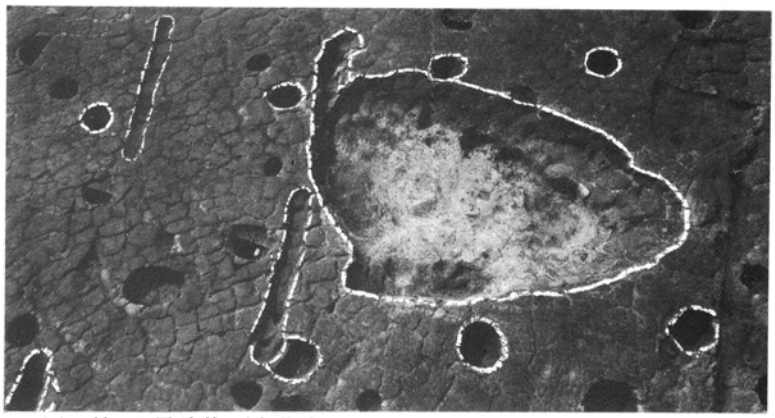
(1) 第128号建物（南から）



(2) 第129号建物（東から）

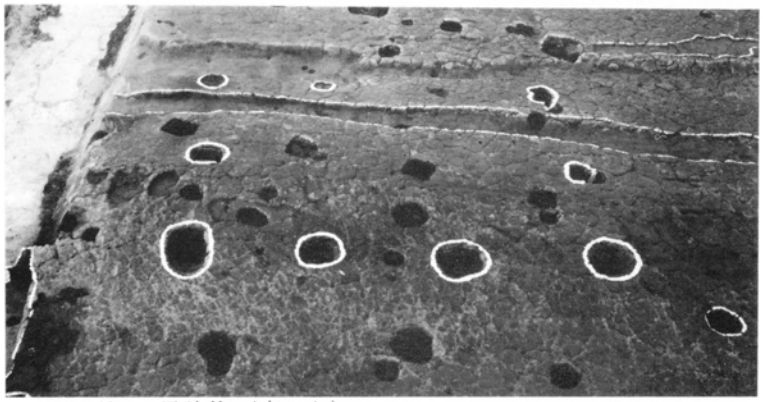


(3) 第241号建物（東から）

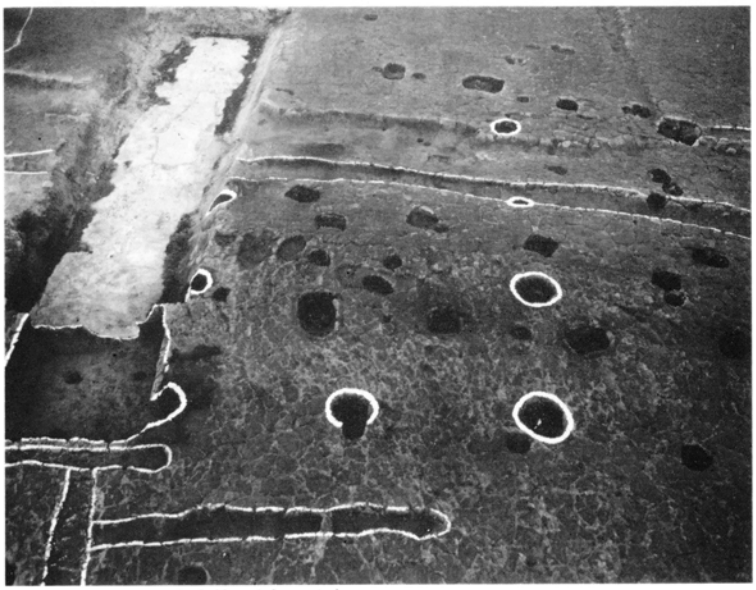


(4) 第242号建物（東北東から）

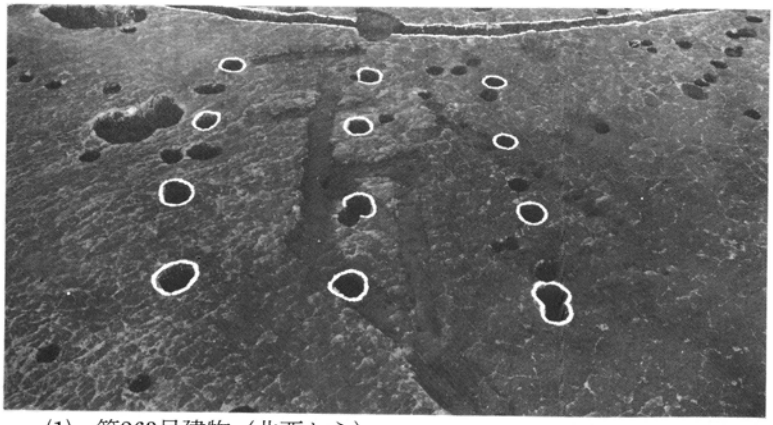
(1)　第244号建物



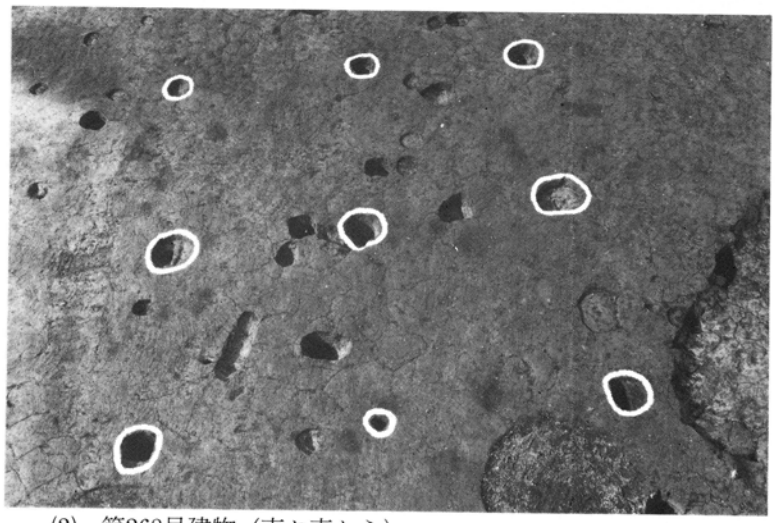
(2)　第245号建物（南から）



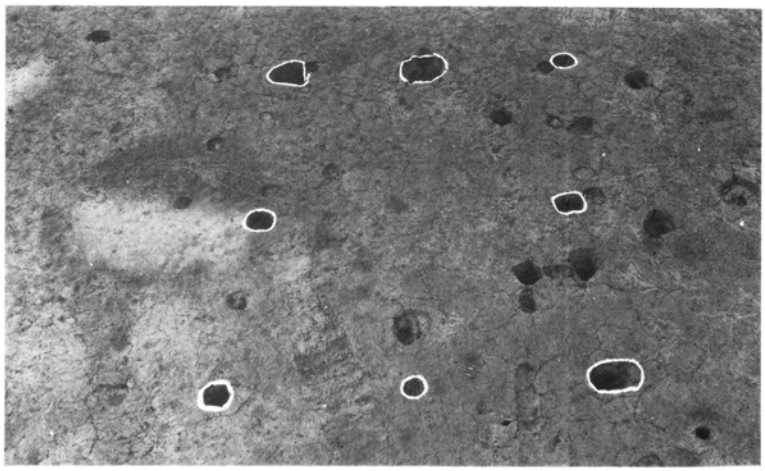
(3)　第261号建物（南から）



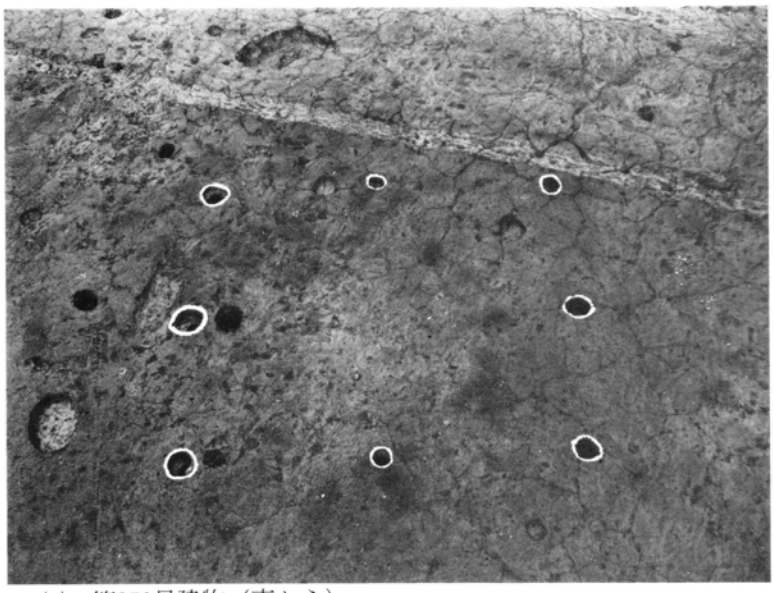
(1) 第263号建物（北西から）



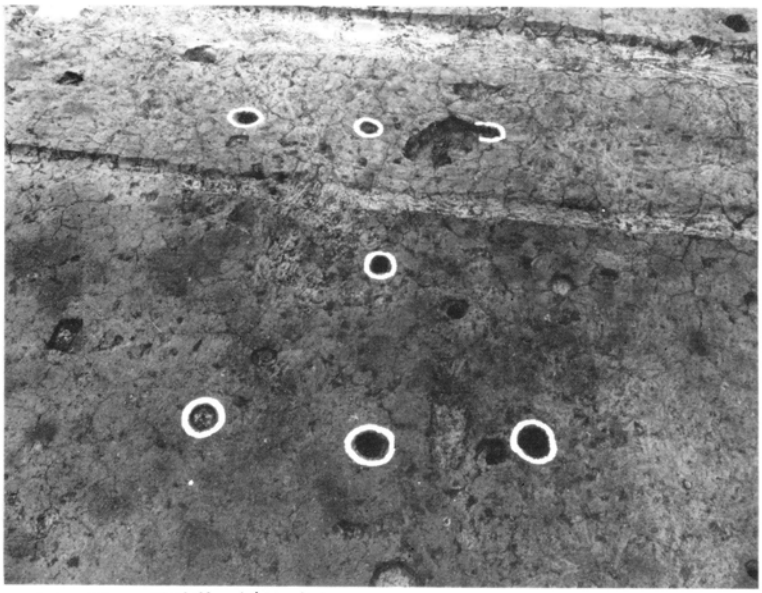
(2) 第268号建物（南々東から）



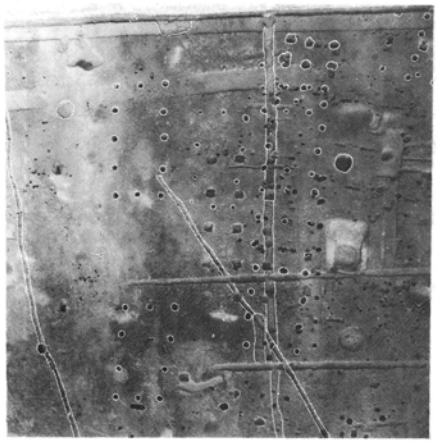
(3) 第269号建物（南から）



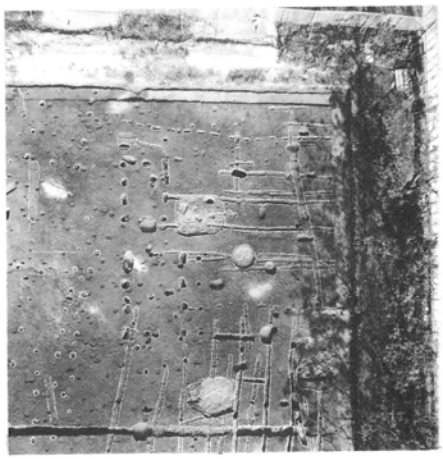
(1)　第270号建物（南から）



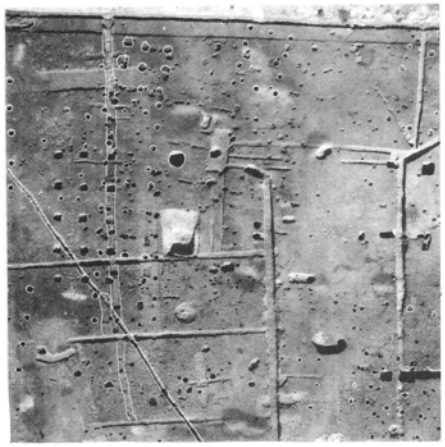
(2)　第271号建物（南から）



(1)　9、10区建物群

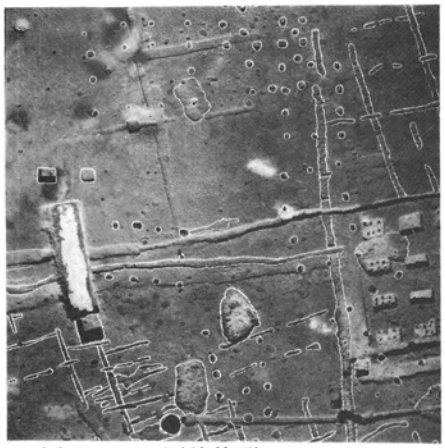


(2)　1、2、7、8区建物群

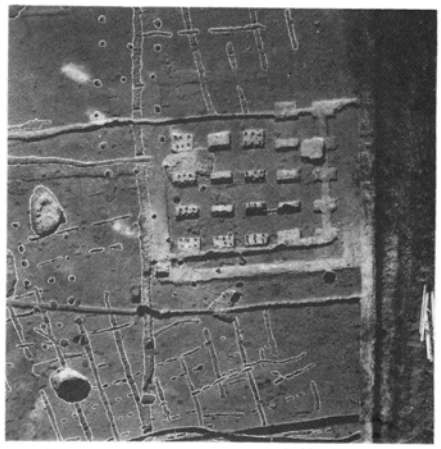


(3)　3、9区建物群

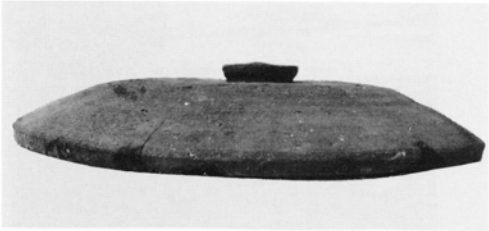
(4)　7、8、13、14区建物群



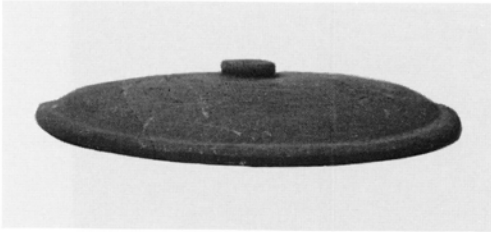
(5)　14、20区建物群



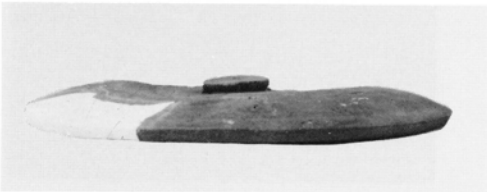
(6)　13、14、19、20区建物群



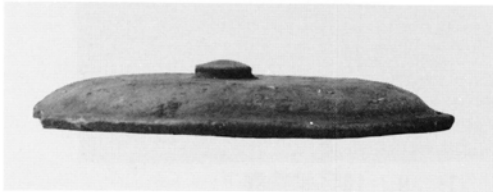
1



2

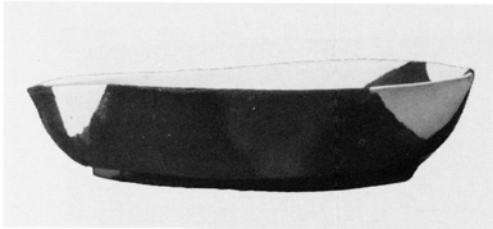


3



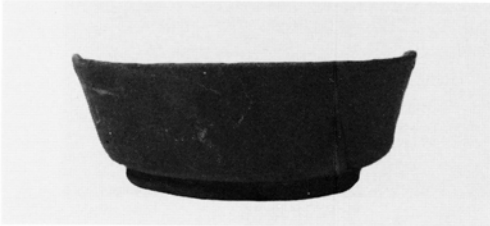
6

7

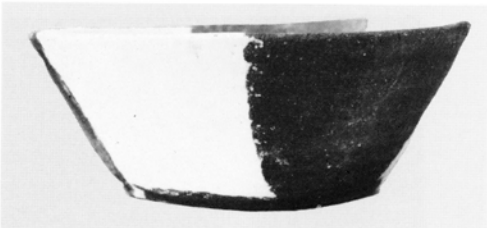


8

15

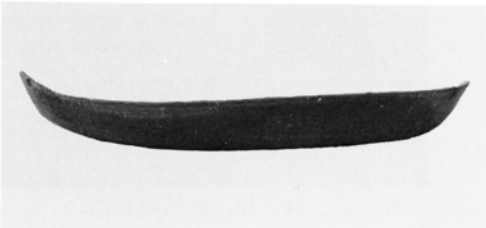


17



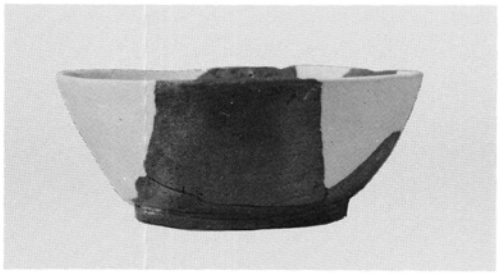
22

29



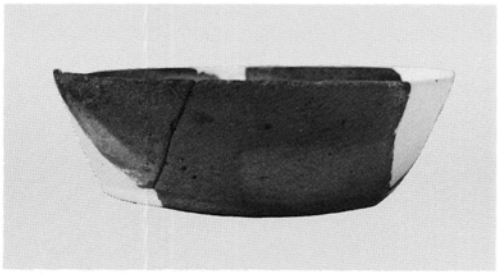
32

大溝（ＳＤ－１）上層出土須恵器

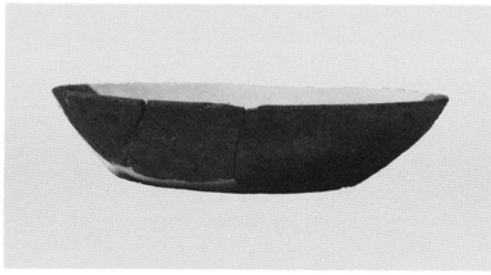


38

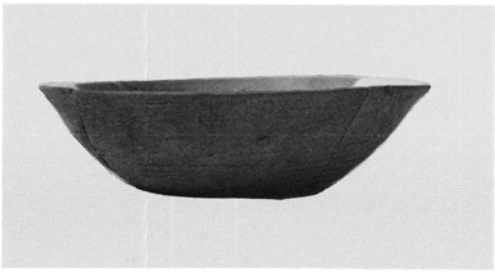
40



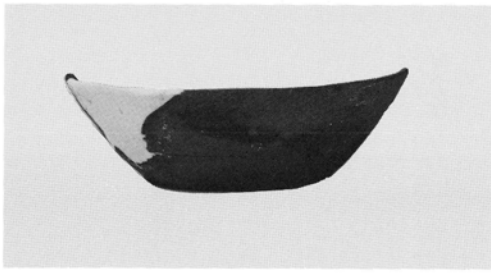
46



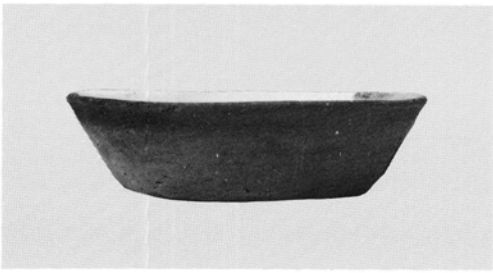
48



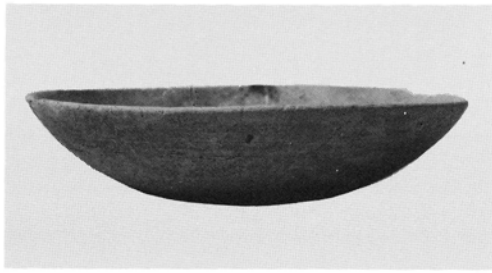
49



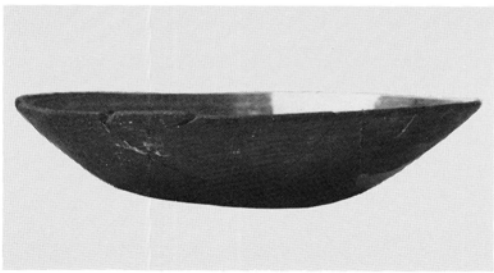
51



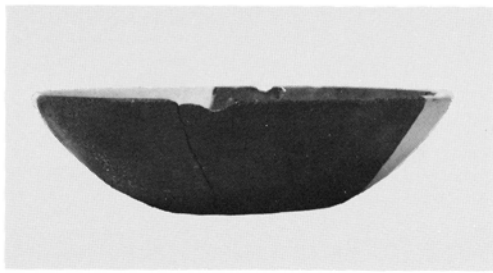
55



58

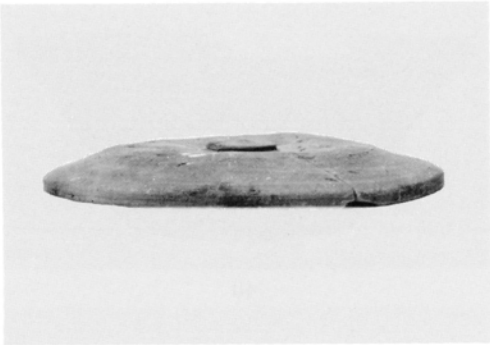


59

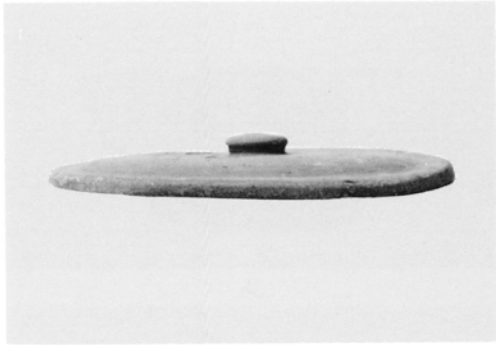


60

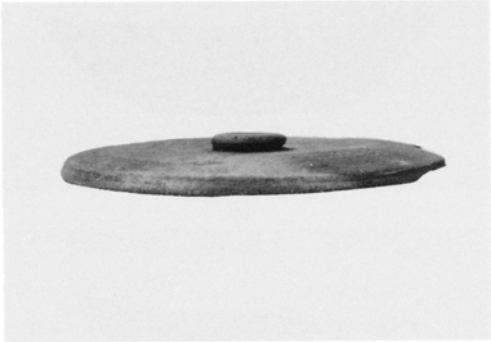
大溝（ＳＤ－１）上層出土土師器



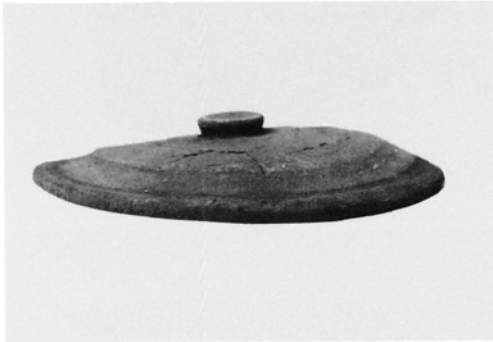
117



119

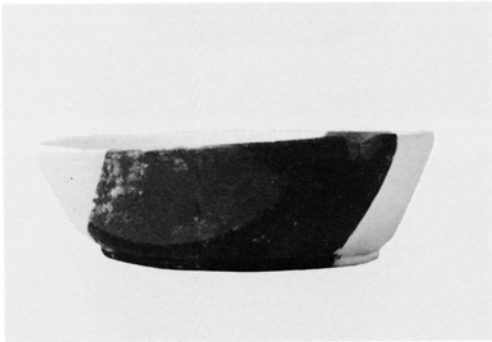


120

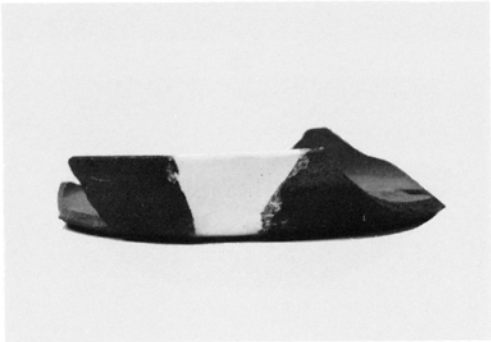


121

133



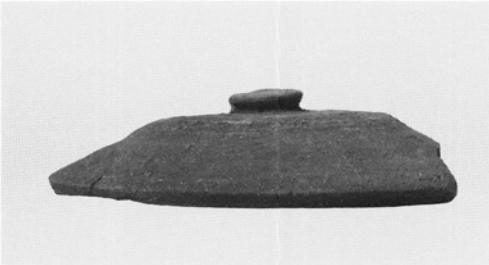
134



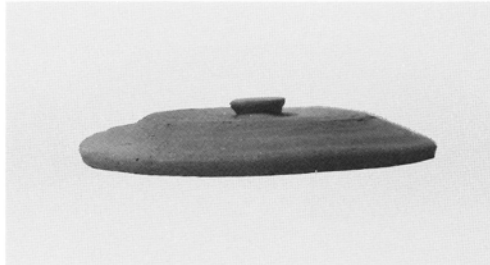
138

139

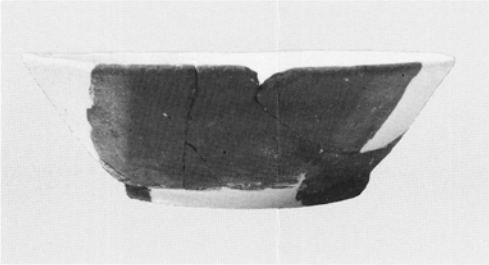
大溝（ＳＤ－１）下層出土須恵器



147



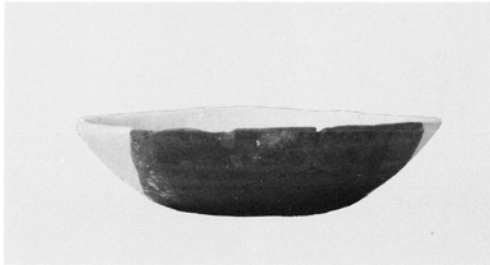
148



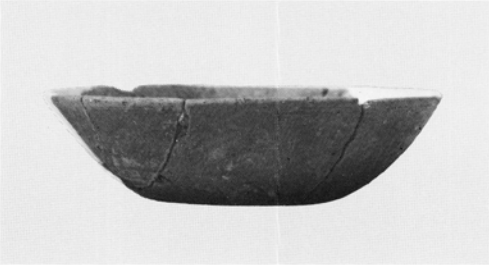
152

153

154

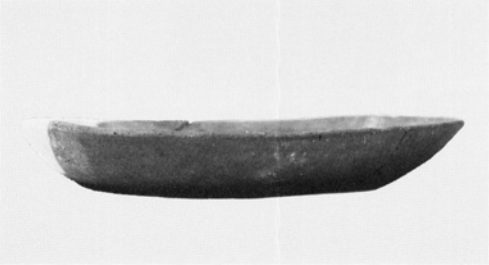


155



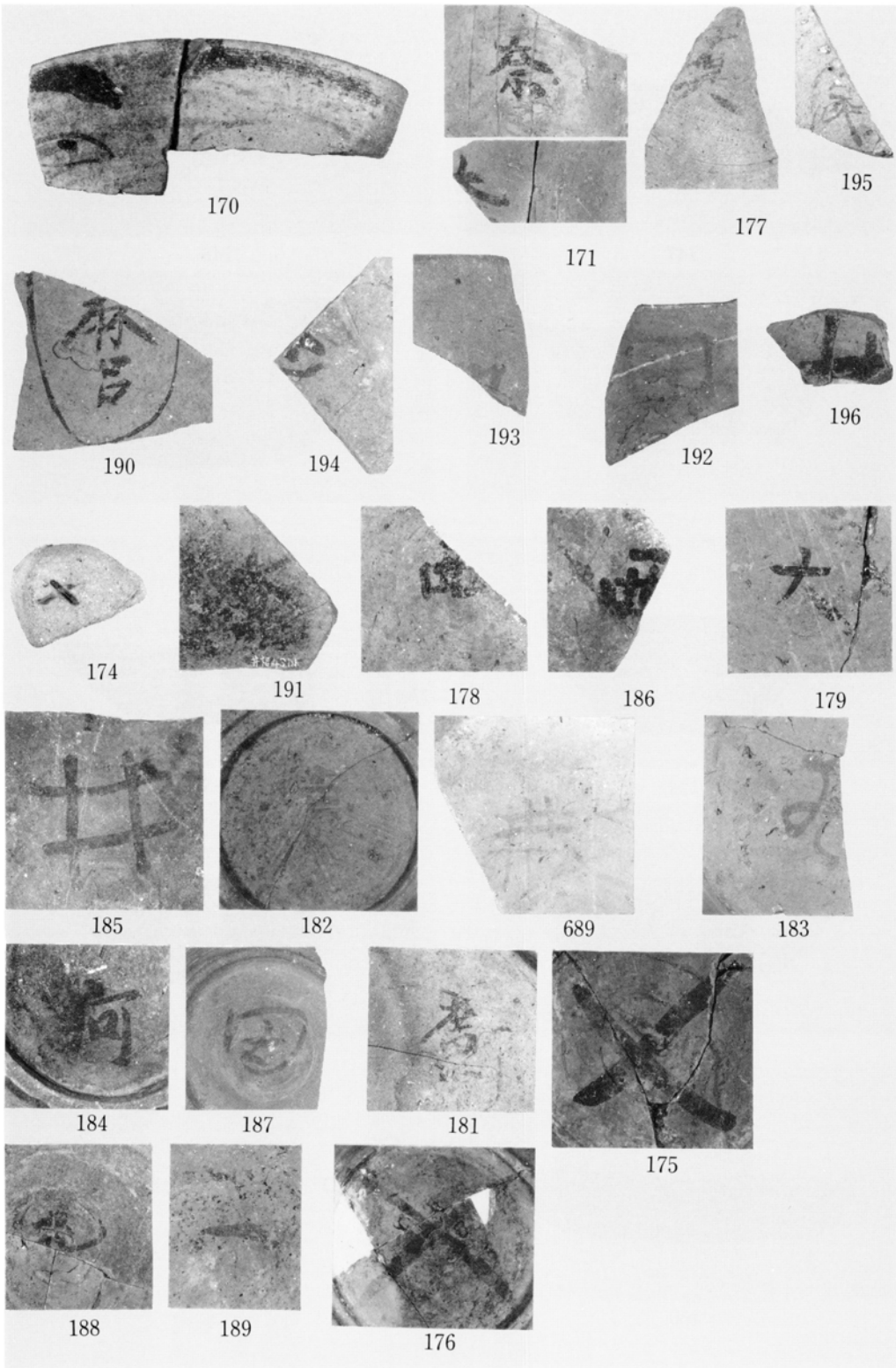
156

157

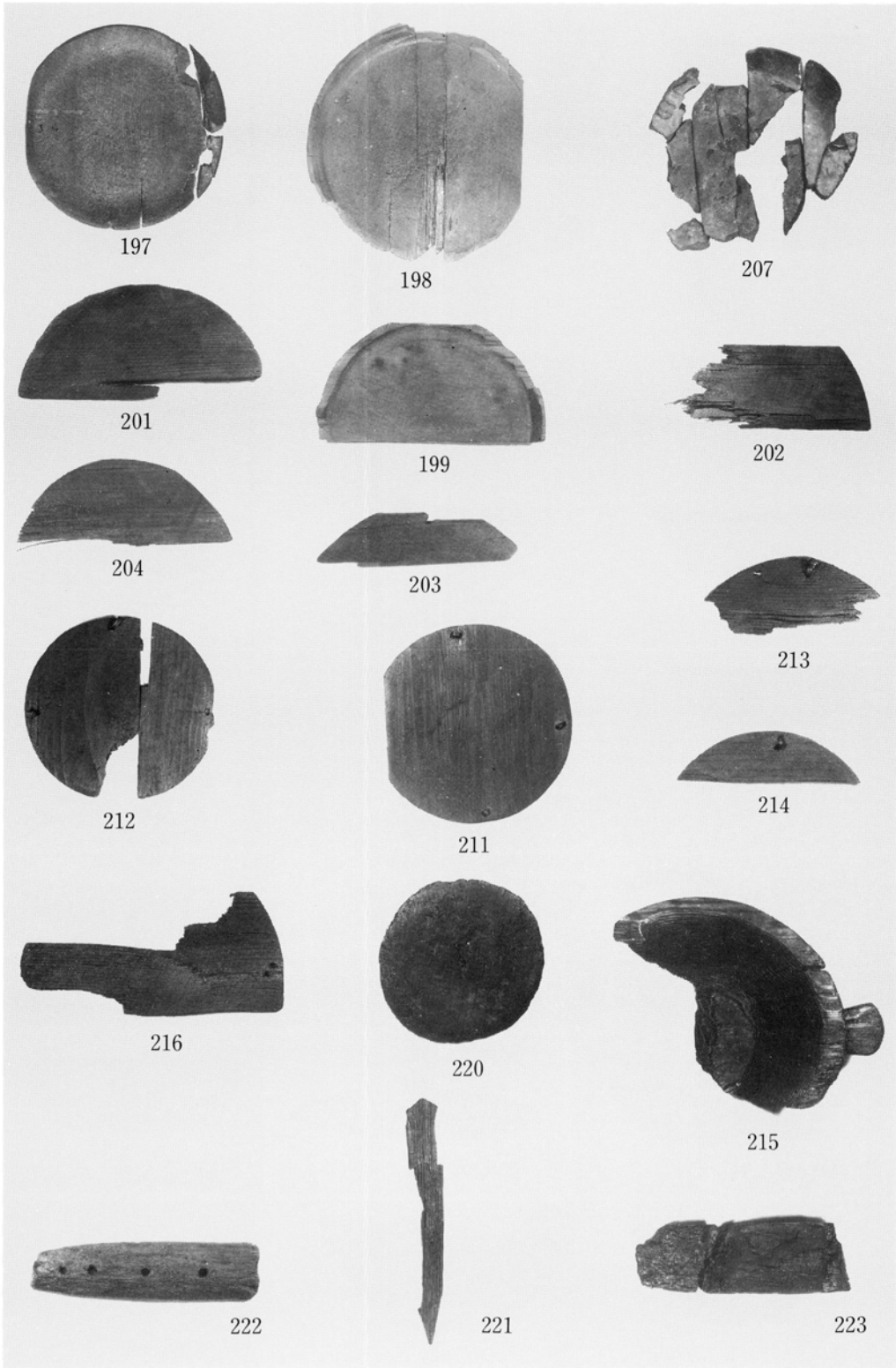


160

大溝（ＳＤ－１）下層出土土師器



大溝（SD－1）出土人面墨書及び墨書土器


197
198
207
201
199
202
204
203
213
212
211
214
216
220
215
222
221
223

大溝(SD－1)出土木器

448

449

第20号土壙

第83号土壙　402

456

464

470

471

473

479

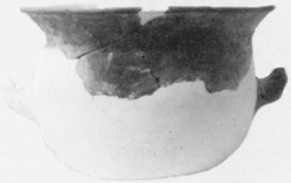
496

502

503

504

505


515

第84号土壙

第87号土壙　552

第90号土壙　581

第160号土壙　405

第164号土壙　622

第163号土壙　614

第292号溝　652

655

658

第293号溝　656

各土坑出土土器

井相田C遺跡 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第152集

1987年（昭和62年） 3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10－29

印　刷　㈲松古堂印刷

Fig. 3　古代遺構配置図(1)

Fig. 4　古代遺構配置図(2)

Fukuokashi Maizô Bunkazai
Chosa Hôkokusho No.152

Isôda C Site I

Location :
2 chôme, Isôda,
Hakata-ku, Fukuoka-city
Duration of Investigation :
May - December 1985

1987

Fukuokashi Kyôiku Iinkai